《翻　訳》

ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ『ナオ船サント・アルベルト号難船記』(1597 年)

—ヴィラ・ヴィソーザ，ブラガンサ家所蔵初版本からの全和訳およびテキスト校訂—

(承前)

Tradução integral japonesa do *NAVFRAGIO DA NAO S. ALBERTO, E ITINERARIO DA GENTE, QVE DELLE SE SALVOV* (Lisboa, 1597) da autoria de João Baptista Lavanha

日埜 博司

キーワード

『海難悲話』，ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ，ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラ，カフル人，銅，ウシ，物々交換，ガイド(道案内)，野営，銃砲(エスピンガルダ，アルカブース)，アンコセ，ジンバククーバ，ガマベーラ，ロウレンソ・マルケスの河(湾)，ソファーラ，モサンビーク，ウニャーカ，“布教”，友好的交歓

訳者序

イスパニア=ポルトガル同君連合時代(1580～1640)のハプスブルク家に主席天文学官(Cosmógrafo-mor)などとして仕えたポルトガル人ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ(João Baptista Lavanha. 以下，ラヴァーニャと呼ぶ)が執筆し 1597 年にアレシャンドレ・デ・シケイラの工房(リスボア)で印刷された『ナオ船サント・アルベルト号難船記』(以下『ア号難船記』と略称する)の全文和訳を前々回・前回(『流通経済大学論集』通巻 156 号・157 号，2007 年)に引き続き掲載する。

ポルトガル人書誌学者ベルナルド・ゴメス・デ・ブリット(Bernardo Gomes de Brito. 1688～?)が編纂した『海難悲話』(*História Trágico-Marítima*)には，16 世紀から 17 世紀にかけてカレイラ・ダ・インディア(Carreira da Índia. リスボアと，インド亜大陸西岸のゴアやコーチンを喜望峰廻りで結ぶ，ポルトガル帆船の定期航路)において生じた海難事故と，それに附随して惹起したもろもろの出来事に関する十数種の記録が収められている。『ア号難船記』もこの『海難悲話』収載のテキストのひとつであるが，今回は『ア号難船記』を『海難悲話』所収のテキストではなく，ヴィラ・ヴィソーザ，ブラガンサ家所蔵の 1597 年初版本を底本として翻訳する。さらに訳者なりのテキスト・クリティークを併載することにより，特に『ア号難船記』に関しては初版本に遡って初めて正しい解釈を得ることができる，その具体例を脚注において逐一指摘する。

今回残余の 1593 年 5 月 12 日から末尾までを訳載することにより，ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ『ア号難船記』和訳は完了する。ただし不明の点が依然として残る特許状(国王フェリーペ 2 世〔ポルトガル国王としてはフィリーペ 1 世〕みずからがラヴァーニャの著作権保護を謳ったもの)についてはできうる限り疑問を解決してから必ず別途稿を準備する。その際，中世ポルトガルにおいて宗教裁判所が実施した書籍検閲の手順，大航海時代ポルトガルで用いられたナオ船の構造，カレイラ・ダ・インディア，東南アフリカ先住民の民俗誌，等々，種々雑多なテーマにつき調べの及ぶ範囲でなるべく詳しい補注を施したいと思う。

♣

今回訳した範囲で訳者の興味を最も惹くのは，何と言っても，ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラをカピタン・モールに戴くポルトガル人一行と，彼らが遭遇したアンコセ（東南アフリカ先住民の部族長を意味する普通名詞）との間で繰り広げられる，ときに微笑ましく，ときに感動的でさえある，ヒューマンな交流のかずかずである（カフル人を威嚇することを狙って掻き集めておいた銃砲類が彼らの襲撃を防ぐ有効な抑止力として機能したこと，カフル人との物々交換に必要不可欠な鉄・銅をまずまずの秩序をもって管理し得たこと，これらが，『ア号難船記』に描かれるとおりの“友好的”な交渉の素地となっただけ，と言えばそれまでかもしれないが）。そのクライマックス・シーンは 6 月 14 日の記事に見える。感極まって躍動するかの如き筆致は，もはや行進も終盤に近づき，ポルトガル人の交易地であるロウレンソ・マルケスの河（現，マプート附近）へ無事辿り着けそうだ，さらにはそこで便船を得，根拠地モサンビークへ達することができるかもしれない，という明るい希望が生まれつつあることの所産であり反映であろうか。

ヌーノ・ヴェーリョとの出逢いを記念する品を何か頂戴したいと願うアンコセ（名前はガマベーラ）。彼に対しヌーノ・ヴェーリョは，たまたま見つけた適当な木から十字架を彫り出させ，これを贈呈する。ガマベーラは涙を流してこの十字架を喜び家へ持ち帰る。ヌーノ・ヴェーリョはアンコセに十字架にまつわる“現世利益”を説き聞かせるのであるが，これがまた何とも本エピソードへ妙な現実感を与えるのだ（というのは，キリシタン時代のイエズス会宣教師が日本人キリシタンを相手にこれと類似する行動をとることがままあったから）。ヌーノ・ヴェーリョはこう述べる。

「このしるし〔十字架〕を家の前に供え，毎朝家を出るたびに，これに接吻して敬意を払うか，さもなくば跪いて礼拝するように。御家来の衆に健康を損ねる者が出たり，耕地に降雨が足りなかったりという事態が出来しても，確信をもってこのしるしに祈りを捧げなさい。十字架で殺されることにより全人類を救い給うた神の独り子が貴殿の望むものを何であれ与えてくださるであろう」

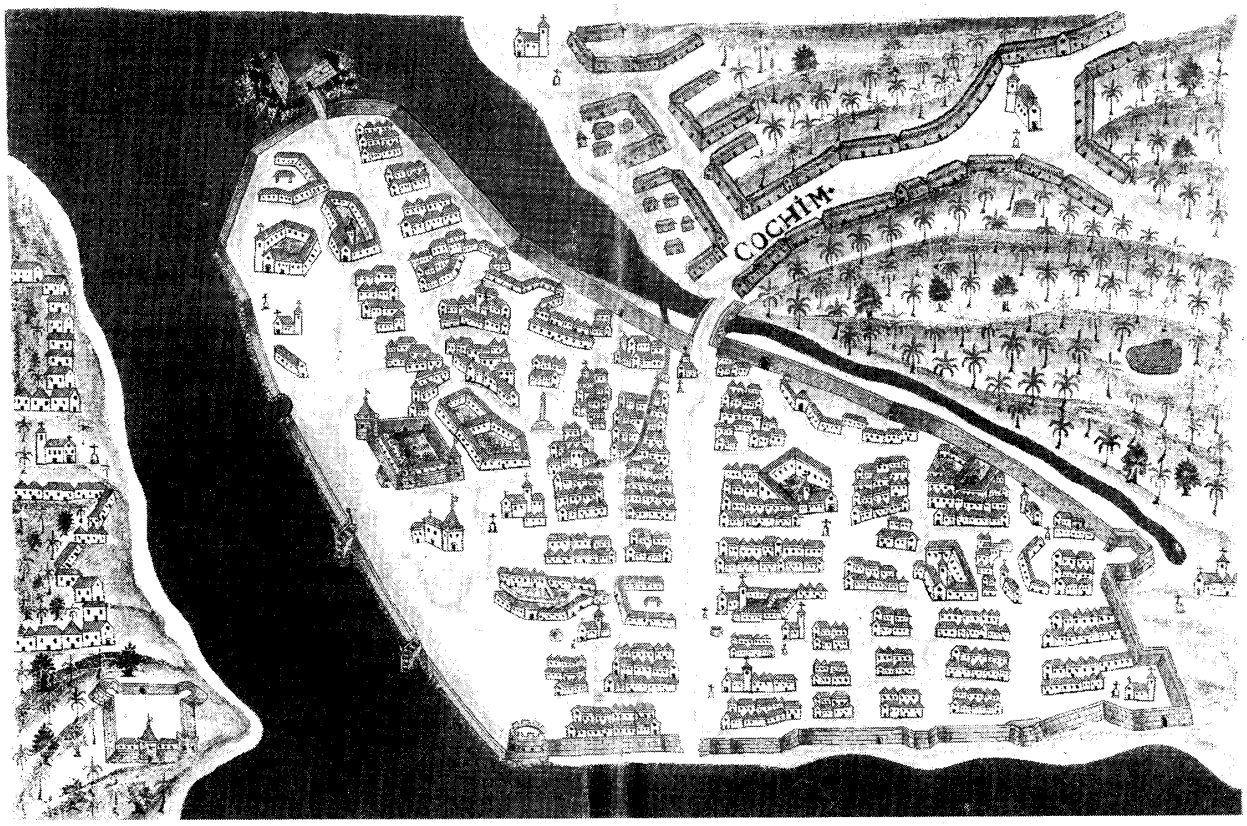
このエピソードが果たして実話なのかどうか，穿鑿したり検証したりすることは，不可能に近いし，そもそもあまり意味がないと思われる（訳者個人としてはこれを荒唐無稽なフィクションだとは決して見なさない）。それにしてもヌーノ・ヴェーリョは聖職者ではない，身分あるとはいえ俗人のフィダルゴにすぎない。極限状況を抜け出し多少心にゆとりが出た頃とはいえ，苦難多い旅のさなかこのようにドラマティックな“布教”活動を一介の俗人が堂々演じてみせる。少々ユーモラスにさえ映る行動であるが，ともかくも熱狂的な宗教性の発露と言うほかはない。上掲の如き行動の背景にあるメンタリティーこそ，大航海時代におけるポルトガル人の海外発展を精神的に支えた一大要素であったことには，疑いの余地がない。ポルトガル人がもっぱらおのれの視点に立って書き留めた本エピソードへ過剰にナイーヴな反応を示したり無批判な讃辞を呈したりするのは明らかに禁物ではあるけれど，西欧列強によって冷厳たる植民地収奪システムがブラック・アフリカに根づいてしまう以前，1593 年 6 月 14 日のくだりに見えるが如き，ヒューマンでスピリチュアル（？）な交流が，ふたつの異民族の間に確かに展開したのである。

珍重すべき歴史の一齣と評してよいのではないか。

前回までのあらすじ

1593 年 1 月 21 日にインドのコーチンを出港，リスボアへ帰航の途に就いたポルトガルのナオ船サント・アルベルト号。造船上の手抜きや整備の不備，さらには船客の貪欲に由来する財貨の過剰な積載が災いし，喜望峰周航を目前に難船する。上陸に際し少なからぬ死者が出るが，生き延びたポルトガル人はヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラをカピタン・モールに選出，結束を乱す行動をとらぬという宣誓を行なう。バントゥー系先住民——ポルトガル人はカフル人と呼んだ——との物々交換に際して必要となるであろう鉄・銅その他をナオの残骸から掻き集め，自衛のための武器もできる限り回収して，4 月 1 日いよいよ行進を開始する。とりあえずの目的地はポルトガル人の交易地として賑わうロウレンソ・マルケス（現，モサンビーク共和国の首都マプート）。行進中一行の生命を支えたのは先住民との物々交換であった。銅を差し出しその見返りにウシをもらうというのが基本スタイル。私どもの今日的な眼からすると，ポルトガル人の差し出す文字どおりの“粗品”に対し，先住民は何とも鷹揚な対価——ウシ—

—を与えているという印象を拭えない(ところがポルトガル人は物々交換においてみずからのほうこそ太っ腹であるという趣旨の発言を繰り返したようだ)。道案内はカフル人が謝礼を受け取ることにより，通常，その部族長(アンコセ)が支配する地域に範囲を限定して行なわれた。他のアンコセが支配する土地に入れば，そこに住む別のカフル人へ上記の役目は引き継がれた。ガイドを失えばピロットの天測に従い進路が決定された。各地で出逢ったもろもろのアンコセとの交流は概して友好的で，一行は彼らから手厚い保護を受ける(その保護を受けるためにも，ヌーノ・ヴェーリョは物々交換の元手のみならず，カフル人を威嚇するに有効な銃器の確保がいかに重要であるか，を再認識する)。病気等で力尽き行進に耐えなくなった者を道中に残しつつ(その中にはひとりの日本人奴隷もいた)，一行は 5 月 10 日南緯 29 度 45 分の地点に到達する。



コーチンの要塞図

インド亜大陸西南岸のこの港市をサント・アルベルト号は 1593 年 1 月 21 日にリスボアへ向けて出港した。António Bocarro, *O Livro das Plantas de Todas as Fortalezas, Cidades e Povoações do Estado da Índia Oriental*, vol. III, Estampas, Lisboa, Imprensa Nacional - Casa da Moeda, 1992 より

翻訳およびテキスト校訂

〔5 月 12 日〕 翌日 10 時，一行はその丘を下り終えた。谷間には北に向かって良い道がついていた。そこを一行は半レゴアばかり行進した。一行に覆いかぶさるように木々が迫っていた。これにはイナゴマメの形をした，非常に苦い実がなっていた。やがて一行は河に到り，腿(もも)まで水に浸かりながらそれを渉った。アンコセのマボンボルカッソベーロの領地はこの河をもって終わろうとしていた。その境界を越えたところで，ガイドは新たに足を踏み入れた土地の首領を呼びにいった。首領の名をモコンゴーロといった。彼はさっそくやってきた。カピタン・モールのためにウシを 1 頭持ってきてくれた。彼はカピタン・モールとの出逢いに満悦の表情を示し，食糧およびガイドの

提供を約束した。我らと一緒にやってきたふたりのガイドがみずからの王〔マボンボルカッソベーロ〕になりかわり，食糧とガイドの提供方を申し入れてくれたのである。ふたりはかの場所まででお役御免となり，そこから引き返した。謝礼として，さらに銅のかけらふたつと，緑の彩色を施した水晶のロザリオふたつを握らせた。ふたりはたんまりお礼をもらったという態度を示したが，その場に残る連中には，やりすぎである，太っ腹にもほどがあると思われた。たちまち多くの連中も，類似の御褒美にあずかろうという欲心を起こし，われさきにガイドに志願した。そこまでガイドを務めたふたりが去ってしまった後，モコンゴーロは部落で貴殿をお待ちしていると言い残して，ヌーノ・ヴェーリョに別れを告げた。その際，ヌーノ・ヴェーリョの案内役となるカフル人数名を残した。わが一行は前進を再開し，前記の河のほとりで野営を行なうことにした。道中，この河ほど美しくも爽やかな河には出会ったことがない。河は谷底を西から東へ流れており，両岸には聳えるような岩壁が迫っていた。岩壁は一面，堂々とした，樹冠の形成された，さまざまな色彩の木々に覆い尽くされていた。

xij. [12 de Maio]

Acabarão de decer o outro dia do Mõte ás dez horas, havia no Valle bom caminho ao Norte, pello qual forão os Nossos como meya legoa, cubertos de hum Arvoredo com fruita muy amargosa da feição de Ferrobas, té chegarem á hũa Ribeira, que vadearão, dandolhe a Agoa pella coixa. Terminava esta Ribeira a terra do Ancosse Mabõborucassobelo, pello que passada foy hũa Guia chamar o Senhor daquella em que estava, cujo nome era Macongolo. Veo logo trazendo hũa Vaca ao Capitão Mór, mos/fol.89/trandosse muy contente de o ver, & promettendo que daria os Mantimentos, & as Guias, que os dous Negros, que vinhão com os Nossos, lhe pedirão da parte do seu Rey. E porque té aquelle lugar era a sua jornada, delle se voltarão, com mais dous pedaços de Cobre, & dous Rosarios de Cristal goarnecidos de verde, cõ que se ouverão por tambem[1] pagos, que pareceo aos que ficavão excesso, & prodigalidade, & cobiçando outra semelhãte satisfação, se offerecerão logo muitos pera o mesmo officio. Hidos os dous Negros, & despedido o Mocangolo de Nuno Velho pera o esperar nas suas Povoações, deixandolhe algũs Cafres, que lá o guiassem, levantousse o Arrayal, & foy fazer o Alojamento ao longo da mais fermosa, & fresca Ribeira, que por todo o caminho se havia visto. Corria de Oeste á Leste, por hum Valle metido entre altos Rochedos, todos cubertos de grãdes, & copadas Arvores de diversas cores.

〔5 月 13 日・14 日〕 我らはこの河辺の心地良さに惹かれてそこに 1 日滞留した。河にはその美しさにちなみフローレス・フェルモーザス〔麗しき花々〕という名前が与えられた。黒人はこの河をムタンガーロ[2]と呼ぶ。わが一行は 5 月 14 日（なごりを惜しみつつ）この河をあとにした。アンコセ〔モコンゴーロ〕に提供してもらった黒人ふたりが一緒であったが，その謝礼としてヌーノ・ヴェーリョが差し出したものにアンコセはまんざらでもない様子であった。11 時に小休止し，木蔭に入って暑熱の時間をやり過ごした。そこへガイドたちの妻がやってきた。それぞれの手に実においしいバターの入ったヒョウタンを携えていた。我らは銅 6 レイス相当との引き換えでそれを手に入れた。しかしヌーノ・ヴェーリョはわざわざバターを届けてくれた奥方の厚意にも報いたいと考え，半分に分けてふたつにした水晶製のロザリオを進呈した。奥方ふたりはこれをひどく喜び，ガイド役の夫たちもありがたがった。

---

[1] 初版本にも海賊版にも "tambem" とあるが，"tam bem" と 2 語に分解するとより自然な解釈が成立する。拙訳では 2 語に分解して生ずる解釈に仮に従っておく。

[2] ウムジンクル Umzimkulu 河（George McCall Theal, *The Beginning of South African History*, London, 1902, p.299. Apud *The Tragic History of the Sea 1589-1622. Narratives of the shipwrecks of the Portuguese East Indiamen São Thomé (1589), Santo Alberto (1593), São João Baptista (1622), and the journeys of the survivors in South East Africa*, ed. C. R. Boxer, Works issued by the Hakluyt Society, Second Series, No. CXII, 1959 [Kraus Reprint, Millwood, N.Y., 1986], p.153, note 4）。

xiij.; xiiij. [13 de Maio; 14 de Maio]

Convidados os Nossos da fresquidão /fol.90/ desta Ribeira, detiverãosse nella hũ dia & por sua belleza lhe poserão nome das Flores fermosas. E os negros lhe chamão Mutangalo. Partirão della (com saudade) aos quatorze de Mayo com dous Negros do Ancosse, que não ficou descõtente, do que lhe deu Nuno Velho, & parados ás onze á descansar da calma, debaixo de hũas Arvores, vierão as Molheres dos Guias com dous Cabaços de muy boa Manteyga, que por Cobre de valor de seis reis se resgattarão. Quiz porem Nuno Velho pagarlhes a vontade com que o trouxeraõ, & deulhes dous meyos Rosarios de Cristal, com que ellas ficarão em extremo contentes, & os Maridos obrigados.

その場所には水がまったくなかったし，我らには水が不足していたので，黒人のひとりが泉へ水汲みに行ってくれた。泉はわが一団の小休止しているところからさほど離れていない。この道中において泉の水にありついたのはこれが初めてであった。もっとも，これまでの道中で行き逢った河の水は飲み水としてきわめて良好であった。冬だというのにシエスタの時間帯の暑さは格別であった。太陽が雲間に隠れていないときはなおさらであった。暑熱をやり過ごすと，我らは前進を再開した。道はなかなか良く，その道に 3 人の黒人が現われた。おいしそうな純白の蜂蜜がいっぱい詰まったハチの巣をヒョウタンの容器に入れて手にしていた。カピタン・モールはこれを買い取り全員に分配した。さながら新しい収穫を分かち合うかのように。夜のとばりが下りる直前，我らは涼しげな谷間に野営地を設けた。広がる谷の両側には壮大な岩山が迫っていた。谷には 15 ばかりの村落があった。その村々から黒人が現われた。皆，食糧を手にしていたので，例によっていつものおかね〔つまり銅のかけらや，釘・鋲のことであろう〕と引き換えにそれを手に入れた。

E porque naquelle sitio, não havia Agoa, & faltava aos Nossos, foy hum dos Negros buscala á hũa fonte, que pouco apartada do Arrayal estava, a qual foy a primeira, que se vio nesta jornada, sendo todas as outras Agoas excellentes, de Ribeiras, que nella encontrarão. Passado o ardor da sesta, que pos/fol.91/to que em Inverno se sentia, quando o Sol não estava cuberto de Nuvens, caminharão os Nossos por boa strada, á qual sairão tres Negros com hum Cabaço de favos de muy saboroso, & alvo Mel, que resgattado o repartio o Capitão Mór, entre todos, como fruitta nova, & pouco antes que anoutecesse, se recolherão em hum fresco Valle que entre grande Rochas se estendia, povoado de algũas quinze Aldeas, das quaes vierão Negros com muito Mantimento, que pella ordinaria moeda trocarão.

〔5 月 15 日〕 我らはそうした岩山のひとつをぐるりと一周した。それは南東方向にある岩山である。そしてそれに沿って流れる河を渉り，再び進路を東北方向へ戻したところで 10 時になった。一息入れていると，そこへ 150 人以上の黒人が男女の別なく[3]食糧を持ってやってきた。彼らが持参したもののうち，3 トスタンの値打ちがあるものとの交換でウシ 6 頭を入手した。そのほか，トウモロコシの菓子多数と，牛乳，バター，蜂蜜も手に入れた。ところでこのカフル人には彼らのアンコセが同行していた。ゴガンバンポーロという名前であった。彼はカピタン・モールにウシを 1 頭差し出した。父のゴガンバンポーロと一緒にやってきた息子も別の 1 頭を差し出した。2 頭のウシに対する見返りとして，父子へは銅のかけらふたつと，大きな釘を 2 本持たせてやった。それっきりこのふたりとは別れた。我らは平坦な土地を前進していった。平原は背の高い牧草に覆われている。平原を流れる河のほとりで

[3] 原語 "mais de 150. Negros, & Negras". ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』に記載される「550 人以上の，云々」("mais de quinhentos e cinquenta negros e negras") を誤りとみるべきである (cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, ed. António Sérgio, Vol. III, [Lisboa], Editorial Sul, 1956, p.54)。

一夜を明かした。

xv. [15 de Maio]

Rodearão os Nossos hũa destas Rochas com o rosto ao Sueste[4], & passada hũa Ribeira, que ao longo della corria tornarão fazer o caminho ao Nordeste, té as dez horas, que descansando, vierão mais de 150. Negros, & Negras cõ Mãtimento do qual se resgattou 6. Vacas, por valia de 3. tostões, muitos bolos de Milho, Leite, Manteiga, & Mel. Acompanhavão estes Cafres o seu Ancosse chamado Gogambampolo, que apresentou ao Ca/fol.92/pitão Mór hũa Vaca, & hum Filho seu, que com elle vinha, outra, & em pago dellas levarão dous pedaços de Cobre, & dous prégos grandes, com que se despedirão, & os Nossos forão caminhando por hum Campo raso, cuberto de alto Feno, no qual junto á hum Ribeiro ficarão aquella noute.

〔5 月 16 日〕 翌日の朝，きのうと同じ平原を前進しつづけると，10 時に小さな河に到達した。その河の両側にはおよそ 30 の人家があったであろう。その家々からおびただしい黒人が出てきた。ポルトガル人を見て歌声を上げ歓迎の気持ちを表わした。彼らはこの上ない親切さでもって（この親切はたっぷりと報われたのだが）我らが河を渉るのを手伝ってくれた。河向こうの村々は別の領主が治めるところであった。その首領がさっそくヌーノ・ヴェーリョを訪ねてきた。そしてウシを 1 頭差し出した。ヌーノ・ヴェーリョはそのお返しにサンゴをひとかけらと，銅のかけらをふたつ，それに水晶のコンタツを持たせてやった。それが済むと，首領は配下に対し手持ちのものを売りにきてもよろしいと許しを与えた（黒人たちは，首領の許しなしには何も行なわぬという習わしだ）。しかし彼らはいくら待っても現われなかった。我らは道中を急いでいたので，これ以上の取引はあきらめ，さっさとその場を去った。野営することにしたのは水の見つかった別の地点である。これまで必要となったときは常にそうしてきたように，手持ちのウシのうち必要な頭数だけを屠った。

xvj. [16 de Maio]

Sendo menhã do dia seguinte continuando o caminho, pello mesmo Campo chegarão ás dez horas á hũa pequena Ribeira, em que de ambas as partes haveria algũas trinta Povoações. Dellas vierão muitos Negros festejando com o seu cantar á vista dos Portugueses, & com grande afeição (que lhe foy bem paga) os ajudarao[5] passar a Ribeira. Erão as Aldeas da outra banda, de outro Senhor, que logo veyo a vesitar Nuno Velho, apresentandolhe hũa Vaca, & em retorno levou hum pedaço de Coral, dous de Cobre, & hũas contas de Cristal, com que deu licença aos seus, que viessem vender o que tinhão (naõ o custumando fazer os Ne/fol.93/gros sem ella) mas elles tardaraõ, & os Nossos apressaraõsse tanto, que se foraõ deste lugar sem resgattar nelle cousa algũa. E em outro em que acharaõ Agoa, se alojaraõ, matando das Vacas as que haviaõ mister, como se fazia sempre que era necessario.

〔5 月 17 日〕 従前どおりの良い道が続いているあいだ，我らは小休止をとらなかった。そうして 11 時までに 2 レゴアの道のりを稼いだ。そこで一息入れていると，5 人の黒人が丘の上にいるのが見えた。我らのガイドのひとりが彼らのもとへ行き，彼らを安心させて，君たちのアンコセを呼んできてくれないかと頼んだ。アンコセは丘の背後で 100 人を超えるカフル人と一緒に隠れていたのだ。その黒人が配下に伴われてやってきた。皆，アザガイア〔手槍〕で武装していた。アンコセはヌーノ・ヴェーリョに「アララ・アララ」の礼をもって挨拶し，わが領地へようこそと述べた。そして領内ではよくもてなしてあげよう，また道案内も私に任せよ，と述べた。

---

[4] 海賊版は "Sudéste" と綴る。

[5] 鼻音記号ティルを欠くが，海賊版に "ajudarão"（未来形ではなく完了過去形）とあるのが正しい。

xvj. [17 de Maio]

Em quanto durou este bõ caminho, naõ se detiveraõ os Nossos, & assi andaraõ té as onze horas duas legoas delle, & descansando viraõ em hum Outeiro cinco Negros, foy á elles hũa Guia, que os assegurou, & fez que chamassem o seu Ancosse, que com mais cem Cafres estava escondido detras do Outeiro. Veo o Negro acompanhado dos seus, & todos com Azagayas, & saudando á Nuno Velho com o seu Alala, Alala, deulhe o parabem da chegada áquella sua terra, na qual seria bem agasalhado, & delle encaminhado.

我らの一行はすぐにも行進を再開したかった。カピタン・モールがアンコセの手を取り，さあ，と前進を促すと，アンコセの家来の黒人が前に出た。そして歌声を上げながら我らを引率しやがて河のほとりに出た。しかしこの河を渉ることはさしひかえた。ひとつには夕闇が迫っていたし，いまひとつには道が河のこちら側で終わっていたからだ。河の向こう岸には緑したたる山並みが連なり，両岸には集落があった。それらの集落から，いろいろな食糧を持った連中が物々交換にやってきた。ヌーノ・ヴェーリョはアンコセへお決まりのお宝を与えたが，そのお宝とは，サンゴの枝1本と，コンタツと，銅のかけらふたつであった。こうしたものが黒人の差し出したウシ1頭の見返りとして渡された。ヌーノ・ヴェーリョがアンコセに対して配下ふたりをガイドとして差し出してくれないかと頼んだところ，ただちに提供してくれた。ふたりのうちのひとりが確言したところによると，自分はウニャーカの土地へ赴いたことがあり，そこでポルトガル人とパンガイオ[6]を見たことがあるという。この話は，結局嘘とわかるのだが，わが一同を極度に喜ばせた。彼らには次のように思われたのである。すなわち，我らはポルトガル人の消息がささやかれている土地に入った。前記の黒人さえそこへ赴いたことがあるというではないか(それにしてはおのれの集落をめったに離れないというのがカフル人の生来の習俗なのだが)。だからロウレンソ・マルケスの河への距離は大したものではないはずだ，と。しかし一行は完全に騙されていた。一行の位置はロウレンソ・マルケスの河から優に100レゴアは離れており，例の黒人もそこへ行ったことなどないのだ。わが同胞はしかしここで気持ちをとりなおし，残りの旅程をこなすべく士気の鼓舞を図った。前記の河のほとりに設けた野営地での一夜は普段以上の喜びにわいた。

E porque o Arrayal se queria ja levantar, levando o Capitaõ Mór ao Ancosse pella maõ, poseraõsse os seus Negros diante, & cantando guiaraõ os /fol.94/ Nossos, té hum Ribeiro, que se não passou, assi por ser ja tarde, como porque o caminho ficava da banda de aquem. Havia da outra, hũa viçosa Serra, & de ambas, Povoações, donde vierão resgattar muito mantimento. Deu Nuno Velho ao Negro suas costumadas joyas, & estas forão hũa perna de Coral, Cõtas, & dous pedaços de Cobre, por hũa Vaca, que lhe apresentou, & pedindolhe dous homens seus, pera que o guiassem lhos deu logo. Hũ delles affirmava, que ja fora á terra do Vnhaca, onde vira Portugueses & Pangayo. Alegrou esta nova, posto que falsa, em extremo os Nossos entendendo que estavão em parte onde delles havia conhecimento, & que não devia ser a distancia muita ao Rio de Lourenço Marquez, pois este Negro lá fora (sendo costume natural dos Cafres alõgaremse pouco da sua Povoação) mas enganavãosse, que delle estarião algũas cem legoas, & o Negro nunca lá fora: cobrarão com tudo novos espiritos, & animarãos/fol.95/se pera o resto da jornada, & com mais contentamento do ordinario passarão aquella noute no seu Alojamento, que junto á dita Ribeira fizerão.

---

[6] 原綴り "Pangayo". テキストではもっぱらモサンビークからウニャーカの島へ年1度やってくる象牙取引船を表わす語彙として用いられているようであるが，ダルガードによると，東アフリカやインディアに一般的な，2本のマストにラテン帆を備えた舟艇で，これら域内の交易に用いるもの(cf. Sebastião Rodolfo Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, vol. II, New Delhi/Madras, Asian Educational Services, 1988. First Published: 1921, pp.157-158)。

〔5 月 18 日〕 ゆうべからの夜営地でこの日，一行は 9 時までアンコセの来着を待った。アンコセはやって来るなりヌーノ・ヴェーリョに対し，ガイドを送り返すとき，大きさ 6 デドの銅のかけらを 3 つばかり持たせてくれるだろうね，と念を押した。ひとりのガイドの父親も現われて何か欲しいとねだった。さもなくばガイドとして息子を遣ることは許さない，と言う。ヌーノ・ヴェーリョはこの親父に銅のかけらひとつと，小さな釘を 1 本与えるよう命じた。これによってやっと親父は息子を遣ることをよしと認めた。この交渉が成立すると，一行は野営地をたたみ，快適でしかも見通しのよい道を前進しだした。その道を 1 本の河が寸断していたので，一行はそれを渉った。河を越えてある丘に上り，そこで酷暑の時間をやり過ごした。丘の裾につらなる幾つかの集落からそこへ少なからぬ黒人の男女がやってきた。彼らは牛乳やバター，それにトウモロコシの菓子を持参していた。やがてシエスタを終え，わが同胞は前進を再開した。日没まで 1 時間を余してはいたけれど，我らはナツメの大木の下に夜営地を設けた。ナツメはたわわに実をつけており，その夜はこれをおいしく食べて愉しんだ。水はそばの河から汲んでくればよいので不足はなかった。河には多くのカモがいた。

xviij. [18 de Maio]

Nelle esperarão o outro dia té as nove horas o Ancosse, que, chegado, averigou com Nuno Velho, que se dessem ás Guias, quando se tornassem tres pedaços de Cobre, do tamanho de seis dedos. Veo tambem o Pay de hũa dellas, & pedio algũa cousa, & sem ella, que a não deixaria hir. Mandoulhe dar Nuno Velho hũ pedaço de Cobre, & hũ prégo pequeno, cõ que o Negro ouve por bem, que fosse o Filho. Concluido este concerto, levantousse o Arrayal, & começou á caminhar por boa strada, & muy seguida, a qual atravessava hũa Ribeira, que os Nossos passarão, & della sobirão hũ Monte em que se detiverão as horas da calma. Vierão ali muitos Negros, & Negras, de hũas Povoações, que nas fraldas do Monte estavão, com Leite, Manteiga, & Bolos de Milho, & passada a sesta tornarão a ca/fol.96/minhar, & com hũa hora de Sol se agasalharão debaixo de grandes Maceiras de Anafega, carregadas de fruito, cõ o qual, se entrettiveraõ aquella tarde, naõ lhes faltando Agoa, de hum Ribeiro, em que havia muitas Adens.

〔5 月 19 日〕 その夜は寒さと夜露がひどかったため，わが同胞は翌朝 8 時を期して出発した。彼らは石伝いにかなり幅の広い河を膝まで水に浸かりながら渉った。快適な道を経て別の河に出たので，そこでシエスタをとった。河は多くの部落に囲まれており，そこから黒人がトウモロコシの菓子と牛乳を携えて物々交換にやってきた。その晩の野営は薪水がたっぷりある場所で行なわれた。

xix. [19 de Maio]

Foy o frio, & a orvalhada taõ grande aquella noute, que partiraõ os Nossos o dia seguinte, ás oito horas, passaraõ hũa grande Ribeira por pedras, dando a Agoa pello Giolho, & por bom caminho, vierão ter a sesta junto de outra cercada de muitas Povoações, das quaes vierão Negros, resgattar bolos de Milho, & Leite. E o Alojamento da tarde se fez em lugar abundante de Agoa, & Lenha. †

夜営の準備が整うと，およそ 120 人の黒人が丘を下りてきた。彼らに伴われてずいぶん恰幅のよい人物がひとりいた。ガイドたちの語るところによると，それが彼らの王様だということであった。ヌーノ・ヴェーリョはその人物にふさわしい待遇をせねばと考え，絨毯を敷き，その上で彼を迎えた。そして通訳を介してみずからが海難に遭遇したこと，そしてはるか彼方からさまざまな土地を経巡り，ここまで旅をしてきた旨語った。また，その際いつもそれぞれの土地の首領からは温かいもてなしを受けてきたと言い添え，貴殿にもこれまでと同様のもてなしを期待している，と述べた。

† Assentado o Arrayal decerão por hum Outeiro abaixo algũs cento & vinte Negros acompanhando hum de grande desposissaõ, que as Guias disserão ser Rey delles: pello que como tal o agasalhou Nuno Velho em hũa Alcatifa, & pella lingoa lhe disse, como se perdera, & vinha de muy longe por aquellas terras, nas quaes /fol.97/ achara sempre acolhimento nos Senhores dellas, & assi o esperava delle. †

その王は(その名をジンバククーバというのだが)次のように答えた。海難に遭遇したというわけではないが，おのれの国の外にあって浪々の身であることは私とて同じだ。私の領地だが，近隣の某がいくさでこれを奪ってしまった。わが部下の多くもそのために殺された。よって，わが親族のひとりが治めるこの土地に身を潜めているのだ。彼はさらに悔やんで言うには，他の王たちがこれまでそうしてきたように，私みずから治める国において貴殿をお迎えできぬのが無念でならぬ，と。彼のこの悲運に対しカピタン・モールは同情を示すとともに，貴殿の領地を取り戻すための力になりたいという希望を述べた(これに対して黒人たちは皆，喜びの叫び声を上げた)。カピタン・モールはさらに，いくさの起こったわけは何か，いくさの相手とは誰か，と尋ねた。王はこれに答えていわく，わが領地を奪いわが配下を多数殺したその張本人はウニャーカのカピタン某である。ただ，今の私は領地もなければ兵員もいない身の上であるから，この一件に取り組みたくとも取り組みようがないのだ，と。

† Respõdeo o Rey (que se chamava Gimbacucuba) que elle tambem estava perdido, fóra do seu Reyno, o qual outro seu vezinho lhe tomara, com guerra, matãdolhe muita Gente, & se recolhera naquella terra de hum seu Parente, pezandolhe não estar na sua, pera o agasalhar, como os outros Reis atras fizerão. Mostrou desta sua desgraça o Capitão Mór sentimento, & desejos de o poder ajudar na recuperação do seu estado (ao que todos os Negros derão hũa alegre gritta) & perguntoulhe as causas da Guerra, & com quem a tivera. Disselhe o Rey que hum Capitão do Vnhaca lhe tomara a terra, & matara a Gente, & pois estava hũa, & sem outra, que não havia pera que trattar naquella materia. †

ヌーノ・ヴェーリョは王に約束して次のように語った。自分がウニャーカに対して有している影響力を貴殿のため行使してあげよう。そうしてウニャーカに働きかけ，ウニャーカがポルトガル人への配慮から——ウニャーカはポルトガル人とは友好関係にあるのだ——貴殿へ領地を返還するよう計らってあげよう，と。ついては，私がこの務めをいかにやり遂げるか，貴殿の配下にその手並みを見届けて欲しいので，お付きの者からふたりを選んで私どもに同行させて欲しい，とヌーノ・ヴェーリョは頼んだ。黒人の王〔ジンバククーバ〕はこの申し出を受け入れた。私は素寒貧(すかんぴん)で追放中の身の上でもあるので，と言いわけしたうえで，ヌーノ・ヴェーリョへヒョウタンに入れた牛乳を差し出した。これに対してはコンタツとサンゴ樹ひとつでもって返礼が行なわれた。王はサンゴ樹が気に入ったようであった。これは心臓にも眼にもよいものだ，と誰かが王に告げたからである。やがて夜のとばりが下りたので，王は辞去し，我らはその場に残り，やがてそれぞれの天幕に引っ込んだ。

† Prometteolhe Nuno Velho o seu favor com o Vnhaca, & que faria com elle, que lhe restituisse o Reyno por respeito dos Portugueses, dos quaes era amigo, & pera que os seus /fol.98/ vissem o officio, que elle nisso fazia, que mandasse dous em sua companhia. Aceitou o Negro o offericimento, & como pobre, & desterrado deu á Nuno Velho hũ Cabaço de Leite, que lhe foy pago com hũas contas, & com hũa perna de Coral, que elle estimou muito, por lhe dizerem, que era bom pera o coração, & pera os olhos, & querendo ja anoutecer, se foy, ficando os Nossos recolhendosse nas suas tendas.

〔5 月 20 日〕 夜が明けるや，ただちに我らは天幕を出た。しばらく前進したところでジンバククーバ王と行き逢った。王は立ち木のたもとで 3 人の妻，それに多くの黒人とともにわが同胞を待っていた。カピタン・モールは王と

一緒に腰を下ろし，再び人数を差し出してくれるよう願った。もしもウニャーカをして領地を返還せしめるという所期の目的を達成したなら(カピタン・モールはまさにそのように期待し，確実にそうすることができると踏んでいたのだが)，ただちに彼らの手でジンバククーバ王へその朗報をもたらしてもらうためである。王はヌーノ・ヴェーリョに対してその好意を謝し，この行軍のため選抜したふたりの黒人とともに脇にしりぞき，ふたりと話をしていた。あたかも彼らが為すべきことを言い含めているかのようであった。食事の時間となったので[7]，王はヌーノ・ヴェーリョに別れを告げた。そのとき王はカネキンの反物を携えていたが，これはヌーノ・ヴェーリョからもらったものであった。王は反物を 4 枚に裁ち，自分も纏い妻たちも纏った。斬新にして奇妙な晴れ着をもらった気分だったのか，4 人はなるほどこれなら晴れ着にふさわしいと，この反物を喜んだ。

xx. [20 de Maio]

Sairão dellas em amanhecendo, & a pouco caminho encontrarão com o Rey Gimbacucuba, que ao pee de hũa Arvore os esperava cõ tres Molheres suas, & muitos Negros. Assentousse cõ elle o Capitão Mór, & tornoulhe a pedir os homens, pera que alcançando do Vnhaca, que lhe tornasse o Reyno (como esperava, & tinha por certo) lhe trouxessem as novas. Agradeceo o Rey a vontade, & apartandosse cõ dous Negros, que elegeo pera a jornada, esteve falãdo cõ elles, como que os informava, do que devião fazer, & sendo ho/fol.99/ras de jãtar se despedio de Nuno Velho levãdo hũa péça de Canequim, que lhe deu, da qual fez quatro Panos, que elle[8], & suas Molheres poserão, por nova, & estranha gala, & como tal a estimarão. †

我らの一行がこの地に留まっているとき，病気や不具のカフル人が数人やってきて，患っている病気を治して欲しい，とカピタン・モールに頼んだ。そのためカピタン・モールへ携えてきたヒツジやヤギを差し出した。カピタン・モールは疫病や肉体の障害を治せと言われても私には何もできぬと述べて，いっそ連中の魂を癒してやりたいと考えた。そして次のように述べた。天(その方向を彼は指で示した)にまします唯一のデウス様こそ，健康を授け給う権能をお持ちである。命を授け給うも召し上げ給うも，この方のみが為しうるわざである，と。カピタン・モールは聖なる十字架のしるしを切り(これこそ，異教徒の病を癒すよりもっと偉大なもろもろの驚異を顕現させるための強力な手段だ)，連中を去らしめ，彼らからの贈り物は何も受け取らなかった。

---

[7] 原文 “sendo horas de jãtar”. 文脈上も明白であるが，この “jantar” を現代ポルトガル語風に「夕食」と訳してはならない(拙訳ではこれまでこの語彙を「午餐」と訳してきたが，これも誤りであった。下記のとおり，現代風に言えば「晩い朝食」もしくは「早い昼食」を意味する語彙であるので，単なる「食事」という訳語へ一律に訂正する)。中世ポルトガルにおいて一日の食事を，どのような時間に，何度，摂ったか，についてはポルトガルを代表する中世史家オリヴェイラ・マルケスが次のように記述する。

「中世ポルトガルでは食事は 1 日 2 回であった。1 度目はジャンタール〔現在ポルトガル語における意味は「夕食」〕と呼ばれ 2 度目はセイア〔同じく「夜食」〕と呼ばれた。14 世紀末，ジャンタールの時間は朝の 10 時から 11 時にかけてであった。しかし 13 世紀以前，数世紀にわたりその時間帯はもう少し早かったであろう。8 時か 9 時頃であったろうと思われる。セイアの時間は午後の 6 時か 7 時頃であった。『レアル・コンセリェイロ——忠実なる顧問官』という書物の中で国王ドン・ドゥアルテは 2 度の食事のあいだは 7 時間か 8 時間空けることを推奨している。そしてジャンタールでたくさん食べたときはセイアを控えめにすること，同様にセイアをたくさん摂ったときは翌日のジャンタールをごく少なめにするよう勧めている。質素を旨とする考えからであろう，1 日を通じてジャンタールとセイア以外の食事はなるべく摂らぬようにするのが望ましいとされた。しかしながらジャンタールの時間が徐々に遅くなるにつれて，いつ頃からか確かなことはわからぬけれど，おそらくは起きぬけにもうひとつ別の食事を摂る必要が生じてきたと推測される。これがアルモッソ〔同じく「昼食」〕である」(A. H. de Oliveira Marques, *Sociedade Medieval Portuguesa*, Lisboa, Livraria Sá da Costa Editora, 5.ª edição, 1987 (1.ª edição, 1963), p.9)。

[8] 海賊版には “eles” と誤記される。

† Estando os Nossos nesta estança vierão algũs Cafres doentes, & aleijados pedir ao Capitão Mór, que os sarasse, offerecendolhe Carneiros, & Cabritos, que trazião. Desejou elle sararlhe[9] as Almas, ja que não podia as enfermidades, & aleijões dos corpos, & assi lhes disse, que soo hum Deos, que estava no Ceo (o qual lugar amostrou com a mão) tinha poder pera dar saude, como só era o que dava a vida, & a tolhia. E com o sinal da Sagrada Cruz (poderoso meyo pera outras mayores maravilhas, que sarar estes Gentios) os despedio, não lhes tomando nenhum dos seus presentes. †

暑い盛りをやり過ごした後，我らは前進を続けた。道の両側には少なからぬ集落があった。どの集落でも我らは温かいもてなしを受け，歌でもって大いに歓待された。そうした集落のひとつにある柵の囲いからおびただしい家畜が出てきた。その中に大きな図体の雄ウシが 2 頭いた。うち 1 頭には 3 本の角が生えている。その 3 本の角は，ひたいから 1 パルモばかり突き出た 1 本の角から分岐している。それら 3 本の角は驚くほどの均一性でもって下へ折り返し，うち 1 本が真ん中に収まっている。もう 1 頭のウシには 4 本の角があり，2 本の角は通常どおりなのだが，残りの 2 本は他の 2 本の下でそれぞれが耳の周りで反り返っていた。陽が落ちたので，一行はある河のほとりに野営地を設けた。この河のほかに午後の行進で渉った河は 7 つであった。

† Passada a calma forão os Nossos caminhando, por entre muitas Povoações, nas quaes erão bem recebidos, & com os seus cantares festejados, & em hũa dellas /fol.100/ virão sair de hum Curral muito Gado, entre o qual havia, dous muy grandes Boys, hum tinha, tres cornos procedidos de hum, que saya da tésta hum palmo, donde todos tres com grande igoaldade voltavão pera baixo, ficando hum delles no meyo, & o outro Boy, tinha quatro, dous ordinarios, & outros dous, que debaixo destes voltavão a redor das orelhas. E pondosse ja o Sol se fez o Alojamento ao longo de hum Ribeiro com o qual se passarão na jornada daquella tarde outros sette.

〔5 月 21 日・22 日・23 日〕 この地方一帯では夜はかなり冷える。夜寒(よさむ)がわが同胞にいっそうこたえたのは薪不足のせいである。したがって朝になるや，運動によって体を暖めるため，一行はただちに無人の土地を前進しはじめた。ひきつづく 2 日間に進んだ土地も同じように人が住んでいる様子はなかった。しかしながらあたり一帯は豊かな牧草と高木に覆われている。土地はいとも爽やかであり，ある丘をぐるりと一廻りするその途中で少なからぬ河を横切った。どこまでも広がる平原を蛇行しつつ流れる別の河のほとりで我らは小休止をとった。この平原ではウズラを見た。我らの知っているウズラと同じものである。しかしこれまでに通過してきた他の土地で見たようなトカゲ，ヘビ，カローシャ〔糞玉をこしらえる各種のコガネムシ。フンコロガシか〕にはもう出会わなかった。22 日，我らはある山にぶつかった。この山をできるだけ少ない消耗で越えるため黒人は我らの一団を北西へ導いた。23 日，北東へ再び方向を変え，山々を登り，谷間を縦走し，幾つもの河を横切った後，ある河のほとりで家畜ともども夜営した。家畜のうち食糧として必要な分を屠(ほふ)ったが，それでもなお我らの手もとには 39 頭のウシが残っていた。

xxj.; xxij.; xxiij. [21 de Maio; 22 de Maio; 23 de Maio]

São as noutes por esta terra muy frias, & esta o pareceo muito mais aos Nossos por falta de Lenha, pello que como foy menhã, pera se aquentarem com o exercicio, começarão a caminhar por terra despovoada, sendoo tãbem, á dos dous dias seguintes: era porem de boõs Pastos, & de altas Arvores cuberta, & tão fresca, que rodeandosse hum Mõte se passarão muitas Ribeiras, & se fez stança ao longo de outra, que por hum estendido Campo /fol.101/

[9] 海賊版には "sararlhes" とある。間接目的格の "lhe" が 16 世紀にあっては単複の区別にさほど神経を用いず使われたことについては上述した。

hia dando muitas voltas. Acharão nella[10] os Nossos Perdizes, & não virão mais Lagartixas, Cobras, & Carochas, que pella outra atras havião visto. Encontrarão hũa Serra aos xxij. que pera se atravessar com menos aspereza guiarão os Negros ao Noroeste. E tornando aos xxiij.[11] ao Nordeste, ora sobindo Montes, ora caminhãdo por Valles, & passando Ribeiras, alojarãosse ao longo de hũa com o Gado, do qual matando o que pera seu mãtimento era necessario, acharão nesta estança xxxix. Vacas.

〔5 月 24 日〕 翌日の朝は雨が降った。降雨が我ら一行の行進を妨げているあいだ，ヌーノ・ヴェーリョは，アルコシェッテ出身のアンドレ・マルティンスという人物を，今入りつつある土地の首領のもとへ遣わした。彼には通訳ひとりとガイドのうちのひとりをつけた。土地の首領から領地を通過する許しをもらいたいと思ったのである。10 時に野営を撤収し，ある丘の麓を，棘のある木々が生い茂るなか，1 レゴアばかり前進した。やがて黒人の家 2 軒に行き逢ったので，そのそばに野営地を設けた。そこへアンドレ・マルティンスが土地のアンコセと一緒に戻ってきて我らに合流した。このアンコセをヌーノ・ヴェーリョは他のアンコセにそうしたように歓待し，水晶のコンタツを少しばかり与えてこの人物の歓心を買った。その返礼としてこの人物はヌーノ・ヴェーリョに対しガイドを，さらには私の土地にあるものなら何でも提供しようと約束した。

xxiiij. [24 de Maio]

Choveo a menhã do dia seguinte, & em quanto a Agoa impedio o caminho mandou Nuno Velho á hũ Andre Martins de Alcouchete, com hũa Lingoa, & com hũa das Guias, pedir licença ao Senhor da terra, em que entravão, pera passar por ella. E sendo ja dez horas levantousse o Arrayal, & caminhando pello pee de hum Monte, por baixo de Arvores espinhosas, quasi hũa Legoa, encontrou duas casas de Negros, junto das /fol.102/ quaes se tornou a assentar. Aly veo ter Andre Martinz com o Ancosse, a quem Nuno Velho agasalhou, como aos outros, & com hũas Contas de Cristal o contentou, & em retorno elle lhe prometeo Guias, & tudo o mais, que na sua terra havia.

〔5 月 25 日〕 しかしながら翌日（我らの一行がアンコセの支配する 7 軒ばかりの家々へ到達して一息入れていると），アンコセからは牛乳とバター，それにトウモロコシの菓子のほか何も提供してもらえなかった。しかもウシを物々交換で譲り渡すことには同意しなかった。その理由を尋ねると，今しも近隣のアンコセといくさの渦中にあるからだという。これからのいくさに必要になるかもしれぬと考えたのか，アンコセは配下の連中が食糧を売ることは望まなかったのだ。しかしながらカピタン・モールの持っていた磁器の瓶を目ざとく見つけ，それを手に入れたいという誘惑に駆られて，アンコセはその瓶との交換で，大きなウシを 1 頭カピタン・モールへ差し出した。その瓶がきらきらと輝き，釉薬をいくらこすってもその光沢が消えぬのを見て，アンコセは大いに喜び騒ぎ，まずそれを自分の眼に押しつけた。続いてアンコセの家来が出てきて，体で痛みを感ずるところにその瓶を押し当てた。彼らはこの瓶が健康をもたらすものと独り合点したのだ。彼らのアンコセ——ウキーネ・イニャーナという名前である——がそういうしろものを手に入れたという噂が村中に広まるや，村人は皆それを見に，そしてこのしろものを用いてさきほどと同じ儀式というか迷信的振舞いをしにやってきた。

xxv. [25 de Maio]

Não deu porem ao outro dia (chegados os Nossos ás suas Povoações, que erão sette, onde se recolherão) mais que Leite, Manteiga, & Bolos de Milho, não consentindo, que se resgatassem Vacas, porque estava de guerra com

---

[10] 初版本にも海賊版にもこうあるが，前出の "Campo" が男性名詞であることを考慮すると，"nelle"（no Campo）の誤記である可能性がある。

[11] 海賊本には "vinte & dous" と誤記される。

outro seu vezinho, & não queria, que vendessem os seus os Mantimentos, que pera ella poderião haver mister. Mas levado do apetite de hũa Garrafa de Porcelana que vio ao Capitão Mór deulhe a troco hum grãde Boy, & com grande festa, vendoa luzir, & esfregando o vidrado, que se não tirava, a pos nos olhos, & depois os seus, nas partes do corpo em que tinhão algũa dor, persuadindosse, que dava saude. E como pellas Aldeas se soube, que o seu An/fol.103/cosse, chamado Vquine Inhana tinha aquella péça, vierão todos á vella, & fazer cõ ella as mesmas cerimonias, & superstições.

〔5月26日〕 こうして黒人たちが集合したわけであるが，これは実に渡りに舟であった。26日にかなり大きな河を渉るに際して彼らがそれを助けてくれたからである。水流は速く水嵩は腰にまで達していたから，もし彼らがいなければ，渡渉には大きな苦労と危険が伴ったであろう。アンコセは河の向こう岸に落ちつくや暇乞いをしたが，それに際して我らのためにガイドをふたり残してくれた。ただし我らの連れてきたガイドに対してはこれ以上進んではならない，と言い渡した。流浪中のジンバククーバがウニャーカからの返事を持ち帰らせるため，ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラへ託したふたりの黒人も同じことを告げられた。当地のカフル人はよそものの黒人がみずからの土地を通過することを決して許さぬのである。少しだけ休息をとった後，我らは人家をぬって前進を再開した。そこから少なからぬ人々が食糧を売りに，また我らを見に現われた。まだ陽の高い2時であったが，薪水があったのを幸い，いつそういう場所に辿り着けるとも知れなかったため，そこで野営した。

xxvj. [26 de Maio]

Foy necessario este ajuntamento dos Negros, pera ajudarem a passar os Nossos hũa muy grande Ribeira, aos vinte & seis, que sem elles fora de muito trabalho, & perigo. Porque era rapida, & dava a Agoa pella cinta. Postos da outra banda se despedio o Negro, dando duas Guias, & nção consentindo, que passassem, as que o Campo trazia, nem os dous Negros, que o Rey Gimbacucuba desterrado, dera á Nuno Velho Pereira, pera por elles, lhe mandar á resposta do Vnhaca. Não permittindo estes Cafres, que passassem por suas terras os Negros das alheas: & depois que se descansou hum pouco, se tornou a caminhar por entre Povoado, de que vinha muita Gente vender Mantimentos, & ver os Nossos. Os quaes posto que erão duas horas de /fol.104/ dia, se recolherão onde havia Lenha, & Agoa por estar á outra longe.

〔5月27日〕 翌日の10時頃，薪水のある別の場所へ辿り着いた。そこには河が北東から南西へ流れていた。このたびの旅路に際して見られた河の中では最も幅が広く，最も流れが速い。きのうの渡渉に際しても黒人たちが集まって我らを助けてくれたが，今日の渡渉ではそれ以上に彼らの助けが欠かせなかった。そしてそれに困ることはなかった。我らが河辺に佇んでいるところへ土地の首領がやってきたからである。その男の名をムトゥアドンドンマターレという。彼は手下を30人ばかり連れていた。手下のひとりが，(ヌーノ・ヴェーリョの与えるよう命じた釘欲しさに)胸まで水につかりながらその河を渡った。が，河の流れはいとも激しく，はたして渡りきれるものかどうか，我らは疑いを持たざるを得なかった。というわけで，ピロットは森の中へ筏の材料となるような材木を探しに出かけた。しかし彼が見出した木材は，どっしりと重く稠密であり，水には浮かばず石のごとく沈んでしまった。ヌーノ・ヴェーリョはそこでアンコセ〔ムトゥアドンドンマターレ〕から，今でこそ河の水はすぐる雷雨のため増水しているけれど，あすまで待てば水位は下がるだろう，と説明されたので，その場所に天幕を設営するよう命じ，黒人の首領に対し，翌朝，もしよろしければ，御家来の衆と一緒に我らの渡渉を助けにきて欲しい，と頼んだ。

xxvij. [27 de Maio]

Chegousse á ella o outro dia, ás dez horas, & era de hũa Ribeira, que corria do Nordeste ao Sudueste, & a mais larga, & de mayor corrente, que se havia visto por aquelle caminho, & se na passada ouve Negros, que a ajudarão a

vadear, nesta onde mais necessarios erão não faltarão. Porque postos os Nossos á borda, veyo o Senhor da terra por nome Mutuadondommatale, cõ algũs xxx. & passandoa hum delles (por hum prégo que lhe mandou dar Nuno Velho Pereira) cõ a Agoa pellos peitos, corria com tanta furia, que desconfiarão os Nossos de a poderem atravessar. E assi buscou o Piloto no Matto algũa Madeira, de que fizessem Iangadas, mas achoua toda tão maciça, & cerrada, que não nadava na Agoa, & como pédra se hia ao fundo. Pello que sabendo Nuno Velho do Ancosse, que a Ribeira baixaria ao outro dia, por ser a Agoa de chea, causada de hũa trovoada /fol.105/ passada. Mandou que se assentasse o Arrayal no mesmo lugar, & pedio ao Negro, que, se queria hir, viesse pella menhã com os seus pera ajudarem a passar os Nossos. †

ここで相手にした黒人であるが，これまでの黒人以上に欲の皮の張った，私腹を肥やすことに熱心な連中であって，同じ分量の銅（彼らが両腕にはめる腕輪は銅製である）と引き換えに，これまでの連中はウシの3頭もくれたのに，彼らはたったの1頭しかくれなかった。思うに，かつての連中のあいだにおけるほど銅には価値がないのであろう。その代わり，他の連中が欲しがらなかった衣服が彼らのあいだではずいぶんもてはやされた。したがってこの一帯に到るまでは，食糧を入手したいなら，銅や鉄を大事にしておけばよいのであるが，ここから先は，食糧を得るには布地を確保しておくのが望ましいのである。なぜならこれこそが当地の黒人がウシと引き換えに欲しがるものであるからだ。

† São ja estes Negros mais cobiçosos, & enteresseiros, que os de atras, & por Cobre (do qual trazem Manilhas nos braços) perque davão os outros tres Vacas, derão hũa, não tendo ja tanta valia entre elles como entre os passados, & estimandosse a Roupa, que os outros não querião. Pello que convem fazer grande cabedal, do Cobre, & Ferro pera o resgatte dos Mantimentos té esta parajem, & goardar os Pannos, pera o fazerem daqui por diante, & assi os pedião estes Negros a troco das Vacas. †

ヌーノ・ヴェーリョは彼らのあいだに認められた貪欲さをそのまま放置しておくと為にならぬ，その貪欲さが昂（こう）じて我らに対する無礼傲慢に至らしめぬようにせねば，と考えて次のように命じた。もし我らの食糧にするためにウシを殺す必要があるのなら，これまで同じようなケースでは必ずそうしてきたように，その屠殺をエスピンガルダ銃でもってやれと。そのねらいは，銃声でもって彼らを驚愕せしめ恐怖におののかせることにあった。この意図はまんまと図に当たった[12]。というのは，このやり方でもってウシが 1 頭殺されると，居合わせたカフル人は大いに眼をみはり，すでに去ってしまっていたアンコセも道中その轟音を耳にして，いったい何事かと大急ぎで戻ってきたからである。そして彼らにとってこの上ない驚異に唖然としている部下を見，かつ部下からこの轟音の正体を教えられて，ヌーノ・ヴェーリョに頼みこんだ。もう 1 頭別のウシを殺してくれないか，と。そこでもう一撃ぶっ放すとたちまちウシは斃（たお）れた。このことにアンコセはさきほどに勝るとも劣らぬ驚きを見せた。彼はそのアルカブース銃を手に取り，何度もそれをひっくり返したあげく，次のように言った。このようにウシを殺せるなら人間もまた殺せるだろう，と。通訳はそれに答えて，そのとおりだ。これはあらゆるものから命を奪い，ゾウであれ小鳥であれ，殺す相手を選ばぬ，と言った。アンコセはこの返事を聞いていっそう頭が混乱し，かつ大きな恐れを抱いて，部落へ引き揚げた。アンコセに随行している手下どもの抱いた恐れもそれに劣らず大きかった。

† E porque nelles se conheceo algũa cobiça, & esta os não posesse, em condição de fazerem algum desacato. Mandou Nuno Velho, que as Vacas, que se ouvessem de matar pera o Mãtimento do Campo, fosse á Espingarda,

[12] 先住民カフル人を驚愕させるためウシをエスピンガルダ銃で撃ち殺してみせるポルトガル人のデモンストレーションは4月1日のくだりにも見える。

como em semelhantes casos se usava, pera que com o seu tom, ficassem espanta/fol.106/dos e medrosos. Conseguiosse o que se pretendia, porque morta por esta maneira hũa Vaca, ficarão os Cafres que estavão presentes admirados, & o Ancosse, que era ja hido, ouvindo no caminho o estouro, voltou com grande pressa saber o que era. E vendo os seus pasmados daquella tão grande maravilha pera elles, que lhe contarão[13], pedio a Nuno Velho mandasse matar outra, á qual dandolhe hũa arcabuzada cayo logo. De que não menos maravilhado o Negro, tomou o Arcabuz na mão, & dandolhe mil voltas, disse que pois matava Vacas, que tambem mataria homens, respondeolhe a Lingoa, que assi era, & que á tudo tirava a vida, matando a hum Alifante, & á hum Passarinho, com que ficou muito mais cõfuso, & cõ grande medo se tornou ás suas Povoações, não sendo menor o que levavão os seus que o acompanhavão.

〔5月28日〕 翌日の明け方はたいへん雲が多く，雨が降って河の水嵩が増すのではないかという不安に襲われた。しかし太陽が昇ると雲は消え，清澄で静穏な日和となった。我らはこの河を渉ることを決意した。ただしそれは，前日の午後に河に立てておいた標柱によって河の水位が1パルモ半低下しているのを確認してからのことである。そうこうしているうちに，手下の連中を引き連れてやってきたかの黒人が，その中から最も体格のよい10人を選ぶと，彼らが年少の小姓たちをおぶって運びはじめた。フランシスコ・ペレイラとフランシスコ・ダ・シルヴァは別の黒人と協力してベッドカバーにすっぽりとくるんだドナ・イザベルとその娘を肩車した。そのほかの面々も後続した。家畜の渡渉にはかなりの難儀が伴った。なぜなら家畜は脚をしっかりと支えられず，ややもすれば流れに脚をとられることがあったからだ。しかしひとりのカフル人が1頭のウシに目星をつけ，その鼻の孔に縄を結び，引っ張ることによって，そのウシを無理やり渡渉させた。これを見た他のウシどもも勇を鼓して対岸へ渡った。この日はいとも危険な河——この河を黒人はウチュジェールとよぶ——を渉りきったことで，我らは充分な行程をこなしたものと見なし，そこに夜営地を設けた。この労働に対する黒人への報酬はたっぷりと支払われた。

xxviij. [28 de Maio]

Amanheceo o dia seguinte tão nublado que recearão os Nossos, que chovesse, & crecesse a Ribeira. Mas levantandosse /fol.107/ o Sol foy resolvendo as Nuvens, & tornãdoo claro, & sereno, determinarão passala, & muito mais depois, que per hũa Balisa, que nella poserão a tarde de antes, conhecerão, que havia baixado hum palmo & meyo. E assi sendo ja vindo o Negro com os seus, escolheo delles dez os Mayores, que começaram a passar os Moços ás costas, & Frãcisco Pereira, & Frãcisco da Silva cõ outros Negros tomarão aos hõbros nas Colchas D. Isabel, & sua filha, & todo o mais Arrayal os foy seguindo. O Gado passou trabalhosamente, porque não tomando pé levavao a Corrente. Mas hũ Cafre tirando pellas ventas cõ hũa corda a hũa Vaca a fez passar, cõ que as outras esforçadas, se poserão da outra banda. Nella se fez o Alojamento, havendo que se fizer[14] boa jornada, vadeando aquella tão perigosa Ribeira, á que os Negros chamão Vchugel, aos quaes se pagou muy bem o trabalho.

〔5月29日〕 翌朝アンコセは，約束どおり，ガイドとしてふたりの黒人を送ってきた。さらにもうひとり別の黒人がおり，これがガイドへの支払いをアンコセのもとに持ち帰ろうとするのである。支払いとは銅のかけらふたつであった(ところがこの男ときたら駄賃をもらわぬうちはいっかな失せようとしなかった)。我らとしては念頭にあるのは，前進を続けることだけであったから，大いに疲れてはいたが，ただちにそれを実行に移した。道は石ころだらけであり，北側に広がる大きな山並みの裾野を進んだ。山並みの麓で夜となり，ある小川のほとりに野営地を設けた。あ

[13] 初版本に "conatrão" とあるのを正誤表によってこのように訂正する。

[14] 海賊版では "se fizera" と大過去形に校訂されている。論旨から判断して正しい校訂であろう。

たりは牧草も樹木も豊かであった。

xxix. [29 de Maio]

Mãdou pella menhã o Ancosse 2. Negros pera Guias, como prometera, & hũ pera /fol.108/ que lhe levasse a paga delle, que forão dous pedaços de Cobre (o qual tambem não foy sem ella) & como os Nossos não esperassem outra cousa pera continuar seu caminho, logo o fizerão, & com grande cansasso, por ser muy cheo de pedras, costearão hũa Serra grande, que ficava da parte do Norte, & ao pee della lhes anouteceo, em hum Ribeiro, onde havia bom pasto, & Arvores.

〔5 月 30 日・31 日〕 翌朝も道の様子は同じであり，11 時にひとりの黒人に行き逢った。この黒人に向かってカピタン・モールは君らのアンコセを呼んでくるようにと言いつけた。アンコセは遅れることなく 40 人余りの手下を連れてやってきた。全員がアザガイア〔短い投げ槍〕と円楯，それに革製の楯を手にしていた。連中は我らから快く迎えられ，アンコセはヌーノ・ヴェーリョの手を取り，その前を他の連中がわいわいがやがやと進み，やがて彼らの集落に到った。集落はある河に沿って広がっている。河のほとりに野営地を設けたが，物々交換の品としてそこへもたらされたのは当地の首領からのウシ 1 頭だけであった。この年当地には雨不足のため食糧があまりなかったのだ。というわけで，ウシの値は非常に高く，ウシ 1 頭をもらうためにこちらが差し出したものは壊れたアストロラービオの残片と，大鍋の取っ手ふたつと，銅のかけらが 6 つであった。確かにこの土地は肥沃であるはずはなかった。なにしろ周囲はごつごつとした山また山，さらに大きな岩塊や真っ黒な岩石ばかりなのである。木々もほとんどなかった。あっても棘のあるようなのばかりだ。5 月末日の行程はずっと一貫して右のような光景であった。やがてその途中，我らは野営のための適地を見出し大休止した。

xxx.; xxxj. [30 de Maio; 31 de Maio]

Sendo a estrada da mesma maneira a menhã seguinte, encontrarão ás onze hũ Negro, a quem o Capitão Mór disse, que fosse chamar o seu Ancosse. Não tardou muito á vir com algũs corenta, todos com Azagayas, & Rodelas, & Adargas, que fazem de Couros. Os quaes bem recebidos dos Nossos levando Nuno Velho o Ancosse pella mão, & hindo os outros diante escaramuçando, chegarão ás suas Povoações, que ao longo de hũ Ribeiro estava. Nelle fez alto o Arrayal, & não se veyo resgattar á elle mais que hũa Vaca do Senhor da terra, por não haver /fol.109/ nella Mantimentos aquelle anno á falta de chuva, & assi custou cara, dãdosse por ella hum pedaço de Astrolabio quebrado duas asas de Caldeirão, & seis pedaços de Cobre. Nem a terra podia ser muy fertil porque toda era de Montes asperos, & de grandes Penedias, & Rochedos de cor negra, & as Arvores poucas, & espinhosas. Da mesma calidade foy o caminho do derradeiro de Mayo, & onde nelle acharão os Nossos comodidade, pera se agasalharem o fizerão.

〔6 月 1 日〕 行進中の一行にふたりの見習い水夫がいた。ふたりは牛乳を飲み過ぎたことに起因する赤痢を病んでいた。仲間と行動をともにするのはもう不可能であったため，6 月 1 日もゆうべからの野営地にそのまま残ることになった。そしてペドロ修道士に告解〔カトリックの七秘跡のひとつ。懺悔〕を聴いてもらい，ひとりの黒人に預けられた。黒人は銅のかけら 4 つとの交換条件で，ふたりが露命（ろめい）をつないでいる限り，その食の面倒を看るように，と言い渡されたのであるが，しかしその衰弱ぶりから察して余命はいくばくもないに相違なかった。土地はより快適となり，道もまた岩だらけではなくなったので，我らは小休止し，部落のそばで暑い盛りをやり過ごすことにした。カピタンのジュリアン・デ・ファリーアの気分がすぐれなかったので，我ら一行はその夜も同じ場所に留まった。その夜土地の首領が有するウシ 1 頭を，大鍋の取っ手ひとつ，銅のかけら 3 つ，8 レアル貨と同じくらいの大きさのトルコ銀貨 1 枚との物々交換で手に入れた。

j. *Iunho* [1 de Junho]

Vinhão no Arrayal dous Grumetes doentes de Camaras de sangue, causadas de beber muito Leite, & não podendo ja aturar com os Companheiros, ficarão o primeiro de Iunho no Alojamento, cõfessados por Fr. Pedro, & encomendados á hum Negro, que por quatro pedaços de Cobre, lhes desse de comer os dias que vivessem, que segundo sua fraqueza devião ser muy poucos. E sendo a terra milhor, & o caminho menos fragoso pararão os Nossos o tempo da calma jũto /fol.110/ de hũas Povoações. E porque se achou o Capitão Iulião de Faria indisposto, ficarão no mesmo lugar á noute, & nelle resgattarão hũa Vaca do Senhor da terra por hũa asa de Caldeirão, tres pedaços de Cobre, & hũa Moeda de Prata Turquesca do tamanho de hum Real de oyto.

〔6月2日〕 カピタンの気分がかなりよくなったので，翌日，ガイドとともに行進を再開した。ガイドはアンコセがもろもろの部落から駆り集めてカピタンへ与えたのである。それまで我らとともに歩んできたガイドはここで解雇した。我らはある峰の隘路を登り，その峰から下りると平らで景色のよい場所に出た。そこで多くの黒人の男女と行き逢った。彼らは我らへしきりにトウモロコシの穂を差し出した。何事かと思っていると，その見返りとして，自分たちの体でここが痛いというところに我らの手を置いて欲しい，と言うのである。そのような療法で彼らは痛みから逃れうると考えているのだ。我らが連中の指示するところへ十字のしるしを切ってやると，連中の満足と喜悦とは極点に達した。わが前衛隊のその前に陣取り，彼らの流儀で歌いながら進みだした。ある丘を下る途中で，遅くなったので野営することにした。夜のとばりが下りようかというとき，野営地にふたりの黒人がウシ1頭を連れて訪ねてきた。そしてある寡婦，つまりひとりのアンコセの未亡人からのことづかり物であるとして，このウシをヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラに差し出した。ヌーノ・ヴェーリョはカフル人ふたりに対し，このような記念品をもらってありがたく思っていることを態度で示し，ふたりに託して，寡婦へシナの絹でできた，金糸やさまざまな配色の糸で刺繍された寝台用のカーテン1枚と，銅のかけら3つを送呈した。

Ij. [2 de Junho]

Sentindosse com melhoria o Capitão se caminhou o outro dia com as Guias, que deu o Ancosse das Povoações, despedindo as que vinhão com os Nossos. Sobirão o Porto[15] de hũa Serra, & baixando della derão em terra chaã, & aprazivel, na qual encontrarão muitos Negros, & Negras, que lhes davam espigas de Milho, porque lhe posessem as maõs nas partes do corpo em que tinhão dores esperando livrarense dellas com aquelle remedio, faziãolhes os Nossos o sinal da Cruz, & elles ficavão em estremo contentes & alegres, & pondosse diante da Avangoarda hião cantando ao seu modo. No meyo da decida de hum Monte /fol.111/ ficou o Arrayal, por ser tarde, & quasi noute vierão á elle, dous Negros com hũa Vaca, que apresentarão á Nuno Velho Pereira da parte de hũa viuva, Molher que fora de hũ Ancosse. Mostrou Nuno Velho Pereira aos Cafres estimar muito aquella lembrança, & mandou com elles á viuva hũa cortina de cama de Seda da China lavrada de Ouro, & Matizes, & tres pedaços de Cobre.

〔6月3日〕 翌朝丘からは完全に下り，そのたもとを流れる小川を横切った。進路を北に定めて，再び峰を登った。峰の頂から道は北東の方角へ転じていた。靴をなくした連中にとってその素足にはかなりこたえる石ころだら

---

[15] 海賊版も "porto" と表記する。通常「港」を指す語彙であるが，別に "passagem estreita entre montanhas"（山と山とに挟まれた隘路）の意味がある（António de Morais Silva, *Grande Dicionário da Língua Portuguesa*, 10.ª edição, vol. VIII, [Lisboa], Editorial Confluência, 1955, p.544）。ゴメス・デ・ブリットは "porto" では意味がとれないと速断したのであろう，この語彙を恣意的に "cume"（てっぺん，頂）へと"校訂"してしまった（*História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, ed. António Sérgio, vol. III, p.60）。初版本に拠って初めて正しい解釈を得ることができる一例。

けの道ではあったが，一行はかなり遅くまで行進した。薪水が得られるという理由で選んだある場所にやがて達し，そこで野営した。

iij. [3 de Junho]

Deceosse de todo pella menhã o Mõte, & atravessousse hũa Ribeira, que pello pé delle corria, & com o rosto ao Norte, se tornou á sobir hũa Serra, do alto da qual, voltava o caminho ao Nordeste, & posto que com pédras, que lastimavão os pees dos descalços, se foy andando té bem tarde, que chegarão á hum sitio, que escolherão pera Alojamento, por haver nelle Agoa, & Lenha.

〔6月4日〕 4日，ゆうべの野営地を発つと，つづいて数戸の人家にぶつかった。そこから黒人が大騒ぎしながら出てきた。そしてわが一行を抱き締め，顔に接吻した。連中の一行に対する態度はひどく狎れ狎れしく，我らの一行からコンタツを取り上げ，そのコンタツを首に巻き，我らがしてみせるのにならって，コンタツの十字架にしきりと接吻を繰り返した。聖なる十字のしるしを我らが大いに貴び重んじているとにらんだ彼らは，次のような質問をしてきた。この聖なるしるしを受け取った後で妻と交接に及んでも構わぬか，と[16]。こんなことを話しながら，皆はかなり大きな河に到達した。カフル人は我らの渡河を助けてくれた。しかもいやいやではなく喜んで，かつ自発的に。この仕事に対する謝礼として，彼らへ水晶の小さな数珠玉と，布切れ数枚を与えた。この布切れを彼らはさっそく頭に結びつけた。早くもシエスタの時間となったので，一同，トウモロコシ畠沿いで一息入れた。トウモロコシはすでに熟れていたが，それに手を触れることはしなかった。黒人の顰蹙（ひんしゅく）を買いたくなかったからであるが，みずから収穫したものは彼らが惜しげもなく我らへ分けてくれるからでもある。彼らはトウモロコシにせよ，トウモロコシで作った菓子にせよ，はたまたバターにせよ牛乳にせよ，ただ同然の対価で譲ってくれるのだ。

iiij. [4 de Junho]

Partirão delle aos quatro, & encontrarão algũas Povoações, das quaes sayão os Negros com muito alvoroço a

---

[16]「この問い掛けは先住民の宗教的秘儀に関わって存在した性的タブーと呼応するものである」（'This is quite in keeping with the sexual taboos of Native initiation'. H. A. Junod, "The condition of the natives in South-East Africa in the sixteenth century, according to the early Portuguese documents" in *The South African Journal of Science*, February, 1914, p.24. Apud *The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.164, note 1）。

質問を受けたポルトガル人がどのように応じたのか，テキストに記載はないものの，その返答内容は，およそ1世紀後にシャルル・デロンが書き留めたダマンにおける下記の挿話から類推することができる（このフランス人旅行家はポルトガル領インディアを旅行中，異端の容疑により有罪を宣告され入獄，当地のカトリック教会が主宰する宗教裁判の実態に関する興味深い手記をしたためた）。

ポルトガル人の形式的で場当たり的な聖像崇拝のあり方を快く思わないデロンの家に，某日，"隣人"と称する男 ——実際はファミリアールと呼ばれる異端審問所の手先であったらしい——が現われ，十字架像のついた寝台に目をやってこう告げる。「旦那さん，覚えておきなさいまし。婦人をお宅に連れ込んで閨を共になさるなら，くれぐれもこの聖像には覆いをなさるように」と。

これに対するデロンの反論の主旨は概略次のとおり。曰く，君らポルトガル人は，聖像に覆いさえしておけば罪深い振舞いに及んでもデウスの目を欺きそれから逃れることができる，と考えている。そこらの売春婦も，ロザリオやら聖遺物やらを秘匿しておきさえすれば，ありとらゆる逸脱行為に気兼ねなく耽ることができる，と信じている。君らの発想と売春婦たちの考えとは，どのように違うというのか。そんな小細工を弄してもデウスは我らの心の内奥を見透かし，容赦なくその罪を暴き給うのだ，と（cf. Charles Dellon, *Narração da Inquisição de Goa*, tr. Miguel Vicente de Abreu, 2.ª edição, Lisboa, Edições Antígona, 1996, p.37）。

/fol.112/ abraçar, & beijar na face os Nossos, & trattandoos com grande domestiqueza lhes tomavão as contas, & deitadas ao pescoço, beijavão a Cruz dellas, como vião fazer. E entendendo a muita estima, que os nossos fazião deste Sãto Sinal, perguntavão, se era licito depois de o ter recebido ajuntarense com suas Molheres. Com esta practica chegarão todos a hũa grande Ribeira, a qual os Cafres ajudarão a passar aos Nossos com muita alegria, & vontade, que lhes pagaraõ, cõ algũas continhas de Cristal, & tiras de Pano, que logo atavão na cabeça: & porque erão ja horas de sesta ficaraõ ao lõgo de hũa sementeira de Milho ja maduro, no qual se não tocou assi por não escandalizar os Negros, como porque do que elles tinhão colhido, erão muy liberaes dãdoo, por muy pouca valia, & bolos feitos delle, & Manteiga, & Leite.

日盛りの最も暑い時間帯を過ぎ，河を渉ったところで，ポルトガル人は甘くて大きなテンニンカの実を見つけた。わが同胞は見渡す限りのトウモロコシ畠を前進した。トウモロコシ畠は前方の峰から下ってくる水によって潤されている。その峰を登りきると，もろもろの部落を取りしきるアンコセが30余りの黒人と一緒にいるところにぶつかった。カピタン・モールはアンコセを出迎えた。カピタン・モールは難船のこと，上陸してここへ至ったことを話し，必要なものをいただきたいと頼むと，カフル人のアンコセはこう言った。君らの苦難に心から同情する。しかし死なずにここへ辿り着いたのは不幸中の幸いであった。ここまで来ればガイドについても食糧についても心配は要らぬ，と。そしてその約束のしるしとして，大きな雄ウシを2頭，ヒツジを4頭，それにヒョウタン入りの牛乳を持ってこさせた。それに対して我らの側から，銅のかけら3つ，大鍋の取っ手1個，サンゴ1脚，それからトルコ製の銀貨1枚が差し出された。それからヌーノ・ヴェーリョから特別にアンコセへシナ製の緞帳が1枚贈られた。この緞帳はせんだって未亡人へ進呈したのとよく似たもので，その名をパンジャーナというアンコセの喜びようは格別であった。アンコセの支配する土地を一緒に前進し，野営の準備を終えた頃，アンコセのもとへ大きなヒョウタンに入れた酒がもたらされた。この酒，ゴキブリがうようよと浮かんでいるしろものであって，トウモロコシから作ったという。酒はポンベと呼ばれる。これをアンコセはヌーノ・ヴェーリョばかりか，ヌーノ・ヴェーリョと一緒にいたポルトガル人にも，飲んでみなさい，としきりに勧めた[17]。さてわが同胞であるが，誰もがアンコセの御機嫌を損ねぬよう，失礼に当たることのないよう，おいしそうにこの酒を飲んだ[18]。もうほとんど夜であったので，アンコセは，翌日ガイドと一緒にまたやっ

---

[17]「南アフリカ全域において先住民が好む *byala* もしくは *tjwala* であることは明らかである。この発酵飲料は飲み物であると同時に食べ物でもある」('Evidently the *byala* or *tjwala* of which the Natives are so fond all over South Africa. This [beer] is a food as well as a beverage.' H. A. Junod, 'The condition of the natives', p.20. Apud *The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.165, note 1)。

[18] ドミニコ会宣教師ジョアン・ドス・サントスの著書『エティオピア・オリエンタール』(エーヴォラ，1609年)には，部族長であるアンコセが外来の客人に対して仕掛ける「エンポーフィア」と呼ばれる駆け引きに関する記述が見える。客人——ここではポルトガル人——の口にはとても合わぬような酒を半ば強制的に勧め，これを客人が喜んで飲もうとせぬとみると，それにかこつけて種々の難癖をつけ，客人の持ち物をできる限り巻き上げようとする巧妙な駆け引きのことであるが，ラヴァーニャの筆致から推測すると，このとき，ゴキブリの浮いたポンベを「喜んで」飲んでみせたポルトガル人は，ひょっとすると，このエンポーフィアの習俗を知っており，そのうえで「おいしそうにこの酒を飲んだ」か。

『エティオピア・オリエンタール』の関係箇所を訳出してみる。

「このキテーヴェ〔アンコセ同様，東南アフリカ先住民の部族長を指す普通名詞〕は関係者と対話する家の片隅に酒をなみなみと満たした大きな鍋を必ず置いておくしきたりである。この酒をカフル人はトウモロコシで作る。この酒はポンベと呼ばれる。このポンベでもってキテーヴェはみずからを訪ねてくる人々をもてなす習わしである。それは訪ねてくるのがカフル人であろうとポルトガル人であろうと変わらない。ポルトガル人はたとえこんな酒を飲むことができなくとも，強いてこの酒を飲みこれを誉めそ

てくると約束して部落へ引き揚げた。我らもそれぞれのテントにもぐりこんだ。

Passada a calma, & a Ribeira, na qual acharão os Portugueses muy doces & grandes Mortinhos, caminharão por hũa Varzia to/fol.113/da semeada do mesmo Milho, & regada de Agoa, que vinha de hũa Serra fronteira, a qual sobida, se deu em hũa grãde planura toda povoada, & nella toparão o Ancosse das Povoações com algũs xxx. Negros. Recebeoo o Capitão Mór, & depois de lhe cõtar da sua perdição, & jornada, & pedio o que lhe era necessario, disse o Cafre, que lhe pezava muito de seus trabalhos, mas que era bom não morrer, & que Guias, & Mãtimentos lhe não faltarião. E em sinal desta promessa mandou vir dous grandes Boys, quatro Carneiros, & hum Cabaço de Leite, o que se lhe pagou com tres pedaços de Cobre, hũa Asa de Caldeirão, hũa perna de Coral, & hũa moeda de Prata Turquesca. E em particular lhe deu Nuno Velho outra Cortina da China, semelhante á que mandou á Viuva, com que o Ancosse, que se chamava Panjana, ficou em estremo contente & caminhãdo juntos, por aquella sua terra, estando ja o Arrayal alojado, trouxerão á este Negro, hum grande Cabaço /fol.114/ de vinho, cheo de baratas, feito de Milho a que chamão Pombe, de que deu de beber á Nuno Velho & aos mais Portugueses, que com elle estavão, & todos o gostarão, por lhe fazer mimo, & cortesia. E porque era ja quasi Noute, se foy ao seu Povoado, promettendo tornar ao outro dia com as Guias, & os Nossos se recolherão nas suas tendas.

〔6 月 5 日〕 約束を守って現われたアンコセは，我らをゆうべからの野営地に食事の時分まで引きとめた。そして雄ウシ 1 頭を銅のかけら 3 つと取り換え，別の 1 頭をヌーノ・ヴェーリョへ進呈した。ヌーノ・ヴェーリョはこれに対するお返しとして，アンコセへ水晶の数珠，鶏血石 1 個，少量のバルサムを差し出した。バルサムについてアンコセにはこう言ってやった。私は今，喘息を患っているのだが，実はこれ，その特効薬なのだ，と。アンコセは，ピロットがオルムス製の，小さな，ガラスのフラスコを持っているのを目ざとく見つけ，それをくれないか，とピロットに頼んだ。このフラスコと引き換えに，この黒人は大きな雄ウシ 1 頭と美しいヒツジ 1 頭を譲ってくれた。時刻はすでに正午を過ぎていたので，野営地をたたみ，良好で平坦な道を辿りはじめた。アンコセもまたついてきた。我らから離れるつもりはないかのようであった。日没を迎え，ヌーノ・ヴェーリョが天幕に引っ込むと，やっとアンコセは我ら一行およびカピタン・モールに暇乞いした。その際ヌーノ・ヴェーリョへ仔ウシ 1 頭とヒツジ 1 頭を贈った。

v. [5 de Junho]

Cumprio o Negro sua palavra, & entreteve os Nossos na estança té o jantar trocãdo hũ Boy por tres pedaços de

---

やす必要がある。そして自分たちが王からこの上なく歓待され恩恵を施してもらっていることを態度でもって示さねばならぬ。もし，これと相反することをやったり，こんな酒は飲みつけておらぬ，と口走ったりすると，王はただちにその人に対し一種の計略というか罠を仕組む。カフル人はこれをエンポーフィアと呼ぶ。王は次のように言う。飲むのがそれほどおいやか。それはわが酒が御身のお気に召さぬからか。それとも私が酒に毒でも盛ったとお考えのゆえか。御身は余をそこまでして悪い王に仕立てようとするか，と。そうして王はその者に宮殿から退出するよう命ずる。そのとき王は，飲むことを拒んだポルトガル人に対し，大いに立腹していることを示すか，もしくはそうしているかのような素振りを見せる。続いてただちにそのポルトガル人へ次のような伝言を送る。御身は余の許しなしに市を退去してはならぬ——。すると，この男は，気の毒なことに，王から自分の土地へ帰るための許しを得るその一歩手前というところで，手持ちのものすべてを手放してしまう羽目に陥る。それは，王のみならず，王の家来に差し出すべき賄賂，および袖の下のためである。こうしたエンポーフィアをだしにして，キテーヴェは多くのものを手に入れる。たとえくだらぬものの集積であっても，キテーヴェが客人からエンポーフィアにかこつけ多くを搾り取れると見れば，そのようにする。ものを差し出す相手は王のみならず王の家来にも及ぶ」(Fr. João dos Santos, *Etiópia Oriental e Vária História de Cousas Notáveis do Oriente*, ed. Manuel Lobato *et al*, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999, pp.94-95)

Cobre, & dando outro a Nuno Velho, pello qual elle lhe apresentou hũas Contas de Cristal, hũa pedra de sangue, & hũ pouco de Balsamo, que lhe disserão ser bom remedio pera a Asma, de que elle era enfermo. E vendo ao Piloto hũ Frasco pequeno de vidro de Ormuz lho pedio, & por elle lhe deu hum grande Boy, & hum fermoso Carneiro. Sendo ja passado meyo dia, levantousse o Cãpo, & por boa estrada, & chã foy marchando, hindo tambem o Ancosse, que se não sabia apartar dos Nossos. /fol.115/ E ja Sol posto depois que se recolherão, se despedio delles, & do Capitão Mór, mãdandolhe hũa Vitella, & hum Carneiro.

〔6 月 6 日〕黒人たちはこれから先しばらく続く無住の地に怖れをなしたか，この日——それはペンテコステ〔聖霊降臨祭〕の日であったが——，アンコセの約束とは裏腹に，我らを案内してくれるはずの人数は現われなかった。黒人たちが怖れたと同じ理由から，平常心を失ったポルトガル人が出た。彼らは前進を急ぐことを決意し，そのために仲間からはぐれることも辞せずという態度をとった。ゆうべのことだが，ヌーノ・ヴェーリョはこうした動きあるを察知し，もしもこのような誤った意図を実行に移そうものなら，連中の破滅は必定であろうと考え，持ち前の賢慮をもって，この騒ぎを鎮めた。朝になるや，野営地をたたみ，ガイドなしで行進を再開した。道は良好であった。11 時まで前進を継続し，ある河のほとりで停止した。そこへ多くの黒人がアンコセと一緒にやってきた。アンコセはマランガーナという名前で，道からやや離れた幾つかの部落を生活の場としていた。我らを一目見ようと，ウシ 1 頭を連れて出てきたのである。我らはこのウシを，サンゴのかけらや，銅のかけら数個との物々交換で手に入れた。ヌーノ・ヴェーリョはアンコセに対しガイドの提供を願ったが，前述のように，これから先しばらく無住の地が続くという理由によって，その願いは拒絶された。しかしどの道をゆけばよいかは教えてくれた。手の動きによってこれから進むべき方向を指してくれたのである。その方向をピロットが羅針盤で確かめると，まさに北東方向であった。黒人たちが去ってしまってから，我らはその方角へ夜まで前進した。やがて密林の中に入り込み，そこで野営した。

vj. [6 de Junho]

Temendo os Negros hum pedaço de despovoado, que se seguia, não vierão ao outro dia, que foy o de Pentecoste, pera guiarem os Nossos, como promettera o Ancosse, & pella mesma razão, ouve algũs Portugueses mal sofridos, que determinarão apressar a jornada, apartandosse da companhia. O que entendendo Nuno Velho a Noute de antes, & que se perderião, effectuando seus errados intentos, com sua costumada prudencia aquietou este desassossego. E como foi menhã, levantado o Arrayal foy caminhando sem Guias por boa terra, té as onze horas, que parou ao longo de um Ribeiro, onde vierão ter muitos Negros com o seu Ancosse chamado Malangana, que vivia em hũas Povoações apartadas do caminho. E por ver os Nossos sairão á elle com hũa Vaca, que trocarão, por hum pedaço de Coral, & dous de Cobre. Pe/fol.116/diolhe Nuno Velho Guias, & pella mesma causa do despovoado as negarão, mas ensinarão a estrada, & mostrarão com a mão a Derrota, que se havia de levar, a qual o Piloto marcou logo com a Agulha, & era ao Nordeste, & por ella, depois que os Negros se forão, caminharão os Nossos té a Noute, que em hum bosque se agasalharão.

〔6 月 7 日・8 日〕相変わらずの無住の荒野を，我らは 7 日，8 日の両日にわたり前進した。正午頃，いたって涼しげな山並みにぶつかった。山並みはふたつに分かれており，そのひとつは北へ向かい，もうひとつは東へ向かっている。二手に分かれた山並みのあいだをかなり大きな谷が延びている。我らはその谷の入口で黒人を 8 人見かけた。彼らは牧草を燃やすことに精出していた。彼らのもとへ通訳をさしむけ，こちらへ来て欲しいという意図を伝えた。幾人かがアンコセを呼びにいった。アンコセと一緒に 20 人がやってきた。彼らはこの山並み一帯でしきりと略奪行為を働き，強盗でもって生計を立てている。したがってアザガイアと矢で武装してやってきたのは当然

である。俺たちの部落は遠く離れているのだと，彼らは偽った。彼らは悪巧みを実行に移すため，我らを薪も水もない深い谷に誘い込んだ。ヌーノ・ヴェーリョは，これらの黒人のひとりをそばにひきつけていたが，どうもその男に落ち着きがない。ヌーノ・ヴェーリョは，男がウシ 1 頭をその群れから離し盗んでしまおうとしているのだと考え，油断をするな，と兵士に伝えた。前方をゆくピロットも，自分を取り巻く連中に同じような気配を感じたので，後方へ目配せして注意を促し，その背後をわが一行の全員で固めた。おのれの悪巧みは露顕したと観念しているものと思いきや，連中はもっともらしい顔でしらを切りつづけている。ついにひとりがウシの群れに入り込み，群れから 1 頭を離そうと試みた。彼の大胆不敵な振舞いには手痛い報いが待っていた。鉾槍の竿でもって頭にきつい一撃が加えられたのである。たまらず男は倒れた。これが他の連中の眼にとまるや，皆，全速力で逃げ散った。男もまた仲間の後を追った。こんなひどい連れ合いならいないほうがよい。我らはガイドなしで午後の行進を終え，山並みに陽が落ちかかる頃，野営地を設けた。カフル人を怖れるあまり，その夜は念入りな警戒を解かなかった。

vij.; viij. [7 de Junho; 8 de Junho]

Pello mesmo deserto forão aos vij. & aos viij, ao meyo dia encõtrarão hũa Serra muy fresca, que dividida em duas partes, hũa dellas hia ao Norte, & outra á Leste, & entre ambas ficava hum grande & estendido Valle. Virão os Nossos na entrada delle oyto Negros, que andavão queimãdo o Feno, aos quaes se mandou hũa Lingoa, pera que os chamasse, forão algũs buscar o seu Ancosse, & cõ elle vierão vinte. Andavão todos nesta Serra levantados, & de roubos, se sostentavão, & assi vinhão armados com Azagayas, & Frechas[19], fingirão terem o seu Povoado longe, & pera o seu intento, encaminha/fol.117/rão os Nossos á hum Valle fundo, & em que não havia nem Lenha, nem Agoa. Levava Nuno Velho hũ destes Negors, & vendoo desenquieto, & que dava mostras de querer desviar algũa Vaca do rebanho, pera a furtar disse aos Soldados, que estivessem á lerta[20]. E conhecendo o Piloto, que hia diante o mesmo dos que o acõpanhavão, voltou pera riba, & apos elle todo o Arrayal, & parecendolhe aos Negros, que era descuberta a sua danada tenção, forão dissimulando, & hum delles se metteo entre as Vacas, & procurou desencaminhar hũa, pagouselhe este seu atrevimento com hũa haste de Alabarda, dandosselhe hũa pancada na cabeça, de que cayo. O que visto dos outros, a todo correr fogirão, & este apos elles, & sem tão roim companhia acabarão os Nossos a jornada daquella tarde alojandosse ja quasi noute na Serra, onde vigiarão cõ grande cuidado temendosse dos Cafres.

〔6 月 9 日〕 夜が明けるや，進路を東北東にとり，東へ延びる山並みに沿って前進した。その我らの姿がゆうべの野営地にたむろしている黒人どもに目撃されてしまった。連中の叫び声を聞きつけて，少なからぬ黒人どもが手に手にアザガイアを持って集まってきた。連中は丘を駆け下って我ら一行のもとへ向かってきたのだ。連中が昨日のような行動に出ても混乱を衝かれぬよう，わが一行は行進を一時中止し，態勢を立て直したうえで前進を再開した。黒人たちは我らが決然たる覚悟を決めていると判断して，たじろぎ自制した。連中の一部が仲間から離れて，我らの声がはっきり聞こえそうなところまで近寄ってきた。そして，君らはいったい誰か，俺たちの土地をうろうろして何を捜しているのか，と尋ねた。通訳はこれに対していつもどおりのことを答えた。黒人はこの通訳およびヌーノ・ヴェーリョの言葉に納得し，みずからの長(おさ)を呼びにいった。ヌーノ・ヴェーリョはこの長を快く迎え，別れ際に水晶の数珠でこしらえたロザリオを持たせた。この連中が去り，もう少し進んだところで，別の黒人 60 人余に出くわした。そのうちの 3 人がわが一団に近寄ってきた。そのなかで一番の長老は，我らが海難を蒙り，その後こ

[19] おそらく "Flechas" が正しい綴りであるが，語中の "l" が "r" に変わるのは今日のブラジル民衆語において普通に見られる音韻現象であり，16 世紀ポルトガル語の一特徴を継承するものである。

[20] 海賊版には "alerta" とある。

こまで徒歩でやってきたと知るや，大声で仲間を呼び寄せ，こう言った。「皆の者，太陽の子がおいでだ。見に参れ」と。皆はひとりの従者にすべての武器を預け，我らを一目見ようと，また，歓迎しようと，全速力で我らのもとへ駆け下りてきた。この連中と一緒に我らはシエスタの時間まで前進し，鬱蒼と生い茂った密林の蔭で午睡をむさぼった。そこへ数人の黒人がトウモロコシを持ち込んできた。水晶のコンタツや，頭に巻きつけるための色とりどりの布切れとの引き換えで，彼らはトウモロコシを譲ってくれた。この場へ彼らのアンコセが姿を見せた。しかしヌーノ・ヴェーリョは期待どおりのもてなしをこのアンコセから受けることはなかった。それどころか，我らの気が緩んだその隙をついて攻撃されそうな気配さえ感じたので，ヌーノ・ヴェーリョはおのれに従う兵士に対し，アルカブース銃の発射準備を整えておけ，さらに，撃とうと思う黒人の目星をつけておけ，と申し送った。アンコセにはヌーノ・ヴェーリョの決意がただごとではないと判ったけれど，おのれの意図は巧妙に隠し，猫をかぶったままであった。カピタン・モールは命を下して隊列をそのまま前進させ，アンコセも彼の部落も気にするな，と指示した。部落はたちまち通り過ぎた。日没時，野営になくてはならぬものを得る便宜のあるところで，大休止した。そこへ他の村々から黒人がふたりやってきた。ふたりは銅のかけらをひとつずつもらったことに満足して，我らの一行を案内するため翌日ここへ戻ってこようと約束した。

ix. [9 de Junho]

Como foy menhã fizerão o caminho ao longo da Serra, que hia á Leste com o /fol.118/ rosto á Lesnordeste, & della forão vistos de algũs Negros do Alojamento passado, á cujos brados, se ajuntarão outros muitos com Azagayas, os quaes por hũ Outeiro abaixo vierão decendo, pera o Arrayal, & porque se fossem como os passados, o não achassem desordenado, fez alto, & posto em ordem tornou á marchar. Detiveraõsse os Negros entendendo a determinação dos Nossos, & apartãdosse delles algũs, chegarão á parte, donde os podessem ouvir, & preguntarão, quem erão, & que buscavão pellas suas terras. Respondeolhe a Lingoa, o que costumava, & delle, & de Nuno Velho assegurados, forão chamar a seu Capitão, que foi delle agasalhado, & com hũ Rosario de Cõtas de Cristal despedido. Hidos estes, pouco espaço a diante encõtrarão algũs lx. dos quaes vierão tres ao Arrayal, o mais velho, depois que soube a perdição, & caminho dos Nossos, chamou aos outros á grandes vozes, dizendo: Vinde, vinde ver estes homens, que saõ filhos do Sol, /fol.119/ & o vão buscar, deixarão todos as Armas em goarda de hum Companheiro, & a todo correr baixarão á ver, & festejar os Nossos, & com elles caminharão té horas de sesta, que á sombra de hum Bosque passarão. Trouxerão aly algũs Negros Milho, que derão por Contas de Cristal, & tiras de Pano de cores pera a cabeça, & á mesma estança veyo o seu Ancosse, em quem não achando Nuno Velho o agasalhado que esperava, & entendendo nelle desejos de cometer os Nossos achandoos desapercebidos, avisou aos Soldados, que o acompanhavão, pera que aprestassem os Arcabuzes, & cada hum assinalasse o Negro, a que queria atirar. Conhecendo o Cafre esta determinação, dessimulou cõ a sua, & o Capitão Mór mãdou que caminhasse o Cãpo, & se não fizesse caso deste Negro, nem da sua Povoação, pella qual logo ao diante se passou. Ao Sol posto se fez Alojamento em hũ lugar comodo, do que se avia mister, onde vierão 2. Negros de outras Aldeas, /fol.120/ que contentes com dous pedaços de Cobre prometerão tornar ao outro dia á guiar os Nossos.

〔6月10日・11日〕 野営地の夜が明けるや，ゆうべのふたりが約束を守ってやってきた。そして彼らの先導でなだらかな山に登った。山からは別の山並みを望んだけれども，カフル人は道を知っており，それ伝いに先導してくれたおかげで，山並みを越えてゆく厳しさはかなり緩和された。夜になったので，最後にぶつかった山並みの麓で前進を打ち切った。翌日，進路を東および東南東にとりつつ，その山並みを縦走した。それを通過したところで，東北東に進路をとり直した。途中，濃い翳を落とす高木の密生する林を通り抜けた。やがて，斜面を下りてゆくと大きな岩と岩とに挟まれた低地に黒人の家が数戸あった。その家々のそばで一行は野営した。

x.; xj. [10 de Junho; 11 de Junho]

Assi o cõprirão amanhecendo no Arrayal, com cuja Guia, sobirão hũa Serra, & postoque della descobrirão outras, os Cafres os levarão por caminhos que facilitavão a aspereza dellas, & ficarão a Noute ao pee da derradeira: a qual atravessarão ao outro dia hindo á Leste, & á Lessueste, & passada tornarão ao caminho de Lesnordeste por Bosques muy espessos de Arvores altas, & sombrias, & decendo hũa Cósta, no baixo entre grandes Rochedos estavão hũas casas de Negros, ao longo das quaes se alojarão.

〔6 月 12 日〕 この家々に住むカフル人は貧しい。持ち物といえば僅かばかりのトウモロコシと少々の牛乳だけであるのに，彼らはそれを譲ってくれた。ここまでやってきて，カフル人のあいだに置き去りにされた老人がいる。カフル人の陋屋から少々離して造られた小屋にそのまま残ることになったのだ。老人はアルヴァロ・ゴンサルヴェスといい，年齢は 75 歳である。コントラメストレの父で病篤く，仲間全員もその世話に疲労困憊し，これ以上おぶって運んでやるのは（それまではずっとそうしていたのだ）もう無理であった。孝行息子は父親と一緒に残ることを望んだけれど，それは許されず，せめて父親が必要なものを買うときに困らぬよう銅を残してゆくことにした。そして，必要な品々を黒人たちに欲しいと伝えることができるよう，それらの呼び名を 1 枚の紙に列記し父親に渡した。いとも悲しい別離を前にして，落涙を抑えうる者はいなかった。息子は老父のかたわらから引き離された。父親は告解を済ませ，ひとこと祝福の言葉を与えて息子に別れを告げた。デウスの御旨にどこまでも副い奉ろうとする，りっぱなキリシタンらしい振舞いであった。

xij. [12 de Junho]

Erão estes Cafres pobres, & não tinhão senão hum pouco de Milho, & algum Leite, que lhes derão, & entre elles em hũa Cabana, que se fez apartada das suas, ficou hũ Velho de lxxv. annos por nome Antonio Gonçalvez, Pay do Contramestre, que vinha muy doente, & todos os Companheiros tão cansados, que /fol.121/ o não podião mais levar aos hombros, como té ly fizerão. Quisera o piadoso filho ficar com elle, & não se permettindo, deixoulhe Cobre, pera comprar o que ouvesse mister, & em hum papel escrittos os nomes das cousas necessarias, pera as pedir aos Negros, & com géraes lagrimas de tão lastimoso apartamento o tirarão junto de seu Pay, que com hũa benção o despedio, ficando confessado, & como bom Christão muy conforme com a vontade de Deos. †

この出来事のため，わが同胞はゆうべの野営地に 12 日の正午まで留まらざるを得なかった。正午にピロットが太陽の高度を計測したところ，現在地は南緯 27 度 27 分と判明した。そのためピロットはよりすばやく浜辺に到達できるよう，東へ，それもやや北東寄りに進路をとることにした。浜辺からの距離は 40 レゴアと推計された。2 時になって，あたりの諸集落を統べる長がガイドたちを連れてやってきた。ガイドを提供してくれたその返礼としてヌーノ・ヴェーリョは長へ銅のかけら 4 つを手渡した。ガイドは我ら一行を先導し，平坦で良好な土地をまっすぐ東へ進んだ（その方向には，黒人の言葉によると，彼らの利用する赤い数珠玉を売る部落があるという。この数珠玉こそ，ロウレンソ・マルケスの河へもたらされるものにほかならぬ，ということである）。日没の頃，ある谷間に辿り着き，そこで野営した。

† Detiverãosse os Nossos por esta causa no Alojamento da Noute, té o meyo dia dos xij. em que o Piloto tomou o Sol, & achou que estavão em 27. Graos, 27. Minutos, pello que determinou de caminhar á Leste quarta á Nordeste pera tomar mais depressa a Praya, da qual se fazia 40. Legoas, & sendo duas horas veyo o Senhor das Povoações, cõ Guias, pellas quaes lhe deu Nuno Velho quatro pedaços de Cobre, & seguidas do Arrayal por terra chã, & boa, dereitos á Leste (pera onde dezião os Ne/fol.122/gros, que estava o Povoado em que se vendião as suas Contas vermelhas, que saõ as que vem ao Rio de Lourenço Marquez) chegou ao Sol posto á hum Valle, onde se fez

o Alojamento.

〔6月13日〕 さて，野営地を出発した翌13日は聖アントニウスの祝日であった。10時には少なからぬ人家に遭遇した。家々から多くのカフル人が我らを見にやってきた。我らに近寄るや，カフル人に初めて出逢ったとき，彼らが述べたあの挨拶と同様，連中も「ナニャター・ナニャター」と言うことで我らに対する挨拶を送った。彼らの群れの中に長(おさ)らしい者がいた。彼は不在のアンコセの命を受けてこの集落に住んでいるのだという。カピタン・モールはこの長を快く出迎えた。カピタン・モールは，これからの道行きのため必要となるものは何か，長から聞き出したいと思った。黒人はそれに答えてこう言った。ここから海までは6日の行程だ。ただし別の道をとれば12日かかる。それはウニャーカの支配地を通過した場合だ。この経路の場合，胸まで水に浸かるような相当に大きな河を渉らねばならない，と。この情報は一同を狂喜させた。船が見つかるかもしれぬと期待しうる場所から，一同はさほど離れていないと判明したからである。

xiij. [13 de Junho]

Delle partirão aos xiij. dia de S. Antonio, & ás dez horas virão muitas Povoações das quaes vinhão muitos Cafres á ver os Nossos, & como chegarão á elles saudarãonos dizendo. Nanhatá, Nanhatá, como os primeiros. Trazião estes entre si o seu Capitão, que residia naquelle Povoado por mandado do Ancosse que estava ausente, foy bem recebido do Capitão Mór, & querendo saber delle algũas cousas necessarias pera o caminho, disselhe o Negro, que daly ao Mar era jornada de 6. dias, & por outra parte era de 12. passando pellas terras do Vnhaca, por onde se havia de vadear hũ Rio grande cõ Agoa pellos peitos. Alegrou esta nova á todos sabendo, que estavão tão perto do lugar, em que esperavão achar embarcação. †

シエスタの時間を過ごしていると，アンコセの息子が父親の名代としてヌーノ・ヴェーリョを訪ねてきた。いったん訪問は済んだのに息子はすぐ戻ってきた。今度はゴブレットから取りはずした銀のメダルを首に掛けていた。我らはこの休息地でウシを数頭，通常の食糧として屠り，そして，トウモロコシ，牛乳，バター，ヒツジを物々交換で手に入れた後，前述の長をガイドに立てて行進を続けた。やがて日が暮れかけたので河のほとりで野営することにした。そこから黒人の長はみずからのアンコセに対し，明朝，ヌーノ・ヴェーリョに会いに来て欲しいと申し送った。

† E passando as horas da sesta, veyo hum filho /fol.123/ do Ancosse vesitar a Nuno Velho da parte de seu Pay, & feita a vesita se tornou logo, levando ao pescoço hũa Medalha de Prata, que se tirou de hum Copo, & os Nossos depois que naquella estança matarão algũas Vacas pera o provimento ordinario, & resgattarão Milho, Leite, Mãteiga, & Carneiros, forão caminhãdo cõ o mesmo Capitão por Guia, té que se recolherão quasi Noute, jũto de hũa Ribeira dõde o Negro avisou ao seu Ancosse, pera que viesse ver Nuno Velho pella menhã.

〔6月14日〕 アンコセの部落は遠く隔たっているため，彼の来着はほぼ11時になろうかという頃であった。ヌーノ・ヴェーリョがアンコセを迎えるため出てきた。アルカブース銃の射手を15人従えていた。アンコセ(その名をガマベーラという)は黒人を100人ばかり連れてきた。ただし彼らは丸腰であった。ヌーノ・ヴェーリョとガマベーラは手に手を取り合い，絨毯に腰を下ろして，まずカピタン・モールからこう話しかけた。お目にかかれて，また貴殿の土地に辿り着けてこんな嬉しいことはない。ここに来着して，私が辿り着こうともくろみ，かつ願っていた土地へ到るための確かな方策を得た心地がする，と。ガマベーラはカピタン・モールにこう答えた。お喜びはもっともである。あなたがたはもう海から遠くないところにいるのだ。そしてさらに言うには，道ゆきを締めくくるにあたり，私の持てるもの，私の提供しうるものを何なりと喜んで差し出し，必需品に困ることのないようにしてあげよう，と。

xiiij. [14 de Junho]

Estava a sua Povoação longe, & assi erão quasi xj. horas quando veyo. Sayoo a receber Nuno Velho acompanhado de xv. Arcabuzeiros, e o Ancosse (que se chamava Gamabela) vinha cõ cem Negros sem Armas, & tomãdosse ambos pellas mãos sentados em hũa Alcatifa, lhe disse o Capitão Mór, quanto folgava de o ver, & de ser chegado áquella sua terra onde tinha o remedio certo, pera hir á que elle pretendia, & desejava. Respõdeolhe o Gamabela, que tinha razão de estar cõtente, porque /fol.124/ ja estava perto do Mar, & que pera acabar a jornada, lhe não faltaria cousa algũa que ele tivesse, & pudesse. †

ただちにふたりのあいだで贈り物の交換が行なわれた。アンコセからはウシ 2 頭が差し出され，ヌーノ・ヴェーリョからは母真珠の数珠玉と，銀のかけらがひとつ，銅のかけらが 7 つ，そして鶏血石がひとつ渡された。贈り物の交換が一段落すると，話題はガイドのことに移った。そこでガマベーラによってガイドに指名されたのは部下のカピタン（別の部落から我らと一緒にやってきたあの男である）と，別の黒人ふたりである。我らは皆，このカフル人の手厚い接待ぶりに満足したが，彼のほうこそ我らをもてなすことにいっそうの満足を覚えているようであった。アンコセはヌーノ・ヴェーリョにこう語った。私は貴殿が欲しいと申し越してきたものは必ずさしあげてきた。そのお返しとして，もって尊名を語り継ぐよすがとすべきものを何か一品，ぜひとも頂戴したい。それは貴殿のことを記憶に留めるとともに，貴殿に随行してきたポルトガル人のことを脳裡に焼きつけるためである，と。

† Apresentarãosse logo hum ao outro, o Ancosse duas Vacas, & Nuno Velho hũas contas de Madreperola, hũa péça de Prata, sette pedaços de Cobre, & hũa pedra de sangue. Apos isto trattarão das Guias, & forão nomeadas do Gamabela, o seu Capitão (que com os Nossos viera da outra Povoação) & outros dous Negros. Contente toda a Gente do bom acolhimento deste Cafre, & elle muito mais de o fazer, disse a Nuno Velho, que em pago da vontade, com que dava tudo o que lhe tinha pedido, queria delle hũa peça, que em seu nome lhe ficasse, pera com ella se lembrar sempre delle, & dos Portugueses que o acompanhavão. †

ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラはこれに答えて言った。わかった。御依頼の趣旨をさっそく叶えて進ぜよう。貴殿には，世界中で最も貴重で何よりも尊重されている宝物を進呈するとしよう，と。ヌーノ・ヴェーリョは首に懸けていたコンタツから十字架をはずし，そしてソンブレイロを取り，両眼を天に向け，ただならぬ敬虔さをもって十字架に接吻した。そしてそれをかたわらにいるポルトガル人へ渡した。彼らが同じ拝礼の儀を済ませると，その十字架はアンコセに手渡された。カピタン・モールはアンコセに言った。これこそは，貴殿のため遺そうとするわが友情の尊きしるしだ。今，私の部下が拝礼したのを御覧になったと思うが，どうか，それをそのまま真似られよ，と。この蛮人は十字架を手に取り，我らが示したと同じうやうやしさでもって十字架に接吻し，それを両眼のもとに持っていった。他の黒人も皆，アンコセのしぐさを真似た[21]。

---

[21] カトリック信徒が十字架に対して懐く尊崇の念を身振りで示し，先住民にこれを模倣させる，という行動様式は，1500 年 4 月にポルトガル人がヨーロッパ人として初めてブラジル先住民と遭遇した際にも認めうるものである。その実例をペロ・ヴァス・デ・カミーニャの書翰（前出）から抽出し訳してみる。

「私たちが艀を出るとき，総司令官（カブラル）はこう申されました。『今十字架は，川のそばで，木にもたれさせてある。明日金曜日これを立てるのだが，我ら，そこまでまっすぐに行進するのが宜しかろう。そして十字架へ懐く我らの尊崇の念が連中（先住民）にもわかるよう，皆を挙げて跪き，これに接吻しようではないか』と。一同，そのとおりにしました。居合わせた 10 人か 12 人の連中に，我らのやるとおりにせよ，と身振り手振りで伝えますと，さっそく皆，十字架へ接吻をしに参りました」（Jaime Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, Lisboa, Portugália Editora, 1967, p.250. Cf. A Carta de Pêro Vaz de Caminha (Fac-símile e transcrição), f.11 in *ibid.*; Leonardo Arroyo, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha: Ensaio de Informação à Procura de Constantes*

† Respõdeolhe Nuno Velho Pereira que assi o faria como elle pedia, & que lhe daria a mais preciosa, & estimada Ioya, que havia no Mundo, & tomando a Cruz das Contas que ao pescoço tinha, tirando o sombreiro levã/fol.125/tados os olhos ao Ceo, com grande devação a beijou, & dandoa aos Portugueses, que jũto delle estavão, os quaes fizerão a mesma cerimonia a deu ao Ancosse, dizendolhe, que aquelle era o Sagrado penhor, que lhe deixaria da sua amizade, ao qual fizesse a mesma reverencia, que vira fazer aos Nossos. Tomoua[22] o Barbaro, & com semelhante acatamento a beijou, & pos nos olhos, & assi o fizerão todos os outros Negros. †

ヌーノ・ヴェーリョは黒人が至聖なる十字架にただならぬ尊崇の念を払いつつあるのを見，大工に命じ，かたわらに生えている木(この蛮人の地によくもこれほど手頃な木が生えていたもの。我らが救済のしるしはその枝からこしらえたのだ)を材料として十字架を1基作らせた。十字架はただちに作られた。高さは8パルモあった。ヌーノ・ヴェーリョはこの十字架を両手に捧げ持ち，これをガマベーラに手渡して，こう述べた。このように十字をかたどった木に磔(はりつけ)にされることによって我らが贖(あがな)い主は死を克服し給うた。この木こそ死を癒すものであり，病人にとっては健康を快復させる妙薬である。また，このしるしの功徳により，歴世の大帝は勝利を博してきたし，そして今，カトリック諸王は敵を圧伏しつつある。いともすばらしい贈り物と信ずるがゆえにこれを貴殿へ進呈したい。ついては，このしるしを家の前に供え，毎朝家を出るたびに，これに接吻して敬意を払うか，さもなくば跪いて礼拝するように。御家来の衆に健康を損ねる者が出たり，耕地に降雨が足りなかったりという事態が出来(しゅったい)しても，確信をもってこのしるしに祈りを捧げなさい。十字架で殺されることにより全人類を救い給うた神の独り子が貴殿の望むものを何であれ与えてくださるであろう，と[23]。このような言葉とともにヌーノ・ヴェーリョは，アンコセへキリスト教界の勝

Válidas de Método, São Paulo, Edições Melhoramentos. Em convênio com o Instituto Nacional do Livro – MEC, 1971, p.60. Cf. A Carta: fac-símile e transcrição diplomática, pp.106, 107 in *ibid.*)

「〔エンリケ師の〕説教に終始立ち会っていた連中(先住民)は，私たちと同様，師を見つめて身じろぎもしません。例の男(先住民)が数人の仲間に向かって『こっちへ来い』としきりに声をかけています。それに呼応してやって来る者もいれば，去る者もいます。ニコラウ・コエーリョが前回の渡航以来〔引用者——ニコラウ・コエーリョは，喜望峰廻りのインド航路を開拓したヴァスコ・ダ・ガマの船隊にも参加〕そのままになっている，磔のクリスト像がついた，錫の十字架をたくさん持ってきました。で，我々は，ひとりひとりの首へこれを掛けてやったらよかろうと考えました。これを実行するため，パードレ・フレイ・エンリケは(建立した)十字架の足許に腰をおろし，1本ずつひもに結んで，ひとりひとりに掛けてゆきました。エンリケ師はその際，まずこれに口づけをさせ，そうしてその両手を高く差し上げさせました。これを目当てに大勢が続々とやって参りました。おおよそ40か50はあったであろう錫の十字架をすべて彼らに掛けてやりました」(Cortesão, *op.cit.*, p.254. Cf. A Carta de Pêro Vaz de Caminha (Fac-símile e transcrição), f.12v in *ibid.*; Arroyo, *op.cit.*, p.62. Cf. A Carta: fac-símile e transcrição diplomática, pp.112,113 in *ibid.*)

[22] 初版本に "Tomouaa" とあるのを訂する。

[23] このように世俗的というか現世的な利益で先住民を"釣る"ことにより，カトリックが神聖と考える表徴への憧憬・崇拝・帰依の念を彼らの間に植えつけようとする"布教"の手法は，実際，キリシタン時代の日本においてもイエズス会宣教師がしばしば用いたものである。『イエズス会書翰集』や『フロイス 日本史』などカトリック側の公開性史料にはそうした事例が，躊躇なく，むしろ布教の成功を称揚するかの如き筆致をもって記述されている。その具体例については，cf. Hino Hiroshi, "Que bênçãos mundiais e seculares os fiéis e os infiéis japoneses quinhentistas procuraram no interior da fé cristã?", pp.807-835 (in *D. João III e o Império: Actas do Congresso Internacional comemorativo do seu nascimento* [Lisboa & Tomar, 4 a 8 de Junho de 2002]).

ラヴァーニャのテキストに見えるエピソードとよく似たそれを挙げるなら，ルイス・デ・アルメイダ修道士の志岐の島発信，1566年10月20日付書翰に見える，アルメイダの五島布教のおり生じていた内乱をめぐる次のような記事を引くことができる。

利のあかしと，比類なき栄光の象徴を手交したのである。アンコセはこれを背負い，我らの一行に別れを告げた。この友情のしるしを運んでゆける喜びに彼は涙を流した。アンコセはおよそ 500 人になろうかという部下に伴われ，この十字架とともに部落へ戻った。ヌーノ・ヴェーリョが自分に言いつけかつ懇願したことを実行に移すために。

† E vendo Nuno Velho a veneração, que fazião á Sanctissima Cruz, mandou á hum Carpinteiro, que de hũa Arvore, que junto delle estava (ditosa & bem nacida naquella Cafraria, pois de hum Ramo seu, se fez o sinal de nossa salvação) fizesse hũa Cruz, que logo foy feita de oyto palmos de alto. E tendoa com as maõs Nuno Velho, a entregou ao Gamabela, dizendolhe, que naquella Arvore, vencera o Autor da Vida a Morte, com a sua propria Morte, & assi della, era remedio, dos enfermos saude, & na virtude daquelle sinal, vencerão os /fol.126/ grandes Emperadores, & agora vencião os Reys Catholicos a seus imigos, & como dom tão excellente lho dava, & offerecia, pera que o posesse diante da sua casa. E todas as menhãs, como saisse della o reverenciasse beijandoo, & posto de giolhos o adorasse, & quãdo faltasse saude aos seus Vassalos, ou chuva aos seus Cãpos cõ cõfiança lha pedisse: porque hũ Deos & Homem, que morto nelle remira o Mũdo, lho concederia. Entregue com estas palavras o verdadeiro Tropheo, & a singular gloria da Christandade, ao Ancosse, elle a pos ás Cóstas, & despedido dos Nossos (com saudosas lagrimas do penhor que lhes levava) & seguido dos seus, que serião algũs 500. se foy cõ ella à sua Povoação, pera fazer o que Nuno Velho lhe dissera & pedira. †

これを聖なる十字架が博した大勝利と呼ばずして何と呼ぼう。コンスタンティーノやエラークリオの博したそれと同様，いくら讃えても讃えすぎることのない大勝利である。キリストの教えに帰依することきわめて深く，かつ神を畏れることはなはだしきふたりの皇帝〔コンスタンティーノとエラークリオ〕によって真正なる十字架が敵どもから——前者はジュデウ〔ユダヤ〕人から，後者はペルサ〔ペルシア〕人から——奪還され，それぞれが聖なる信仰の勝利のあか

キリシタンらは船に乗る時，私のもとに来て別れを告げ，戦さで危難に陥らぬため，何らかの聖宝か，または福音書や祈禱文を記した物を与えるよう請うた。私は彼らに答えて，聖宝の代わりに十字の印やイエズス・マリアの御名を用い，いかなる苦難に見舞われてもそれらに救いを求めるべきであり，それ以外のことは必要ないと言った。彼らは皆，私の言葉を深く信じ，心慰められて私のもとを辞去し船に乗ったが，我らは我らの主なるイエズス・キリストに彼らを護り給わんことを祈った。

それから 3，4 日後，彼らは戦さから戻ってきた。主は限りなき御慈悲により，異教徒の中に多数の負傷者が出て幾人かは死んだが，ドン・ジョアン〔引用者——五島におけるキリシタンのリーダー〕ほか，およそ 50 名のキリシタンは一人も傷を負わず，敵に対する行為により非常な名誉を携えて帰った。すなわち，25 歳の青年のキリシタンは先陣を切って進み，謀叛人の側からも非常によく武装した者が一人現れ，両者は対戦したが，シスト〔同青年はそのように称した〕は相手に与えた最初の一太刀でこれを殺し，謀叛人らが彼の所に至る前にその鎧と兜を奪い取った。これは彼らの間では最大の武功である。謀叛人らはこの予兆により大いに恐れをなしたので，（キリシタンらは）ほとんど労することなく彼らを打ち破り，生き延びた者は平戸に逃れた。異教徒は，キリシタンが一人も死傷者を出すことなく，かくも大なる名誉を担って戻ったのを見て少なからず当惑した。これにより（キリシタンらは）いかなる苦難が生じようともイエズス・マリアの御名と十字の印を切ることに非常な信心を抱くようになった。すなわち，彼らが私に告白したところによれば，彼らは下船する前に，跪いてコンタツの十字架を持ち，深い信心とともにイエズス・マリアの御名を称えて十字の印を切り，（しかる後に）上陸したとのことである。

（*Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, des do anno de 1549 atè o de 1580.* Primeiro Tomo (Edição fac-similada da edição de Évora, 1598), ed. José Manuel Garcia, Maia, Catoliva Editora, 1997, f.222. 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第 III 期第 3 巻，同朋舎，1998 年，141～142 頁）

しとなったように[24]，この十字架——そのかたどりにすぎぬが——もヌーノ・ヴェーリョという名誉ある，高徳をもって鳴るフィダルゴにより，異教世界の極致というべき当カフラリーアのただ中に樹立され，そこに燦然(さんぜん)と君臨しつつある。我らがこの甘美なる木の十字のかたどりに縋(すが)ることによって難船の災厄から救出された如く，願わくは，主なるデウスよ，これら異教徒のエンテンヂメント[25]に光を与え給え。さらにヌーノ・ヴェーリョが残した十字架に縋ることにより，彼らが現下の破滅と盲目とから救い出されんことを。

† Triũpho foy este da Sagrada Cruz, digno de se festejar á imitação dos de Constantino, & Heraclio, porque se aquelles Christianissimos & devotos Emperadores, libertaraõ a verdadeira, de seus inimigos, hum dos /fol.127/ Iudeus, & outro dos Persas, com que ella ficou Triumphante. Esta (imagem daquella) foy por este honrado & virtuoso Fidalgo levantada, & arvorada no meyo da Cafraria, centro da Gentilidade, da qual oje está Triumphando. E pois que abraçado com este doce Madeiro, se salvou o Mundo do seu Naufragio, querera Deos Nosso Senhor alumiar o entendimento destes Gentios, pera que, abraçandosse com esta fiel Cruz, que lhes ficou, se salvem da perdição & cegueira, em que vivem.

〔6月15日～16日〕 聖なる十字架の木はこうしてカフル人の土地に移植された。これによって，当地の人々の救済という，甘美極まりなき果実の収穫が期待されよう。翌日すなわち15日，わが同胞は彼らに別れを告げた。しばらくはガマベーラも一緒であった。カピタン・モールに付き添ってくれたのである。しかもガマベーラ自身がすでに指名していた数人のガイドをつけてくれるという親切ぶりであった。10時に1軒の家に行き着いたところで，アンコセは手厚い友情の実意を示しつつヌーノ・ヴェーリョに暇乞いをした。

xv. xvj. [15 de Junho, 16 de Junho]

Plantada por este modo a Arvore da Sancta Cruz na Cafraria, da qual se pódem esperar suavissimos fruittos da salvaçaõ daquella Gente. Ao outro dia, que foraõ xv. despedidos os Nossos della, cõ o Gamabela, que quiz acõpanhar ao Capitaõ Mór na primeira jornada, & cõ as Guias, que elle tinha nomeadas, partiraõ daquelle lugar, & às dez horas chegaraõ á hũa casa, dõde se licenciou de Nuno Velho o Ancosse cõ verdadeiras demõstrações[26] d'amizade. †

---

[24] コンスタンティーノとはコンスタンティヌス大帝のこと。ローマ皇帝(在位306～310年副帝，310～337年正帝)として初めてキリスト教を公認し，これに改宗した。312年ローマ進軍の際，ミルウィウス橋の戦いで，マクセンティウスの全軍2000をテヴェレ河に追い落として全滅させた。ラクタンティウスやエウセビウスらキリスト教史家は，この戦いに際し，コンスタンティヌスはキリスト教の神の加護を得，中空にキリストの頭文字からなる十字架の幻を見て勝利したと伝え，これが帝の改宗の動機になったと述べる(『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局，1986年)。本文に言及はないが，フラーウィア・ユーリア・ヘレナ(255頃～330年頃)はコンスタンティヌス大帝の母。伝説によると，彼女はカルヴァリの丘でキリストの十字架を発見したという。さらにエラークリオとはビザンティウム帝国皇帝ヘーラクレイオス(在位610～641年)のこと。614年ペルシア軍がイェルサレムを占領して聖十字架を持ち去ったため，これと戦い，628年ようやくペルシア軍を占領地から撃退，聖十字架をイェルサレムに奪還した。「コンスタンティーノやエラークリオの博した」大勝利とは上記のような出来事もしくは伝説を指す。

[25] 原綴りは "entendimento" であり，通常は「悟性」と訳されるが，キリシタン時代，この語彙は日本語で書かれた教理書においてポルトガル語を音訳しただけの形で用いられており，仮にそれに従う。『ドチリナ・キリシタン』(1600年刊，ローマ字本)には，人間の有する3つの「精根」のひとつに「エンテンヂメント」が挙げられ，「善悪を弁へ分別する精」と説明される。海老沢有道他編著『キリシタン教理書』キリシタン研究第30輯，教文館，1993年，40頁参照。

[26] 初版本に "dmõstrações" とあるのを訂する。

アンコセが去るのを見届けて，わが同胞は行進を再開した。一帯には棘のある木々と無住の土地が広がっていた。土地には少なからずアロエの木が茂っていた。夜のとばりが下りる頃，一行は清冽なる河のほとりで夜営した。夜が明け染めるやただちに出発し，午後の 2 時まで行進を続けた。その刻限に幾つかの人家を認めたが人の気配はなかった。しかしたくさんのニワトリがいたし食糧もたっぷりあった。ヌーノ・ヴェーリョは，ニワトリにせよ食糧にせよ，何ひとつ我らの一行が無断でこれを持ち去らぬよう，監視の眼を光らせた。ニワトリや食糧の所有者はそのとき，幾つかの丘に散らばっていた。やがて彼らはわが方のガイドと通訳によって呼び集められた。数人が丘を下りてきた。家々を逃げ出してそこを空(から)にしているわけは何かと尋ねると，となり村とのあいだに争いが起こっているからだという。彼らによると，ほんの数日前，となり村の連中がやってきて家畜を根こそぎ奪っていった，と。我らが恐れている敵ではないと知るや，彼らは皆，藁葺き小屋へ引き揚げた。わが同胞は黒人をひとり差し出してもらい，この男が一行を当夜の野営のために必要な薪水のあるところへ案内してくれた。

† /fol.128/ Hido o Negro continuousse o caminho por entre Arvores espinhosas, & terra despovoada, em que havia muita herva Babosa, & sendo Noute, se alojarão ao lõgo de hũa Ribeira mui fresca. Dõde como amanheceo tornarão a caminhar té as duas horas, que acharão Povoações sem Gente, mas com muitas Galinhas, & Mãtimentos. Mandou Nuno Velho goardalas, porque se não tomasse dellas cousa algũa, & chamados seus donos (que em hũs Outeiros estavão) das Guias, & das Lingoas, baixarão algũs, & deraõ por razaõ da fogida, & desamparo das casas, a guerra que tinhaõ cõ hũs vezinhos seus, os quaes poucos dias antes lhes levaraõ todo o Gado. E vendo que naõ eraõ os Nossos os imigos de que se temiaõ, tornaraõ todos ás suas Choupanas, & deraõ hum Negro que guiou o Arrayal, a onde havia Lenha, & Agoa necessaria, pera a estança daquella Noute.

〔6 月 17 日〕 翌日はサンティシモ・サクラメント〔至聖なる秘蹟〕の祝日であった。この日，我らが同胞は見渡す限り広がる平原を行進した。平原は牧草と樹木が豊かに生い茂っていたが，さらなる豊かをもって生息しているのが野生のウシ，スイギュウ，シカ，ノウサギ，ブタ，ゾウである。こうしたけものが幾つもの群れを形成して平原いっぱいに広がり，牧草を食むことに余念がなかった。このたびの長い道中で，この種の動物にぶつかったこれが初めての体験である。けものは，南北に走る大きな山並みからこの平原に下りてくるのだ。さてわが一行であるが，ある谷を経てこの山並みに入った。谷沿いに 1 本の河が流れており，これを幾度も繰り返し渉った後，河のそばに野営地を設けた。

xvij.[27] [17 de Junho]

Foy o outro dia da festa do Sanctissimo Sacramento, em que por hũa muy /fol.129/ estendida Varzia os Nossos caminharão, povoada de bõs pastos, & arvoredo, & muito mais de Vacas bravas, Bufalos, Veados, Lebres, Porcos, & Alifantes, que em numerosos bandos andavão por ella pacendo. Forão estes os primeiros Animaes deste genero, que encontrarão por este longo caminho, os quaes descem áquelles Campos de hũa grande Serra, que os atravessa de Norte á Sul. Nella se entrou por hum Valle, pello qual corria hũa Ribeira, que se passou muitas vezes, & junto della se fez Alojamento.

〔6 月 18 日〕 朝の到来とともにわが一団は野営をたたみ，きのうと同じ谷と河とに沿って 10 時まで行進した。ちなみに谷も河も，極端なまでに緑の勢いが強く，爽やかであり，さまざまな色彩の樹木に覆われている。その樹間に赤いくちばしを持つ緑のオウム，それにウズラやカササギ，その他さまざまな種類の鳥がおびただしく認められた。わが一行は南西側から山並みの尾根に登りつめた。そしてその高みにできていた平坦地で 4 人の黒人に行

[27] 初版本に“xviij.”とあるのを正誤表によって訂する。

き逢った。彼らは狩りに精出しているさなかであった。ガイドの口から，食糧を提供すれば我らがどれほど気前のいいお返しを出すか，を聞いた 4 人は，ただちに去った。部落へ食糧を取りにゆくと言い残して。わが一行はしかし彼らの戻りを待つわけにはゆかなかった。例の河沿いの樹林で待つとしてもせいぜいシエスタの時間までが限界であった。河のむこう岸に丘がひとつ見えた。暑熱をやり過ごした後，この丘に上った。丘に続いて平原が広がっており，その平原を前記の河が豊かに潤していた。平原には昨日の旅程で行き逢ったと同じ野生のけものに加え，カモやアヒル，ツグミやツル，野生化したニワトリやサルも見られた。前記の河から派生して沼のようになっているところで(そこでその夜の野営を行なった)，夜，多くのカバが目撃された。その唸り声のため我らは静かな眠りを妨げられた。

xviij. [18 de Junho]

Levãtousse delle o Arrayal, como foy menhã, & caminhando té as dez horas, pello mesmo Valle, & Ribeira (que era em estremo viçosa & fresca, cuberta de Arvores de varias cores, nas quaes se vião muitos Papagayos verdes com bicos vermelhos, Perdizes, Rolas, & outros diversos generos de Passaros), sobiosse hũa põta da Serra da parte do Sudueste, & em hũa chã que no alto della se fazia se encõtrarão quatro Negros, que andavão á caça, os quaes sabendo das Guias, cõ quan/fol.130/ta largueza cõpravão os Nossos os Mantimentos, forãosse logo, dizendo que os hião buscar ao seu Povoado. Não os esperou porem o Arrayal, nem se deteve, senão ás horas de sesta, em hũ Bosque ao longo da propria Ribeira. Havia da outra banda hũ Outeiro, que se sobio passada a calma, & delle seguia hũa estendida Cãpina, que toda da ditta Ribeira se regava: na qual havia alem da caça da jornada passada, Patos, Adens, Tordos, Grous, Galinhas do Mato, & Bogios, & em hũa Alagoa, que della se fazia, no lugar em que os Nossos se recolherão a Noute virão muitos Cavallos Marinhos, que cõ seus rinchos os não deixarão dormir quietamente. †

〔6 月 19 日〕 それゆえ，翌日の起床時間はふだんよりも遅くなった。この日はまず湿地に辿り着いた。人里は近いようだとガイドは口を揃えて語った。やがてこの湿地沿いに野営を張り，ヌーノ・ヴェーリョはガイドひとりを伝令に飛ばして，みずからの到着をアンコセに知らせた。

xix. [19 de Junho]

† Pello que mais tarde do ordinario, se levantarão o outro dia, no qual se chegou á hum Bregio, que as Guias disserão estar perto do Povoado, & alojandosse ao longo delle, despedio Nuno Velho hũa, pera que fosse avisar ao Ancosse da sua chegada.

〔6 月 20 日〕 翌朝ヌーノ・ヴェーリョは，アントニオ・ゴディーニョに別の黒人ひとりをつけてアンコセを訪ねてくるよう命じた。ゴディーニョが戻ってきたとき，一同はやっとの思いで湿地の向こう側に移動していた。家畜〔ウシ〕は，ややもすれば湿地に脚を取られてずぶずぶと深みにはまり込むから，ロープでこれを曳かねばならず，これによって一行はかなり消耗した。しかしゴディーニョがもたらした朗報に接して，わが仲間はこれまでのあらゆる労苦を忘れてしまった。朗報とは次のとおりである。すなわち，ゴディーニョが訪ねたアンコセはウニャーカの副官である。このアンコセは，ゴディーニョを温かくもてなし，約束していわく，ウニャーカのもとへ達するまで，君らのため，みずからの土地にあるものは何なりと供給してあげようと。アンコセはまたこうも言った。私は知っているが，ポルトガル人とウニャーカとは友人同士だ。モサンビークからの船[28]だが，これはまだ出発してはいない。つい先日も

[28] 原語には "o Navio" とあるだけであるが，具体的には，年 1 度モサンビークから来航する交易船でポルトガル人がパンガイオ pangayo (= pangaio) と呼んだものを指す。

物々交換に用いる象牙を携えた黒人が私〔アンコセ〕の部落を通過したばかりだ，と。

xx. [20 de Junho]

A menhã seguinte o mãdou logo ve/fol.131/sitar por Antonio Godinho, com outro Negro, o qual voltou á tempo que os Cõpanheiros estavão ja da banda de Alem do Bregio, muy cansados de titarem o Gado por cordas, porque nelle atolava. Mas com as novas, que deu, esquecerão todos os passados trabalhos. Estas forão ser o Ancosse, que vesitara Capitão do Vnhaca, o qual o recebera com gasalhado, & prometera tudo o que havia na sua terra, té chegarem ao Vnhaca, de quem sabia serem os Portugueses amigos. E que o Navio não era partido, porque havia poucos dias, que passaraõ por aquella sua Povoação Negros cõ Marfim pera o resgatte. †

このアンコセの副官がさっそくやってきた。副官はアンコセの命を受けてヌーノ・ヴェーリョを訪ねてきたのである。この男はヤギ 2 頭とニワトリ 2 羽を持参していた。この男の後にアンコセ本人もついてきていた。ヌーノ・ヴェーリョはアンコセに勧めて絨毯に腰を下ろさせた。アンコセは，アントニオ・ゴディーニョがもたらした報せを確かなものとして保証し，さらにカピタン・モール〔ヌーノ・ヴェーリョ〕がウニャーカに関する照会を行なったことを大いに喜んでみせた。その後，アンコセはカピタン・モールへウシ 2 頭を進呈した。ヌーノ・ヴェーリョからは銀製のコップに蓋がついたものと，銅のかけら 4 つがアンコセへ手渡された。アンコセの連れていた甥っ子へも銅のかけらを別に 3 つ与え，半分に割れた銀製の小さなコップを首の廻りに懸けてやった。もらうものをもらうと，私らの部落はちょっと離れているからと言って，ふたりは帰ってしまった。満足した顔つきであった。我らの満足もふたりの満足に劣るものではなかった。さしあたり湿地そばの野営地からは動かぬことにした。この地点でピロットが太陽の高さを計測したところ，南緯 27 度 20 分と判明，しかも問題の船が停泊している港からの距離は 30 レゴアと推計された。

† Chegou logo hũ Capitão deste Ancosse, que da sua parte vinha vesitar Nuno Velho, cõ dous Cabritos, & duas Galinhas, & apos elle o mesmo Ancosse, que Nuno Velho assentou na sua Alcatifa, & depois que confirmou as novas, que dera Antonio Godinho, & mostrou estimar muito pergũtarlhe o Capitão Mór pello Vnhaca, apresentoulhe 2. Vacas, & elle lhe /fol.132/ deu hũa cobertoura de hũ Copo de Prata & quatro pedaços de Cobre, & á hum Sobrinho seu, que trazia consigo, outros tres pedaços, & deitoulhe ao pescoço a metade de hum Copo pequeno de Prata, com que se forão muy contentes, por ser a Povoação longe. E os Nossos o ficarão muito mais, não se mudando daquella estança do Bregio, na qual o Piloto tomando o Sol achou ser a altura do Polo Sul de 27. Graos, 20. Minutos, fazendosse do Porto em que estava o Navio trinta Legoas.

〔6 月 21 日〕 夜が明けるや，わが同胞はその黒人つまりアンコセの部落へ向けて歩んだ。その部落に辿り着きさえすれば善良で忠実なガイドを得られるものと思いきや，現われたのは性悪で誠(まこと)のないガイドであった。その劣悪なガイドのひとりがなんとアンコセ自身なのであった。何かをせびり取るため，一行を困らせ疲れさせてやろうとして，アンコセはあたりをぐるりと一巡し，けさ出発したばかりの湿地へ一行を連れ戻してしまった。ヌーノ・ヴェーリョは苦りきり，憤懣やるかたないという表情を見せ，さっき君にやったものを返して欲しい，君の差し出すガイドはもう無用だ，と言った。おのれの空しいもくろみがすっかり破綻したにもかかわらず，なんとこのカフル人，銅のかけらふたつをさらに取り上げた。これはわが一行がうっかりと差し出してしまったものだ。結局アンコセは，みずからに連れ添いたがっている 3 人の黒人とともに，砂地の道を一行の先頭に立って進みだした。道沿いには野生のヤシの木が繁っていたが，その中にはナツメヤシの実をつけているのと，クァマにおいてマコマと呼ばれる果実をつけているのがある。マコマは大きさといい形状といい，まるで褐色のセイヨウナシと瓜ふたつだ。陽が落ちたので，木立の蔭で野営した。水はなかった。

xxj. [21 de Junho]

Caminharão os Nossos pera a Povoação do Negro, como foi menhã; donde esperando levar boas, e fieis Guias, as acharão más e falsas, foy hũa dellas o mesmo Ancosse, o qual querendoos molestar e cansar, pera lhe darem mais algũa cousa, com hum rodeo os fez tornar ao mesmo Bregio donde partirão. Mostrousse Nuno Velho queixoso, & agravado, e pediolhe o que lhe tinha dado, porque delle não queria Guias, e assi /fol.133/ desenganado o Cafre da sua vaã esperança, tomou mais dous pedaços do Cobre, que lhe derão, & com outros tres Negros seus, que o quiserão acompanhar, começou guiar o Campo, por hum Caminho de Area, pello qual havia Palmeiras bravas, hũas dellas com Tamaras, & outras com hũa fruitta, que em Cuama chamão Macomas, & saõ do tamanho, & feição de Peras pardas: & sendo ja Noute se alojou debaixo de hum Arvoredo sem Agoa.

〔6月22日〕 朝方，数軒の家の前にやってくると，アンコセはそれぞれの家のあるじを連れてきた。アンコセはわが一行を辿るべき道から逸らさせ，密林のただ中に迷い込ませた。密林で数頭のウシを隊列からはぐれさせ，これを持ち逃げしようとの魂胆と見受けられた。森を過ぎ，ある小川を過ぎたところでもうひとつ別の森に入った。いずれの場所にあっても，カピタン・モールがよく念を押したように，くれぐれも油断を絶やさぬことが肝要であった。問題の黒人つまりアンコセは通訳ひとりとともに先頭に立って進んだ。したがってアンコセ自身のもくろみはなかなか実行に移せなかった。密林はどこまでも鬱蒼としており，後からやってくる者に自分の姿は見えぬと考えたアンコセは，通訳に向かってアザガイアを投げつけた。狙いをはずしたアンコセは一散に逃げ去った。通訳は，あたりの小屋からやってきた黒人のうち近くにいた者をひとりひっ捕らえ，叫び声を上げた。この叫び声に呼応して，我らの仲間が加勢に駆けつけた。捕まっている男の仲間もわが一行に取り押さえられた。一行はこの連中とともに密林の外へ出，彼らのために逸らさせられた道へ戻った。一行がこの連中に，逃げてしまったあのアンコセだが，あれはいったい何者なのだ，と尋ねると，答えて次のように言う。バンベという名前の大泥棒だ。俺たちはあいつが恐ろしくて，仕方なく服従してその尻馬に乗っていたのだ，と。ヌーノ・ヴェーリョは彼らに対し，ウニャーカのところへ私を案内してくれないか，と頼んだ。彼らはそうしようと約束し，さらに言うには，もし旦那をウニャーカのもとへ連れてゆけなかったら，その節は俺たちを殺すなり何なりしてもらって構わない，と。しかしながら念には念を入れ，充分な警戒を保ちつつ，一行はジャングルの中へ分け入り，さらにある沼地を横断した。沼地の向こうには良好な道が続いており，わが同胞は，夜まで行進を続けた。やがて河に出たのでそこで野営した。河沿いには大木が茂り薪には困らなかった。

xxij. [22 de Junho]

Chegando pella menhã á hũas casas, levou o Ancosse os Donos dellas consigo, & desviou os Nossos do caminho, metendoos por hum Bosque, pera nelle desencaminhar algũas Vacas, & acolherse cõ ellas, o qual passado, & hũa Ribeira entrarão por outro, mas como nestes lugares se não descuidassem os Nossos, com as lembranças do Capitão Mór, hindo o Negro diante com hũa Lingoa, & não podendo fazer o que pretendia, sendo o Matto espesso, & assi não visto dos /fol.134/ que vinhão atras, lhe atirou cõ hũa Azagaya, & errandoa fogio. A Lingoa pegando de hum dos Negros das casas, que perto de si estava gritou, ao que acodirão os Nossos deitando tambem mão dos Cõpanheiros do que estava preso. Com elles se sairão fóra do Bosque ao caminho, de que os havião apartado, & perguntandolhes quem era o Ancosse fogido, disserãolhe ser hũ grande ladrão chamado Bambe, ao qual por temor obedecerão, & acõpanharão. E pedindolhes Nuno Velho, que o quisessem guiar té o Vnhaca prometterão de o fazer, & que se o não levassem lá, que os matasse. Postos cõ tudo a bõ recado forão caminhando por hũ Mato, & atravessando hũ Bregio da outra banda, havia boa estrada, que seguirão té Noute, que ao lõgo de hũ Ribeiro, se recolherão, naõ faltãdo Lenha de grãdes Arvores, que jũto delle avia.

〔6月23日〕 このあたりは低湿地であり，したがって多くの沼地が点在する。そうした沼地を踏破してしまった後，23日の朝，わが同胞は大いに苦労したあげく，もうひとつ別の沼地を横断した。ものすごく脚をとられることに加え，中心部は深く，槍を突き立てても水底に達する感じがなかった。束の間ではあったがこの難所を乗り越えることができたのは，切り出した木の幹で道をつけることによってである。それ以外の場所は，沼地に生えていたおびただしいエスパダーナ〔ショウブ，アヤメなど刀葉状の植物〕につかまることによって無事乗りきった。一行が沼地の向こう側に落ち着くと，疲労を癒し暑熱をやり過ごすための刻限となっていたので，木々の蔭に入って休息した。ここでヌーノ・ヴェーリョは黒人のひとりを解放するよう命じた。自分の小屋へ戻らせ仲間がどうしているか，その消息を伝えさせるためである。このカフル人は，赤いブレタンジル[29]の布切れ1枚と，銅のかけらをひとつもらうことによって，一時囚われたことの代償を充分に受けたと感じた様子であった。一行は日没まで前進を続けた。そのまま帰ろうとしないカフル人たちが連れ合いであった。連中は御褒美にあずかることを期待して，喜んで一行に付き添っているのだ。やがて別の湿地に到着し，そこに野営地を設けた。この地点から南西の方角に河口を望見した。その河は海図によればサンタ・ルシアの河と呼ばれるもので，ほぼ南緯28度に位置する。これは過日渉ったことのある河である。そのときの渡渉には大した苦労はなく，河口からはまだ隔たっていた。ナオ船サン・ベント号のカピタンであったフェルナンド・アルヴァレス・カブラルはサンタ・ルシアの河口で一命を落とした。カヌーで対岸へ渡ろうとしているさなかであった。彼の遺骸は河口沿いにある丘のたもとに葬られた。そこまでは彼を溺死に追いやった波も到達しないからである。

xxiij. [23 de Junho]

He esta terra alagadiça, & assi de muitos Bregios, & tendo ja passados, os que se hão ditto, na menhã dos xxiij, passarão outro trabalhosamente, porque alem de /fol.135/ atolar muito, era no meyo tão alto, que se não chegava ao fundo com hum Pique, atravessousse este espaço, que era breve, cõ trõcos, que se cortarão de Arvores, de que se fizerão Minhoteiras, & o mais se remediou cõ muita Espadana, que no Bregio havia. Postos da outra banda os Nossos, & sendo horas de descãsar do trabalho, & da calma o fizerão á sõbra de Arvores dõde mandou Nuno Velho soltar hum dos Negros, pera que se fosse á sua casa, & desse novas dos outros, & cõ hũa tira de Bretangil vermelho, & hũ pedaço de Cobre, se ouve o Cafre por satisfeito da prisaõ, & cõ os que ficavão (que tãbem hião cõtentes esperãdo grãde paga) caminharão té o Sol posto, que chegarão á outro Bregio, a onde se fez o Alojamento. Delle se via ao Sudueste a Foz de hum Rio, que he o que nas Cartas de Marear se chama de S. Lucia, em altura de vinte & oito Graos, quasi o qual se tinha ja passado o dia atras, por parte, que não deu molestia, & longe da Boca. Nella acabou Fernãodo Aluarez Cabral Capitão da Nao S. Bento /fol.136/ atravessandoa em hũa Almadia, & ao lõgo della, ao pee de hum Outeiro, onde não chegão as ondas, que o afogarão, está enterrado.

〔6月24日〕 翌朝，その日は洗礼者ヨハネの祝日であったが，ある高台から幾つかの集落が望まれた。集落に属する家々はわがブドウ園の小屋のようであり，今まで見てきたそれのように円くはなかった。集落の黒人はわが同胞を認めるや，ぞろぞろと集まりはじめ，やがてその数200くらいにふくらんだ。彼らのもとに通訳が出向き，来ているのがポルトガル人であると知るや，彼らはさっそくカピタン・モールに逢いにきた。そして君らのいるところはまちがいなくウニャーカの領地だ，と保証した。そしてさらにこう言い添えた。この集落はウニャーカの姉（妹）君の領地だ。問題の船〔モサンビークからのパンガイオ〕ならまだ出発してはいない，と。わが同胞は皆この大いなる朗

[29] 原綴り "Bretangil". ダルガードの定義によると，昔カイバイア（グジャラート王国）から東アフリカへ輸出されていた綿製品（色は青や黒や赤）。語源は不詳。Cf. Sebastião Rodolfo Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, vol. I, New Delhi/Madras, Asian Educational Services, 1988. First Published: 1919, p.120）。

報に狂喜した。彼らの家々のそばに辿り着くと，ひとりの婦人が夫を連れてヌーノ・ヴェーリョを訪ねてきた。これこそ，さっき黒人が言っていたウニャーカの姉(妹)君であった。ヌーノ・ヴェーリョは夫妻をしかるべき礼儀でもって出迎えた。御夫妻のもとに数日留まりたい気持ちはやまやまだが，そうもできぬのが残念だ，という気持ちを伝え，夫妻へ黒い布地 1 枚と，銅のかけらふたつを与えた。この部落からは海が望まれた。海を初めて見た者のようにわが一行は嘆声を上げた。一行が今いる海浜一帯はメーダンス・デ・オウロ〔「金の砂丘」〕と呼ばれる。暑熱の時間帯は過ぎたので，一行はウニャーカの手下をひとり連れて行進を再開した。この黒人はウニャーカの名代としてウニャーカの姉(妹)に会いにきていたのだ。他のガイドはこれに充分な報酬を与えたうえで解雇した。一行の辿った道は赤みがかった色の広大な砂浜であったが，この道を歩くことにより一行は短時間ですっかり疲労してしまった。この砂浜から砂丘のてっぺんに登ったが，そこからの下り坂で感じた疲労は今までよりも小さくて済んだ。日没の頃，ある河のほとりに位置する部落へ辿り着いた。ちょうど干潮時であったので，さっそくその河を渉った。夜を迎え，河の向こう岸で野営することにした。そこでちっぽけな布切れ数枚と引き換えに，一行は黒人からトウモロコシやニワトリ，それにボラを入手した。ボラは大きくておいしかった。

xxiiij. [24 de Junho]

O dia de S. Ioão Baptista (que foy o seguinte) pella menhã, se descobrirão de hum alto, Povoações[30] cujas casas, erão como as nossas Choupanas de Vinha, & não redondas como as passadas. Os Negros das quaes, como virão os Nossos, se ajuntarão algũs duzentos, foy ter cõ elles a Lingoa, de quem sabendo, que erão Portugueses vierão logo ver o Capitão Mór, & certificalo, que estava nas terras do Vnhaca, sendo aquella Povoação de hũa Irmaã sua, & que o Navio do resgatte não era partido. Alvoraçarãosse todos com tão boas novas, & chegando ás casas, veyo a Irmaã do Vnhaca (que os Negros dezião) com seu Marido, vesitar Nuno Velho, que os recebeo, com a devida cortesia, & mostrandosse pezaroso de se não poder deter algũs dias cõ elles, deulhes hum Pano preto, & dous pedaços de /fol.137/ Cobre. Descobriasse deste povoado o Mar, que como cousa nova espantou os nossos, & he na parajem onde chamão os Medãos do Ouro. E sendo ja as horas da calma passadas, tornarão caminhar com hum Negro do Vnhaca, que da sua parte viera ver a Irmaã (despedindo os outros bem pagos) por hũa grande Praya de Area ruiva, que em breve espaço os cansou muito, & della sobindo ao alto dos Medãos, por onde se podia andar cõ menos cãsasso, chegarão Sol posto, á hũa Povoação, que estava ao longo de hum Rio, o qual por ser Maré vazia passarão logo, & sendo ja Noute se alojarão da banda de Alem, onde comprarão por pequenos pedaços de Panos, Milho, Galinhas, & Tainhas grandes, & gostosas.

〔6 月 25 日〕 翌朝の満潮時，河の水位は上がり，波も高くなった。河口には小さな島のようなものが現われた。したがってこの河を渉れるのは干潮時だけである。この河こそ，ナオ船サン・トメ号のポルトガル人遭難者が「ダ・アブンダンシア」〔「豊饒の河」〕と呼んだものである。野営地を撤収して砂丘の裏手を前進した。周辺には爽やかで美しい土地が続く。やがて正午になり，ある河にぶつかったところで小休止した。そこでピロットが太陽の高度を測ったところ南緯 26 度 45 分と判明した。暑熱をやり過ごし，やがて森にぶつかったので，巨木の下に夜営地を設けた。当夜降った雨から身を守るのに巨木の林立は必要不可欠であった。

xxv. [25 de Junho]

Sendo o outro dia pella menhã preamar estava o Rio muy crecido, & grande, & na boca fazia hũ Ilheo, & assi não sendo baixa Mar, não se vadea. He este o Rio á que os perdidos Portugueses na Nao S. Thome poserão nome da Abundan/fol.138/cia. E levantandosse o Arrayal, foy marchando por detras de Medãos de Area, por muy

[30] 初版本に "Poovações" とあるのを正誤表によって訂する。

aprazivel, & fresca terra, tee o meyo dia, que ao lõgo de hũa Aldea parou, tomou nelle o Piloto o Sol, & achou de altura 26. Graos 45. Min, & passada a calma, & hum Bregio, se fez o Alojamento debaixo de Arvores grandes, que forão bem necessarias, pera defender a chuva, que ouve aquella Noute.

〔6 月 26 日〕 広々としてどこまでも延びる平原を次の日の 10 時まで前進した。そのとき美しく大きな湖に辿り着いた。その湖は淡水湖で長さは 1 レゴアばかりであったろう。湖の近くにはふたつの集落があり，そこでニワトリを数羽物々交換で入手した。正午にシエスタをむさぼった後，ピロットが現在地の太陽の高度を測った結果，南緯 26 度 20 分と判明した。そこから前述の湖に沿って歩き続けてゆくと，多くのアヒルやカモやガチョウが見られた。我らの一隊は（湖の向こうの）広々とした野原で大休止した。陽のあるうちに次の部落へは到達できそうもないと思われたからである。夜営地では通常の食糧としてウシ 3 頭を屠った。それでもなお 23 頭が残っていた。夜営地のそばをひとりの黒人が通りかかり，次のような報せをもたらした。いわく，モサンビークからやってきた船はまだロウレンソ・マルケスの河を発っていない，と。ヌーノ・ヴェーリョは部下 3 人をガイドともども派遣することに決め，前記の黒人ばかりか当地のカフル人が異口同音に言っていることが本当かどうか，確かめようとした。派遣されたのはアントニオ・ゴディーニョ，シマン・メンデス，アントニオ・モンテイロである。夜遅くなってから，ウニャーカからヌーノ・ヴェーリョを訪ねるために遣わされた黒人がガイドと一緒にやってきた。黒人はヌーノ・ヴェーリョのもとにやってきて深々とお辞儀をし，頭にかぶった縁なし帽を取り，こう言った。「貴殿の御手に接吻申し上げます」（*Beijo as mãos de Vossa Mercê*）と。さすがにポルトガル人のあいだで養育された者だけのことはある。彼はガレアン船サン・ジョアン号の遭難から生き延びてこの地に留まっていたのだ。

xxvj. [26 de Junho]

Por largos, & estendidos Campos se caminhou té as x. horas do dia seguinte, que chegarão os Nossos á hũa fermosa, & grande Alagoa de Agoa doce, que teria hũa legoa de cõprido, perto della estavão duas Povoações em que se resgattarão Galinhas, & sesteando ao meyo dia, tomou o Sol o Piloto, & achousse em 26. Gr. 20. Min. de altura. Dalli al lõgo da mesma Alagoa forão andando, vendo muitas Adens, Patos, & Garças, & em hum Campo (alem della) se assentou o Arrayal, por se não poder chegar de dia ao povoado. Onde se matarão 3. Vacas, /fol.139/ pera o provimento ordinario, & ainda ficavão 23. & porque passou pello Alojamento hum Negro, que deu novas, não ser partido do Rio o Navio, determinou Nuno Velho mandar tres homens com a Guia, pera se certificar do que todos estes Cafres dezião. Forão estes Antonio Godinho, Simão Mendez, & Antonio Mõteiro, & sendo ja muito Noute, veo hũ Negro cõ a Guia, enviado do Vnhaca a vesitar Nuno Velho, o qual chegado á elle fazendo hũa grande mesura, & tirãdo hũ Barrete que trazia na cabeça, disse «beijo as maõs a V. M.»[31] como Cafre criado entre Portugueses ficando naquella terra da perdição do Galeão S. João.[32]†

黒人の挨拶とそれに伴う言葉を見聞きして我らは心からの喜びを感じた。ヌーノ・ヴェーリョは彼に尋ねた。君は誰に属する者なのか，と。彼は答えて言った。私は当地の王様，つまりウニャーカの家来である。王様は自分の部落にポルトガル人を迎えることができいたくお喜びの様子だ。さらにこうも言い添えた。御使者から王様は貴殿の到着を聞き，できうればさっそくお訪ねしようと思ったが，もう夜分であるから遠慮した。しかしながら安心して過ごされよ。問題の船はまだロウレンソ・マルケスの河に停泊中であるから，と。

† Festejarão todos a cortesia, & as palavras della, & perguntandolhe Nuno Velho cujo era, disse que de elRei, o

[31] 初版本には aspas が用いられていないが，直接話法であることを明示するため，便宜的に aspas でくくる。

[32] 初版本には dois pontos が用いられているが，ここでは訳者の判断でパラグラフを終了させるためピリオドを用いる。

qual recebera tanto gosto, vendo os Portugueses na sua Povoação, & sabendo delles, que elle era chegado áquella terra, que logo o quisera vesitar, mas por ser Noute o deixara de fazer, que em tãto estivesse descansado, porque o Navio /fol.140/ ainda estava no Rio. †

ここまでの行進においてポルトガル人が得た情報の中でこれほど嬉しいものはなかった。船すなわちモサンビークからやってきたパンガイオはまだロウレンソ・マルケスの河に停泊中だというのだ。この船によって救助され一命をとりとめることができそうだという期待が生まれたのである。もう船は出てしまったというなら，我らの期待もいささか揺らいだであろう。船がもし出てしまっているなら，我らはロウレンソ・マルケスの湾を横断し，ソファーラまで徒歩で前進せねばならぬ。さもなくば，別の船がやってくるまで1年も待機する必要がある。いずれを選択するにせよ小さからぬ困難が伴うはずであった。ソファーラへの道のりはたいそう遠く，控えめに見ても2ヵ月の行程だ。ましてすぐる3ヵ月間行進に明け暮れてきたのであるから，全員の衰弱ぶりを考慮すればソファーラへの旅は難渋を極めること明白である。他方，当地で待機するという決断を下したとしても，危険はかえって高まる惧れがある。次の船がやってくるのに少なくとも1年は待たねばならず，その1年が果てる頃に全員が命を保っていられる保証はまったくない。なにしろ当地は名にしおう不健康地であり，水は悪く，食糧にも乏しい。したがって我らの一団があの夜，モサンビークからの船がまだ出港していないという確報に大喜びしたのはもっともなわけあってのことであった。

† Foy esta a mais alegre nova, que tiverão os Nossos Portugueses em toda a jornada, porque estãdo o Navio no Rio, tinhão todos esperança de vida, & salvação, & sendo partido, era duvidoso, por haverem de atravessar a Baya, & caminhar té Çofala, ou esperar hum Anno, que viesse outro Navio. Havia em qualquer destes caminhos grandes difficuldades, porque o de Çofala era largo, & de dous Meses pello menos, que sobre tres, que tinhão caminhado, era grande soma pera a fraqueza, que todos trazião se se determinavão esperar, era mayor o perigo, porque havia de ser ao menos hum Anno, ao cabo do qual se não chegaria cõ vida, sendo a terra muy enferma, as Agoas roins, & os Mantimentos poucos. Pello que, cõ justa causa se alegrarão muito aquella Noute, com a certeza de não ser partido o Navio.

〔6月27日〕 朝が来るや，ヌーノ・ヴェーリョによってウニャーカ王のもとへ派遣されていた男のひとりが戻ってきた。男は問題の船〔パンガイオ〕について充分な報告を持ち帰った。その報告はポルトガル風の挨拶をしてみせたあの使者が語った内容と細部にわたり一致していた。というわけで，雨が降ってはいたけれども，喜び勇んで野営地を撤収し，行進してウニャーカの部落へ達した。部落からは少なからぬ黒人が我らに会いにやってきたが，その際，黒人は我らのことを「マタローテス，マタローテス」[33]と呼ばわった。カピタン・モールは王〔ウニャーカ〕に伝言を送りみずからの来着を知らせた。王の側からカピタン・モールへ返事が寄せられたが，それは次のような内容であった。私の家のかたわらに木が1本ある。そのたもとで待っていて欲しい。私は今起きぬけで衣裳を整えている最中であるから，と。ヌーノ・ヴェーリョはその言葉に従った。供廻りとしてアルカブース銃の射手8人，プロヴェドール，テゾウレイロ，ピロット，それに通訳を同伴した。ヌーノ・ヴェーリョは約束の木の下に腰を下ろした。そこには王の命令によって莚が延べてあった。

xxvij. [27 de Junho]

Tornou como foy menhã hum dos homens que Nuno Velho tinha mandado ao Rey Vnhaca cõ larga relação do Na/fol.141/vio, que em tudo era cõforme cõ o que o enviado dissera. E assi posto que chovendo, se levantou o Arrayal alvoroçado, & caminhou té a Povoação do Vnhaca, da qual vinhão muitos Negros encõtrar os Nossos chamandolhes Matalotes, Matalotes. Mandou o Capitão Mór recado ao Rey, da sua chegada, & da sua parte lhe foy

[33] 原綴り "Matalotes, Matalotes." 「同志よ，同志」の意。このようにポルトガル語で呼んだと解釈できる。

respõdido, que o fosse esperar ao pé de hũa Arvore, que estava jũto da sua casa, em quãto elle se levantava, & vestia. Assi o fez Nuno Velho levando cõsigo 8. Arcabuzeiros, o Provedor, o Tesoureiro, o Piloto, & a Lingoa, & assentado debaixo da Arvore em Esteiras, que o Rey tinha mandado estender. †

ウニャーカは頭には何も載せず，インディアにおいて婦人が身につけているような布地を 1 枚巻きつけ，その上から大きな外套を羽織っている。背丈は高く，体躯は巨大であり，しかも均整がとれ，陽気で，感じのよい相貌の持ち主であった。ヌーノ・ヴェーリョに近づいてきて，そのときヌーノ・ヴェーリョは早くも立ち上がっていたが，ウニャーカはヌーノ・ヴェーリョの手を取り，ふたりして莚の上に腰を下ろした。王はヌーノ・ヴェーリョに対し，御到着を心からお祝いする。またこのたびの難船のこと，まことにお気の毒であった，と述べた。これに対してヌーノ・ヴェーリョは言葉を尽くして感謝の気持ちを伝えた。ヌーノ・ヴェーリョは，この王が，ドン・パウロ・デ・リマと，ナオ船サン・トメ号に乗り組んでいた彼の随員へ施してくれた厚意に対しても謝辞を述べた。彼らもこのあたりを航行中に遭難し，この王の保護を受けたのである。ヌーノ・ヴェーリョはまた王に対して，問題の船のカピタンへ書状を届けたいと思うが，そのための使者をひとり貸してくれないだろうか，と頼んだ。王はこれに応えて，わが父がポルトガル人に懐いた友情に私もまた束縛されているのだ，という態度を示した。さっそく王は手下の黒人をひとり呼び，書状を届けさせることにした。彼にはアントニオ・ゴディーニョと他の兵士ふたり，それに通訳ひとりが同行した。これに続いてカピタン・モールからの贈り物が渡された。すなわち，黒いフェルト製のソンブレイロ[34]，絹糸と金糸で刺繍の施されたシナの布地，ウシ 2 頭（うち 1 頭は妊娠していた），それに銀製の鎖がふたつ。その鎖はメストレの笛から取りはずしたものである。さらにメダイ 1 個と，銀製の小さな瓶がひとつ。そうこうしているあいだ，我らの仲間が退屈している様子であるのを察して，王は（もらった品々について満悦至極の表情を見せつつ）手下に対しこう申しつけた。集落のそばに空き地があろう。そこでこちらの方々をおもてなしせよ。あそこなら水も薪もあるから，と。案内された空き地でカピタンのジュリアン・デ・ファリーアの指図のもとさっそく野営地が設営された。カピタンは全船員を従えて去ってしまったが，ヌーノ・ヴェーリョと，彼に随行していた士官と兵士は皆，ウニャーカとの談笑にそのまま興じた。

† Veyo o Vnhaca sem nada na cabeça, cengido hũ Pano ao modo que o trazem na India as Molheres, & cõ hũ grãde Ferraguelo cuberto. Era de alta estatura agigantado, bem feito, & de rosto alegre & aprazivel, & chegado a Nuno Velho, que ja estava em pé, o tomou pella maõ, & jũtos se assentarão na Esteira. Deulhe as emboras da chegada, & os pesames da /fol.142/ perdição, o que Nuno Velho agradeceo cõ muitas palavras, & assi o que fizera a D. Paulo de Lima, & aos da sua Cõpanhia da Nao S. Thome, quando por aly passarão, & pediolhe hũ homem, pera mandar hũa carta ao Capitão do Navio. A tudo se mostrou o Rey obrigado pella amizade, que seu Pay tivera cõ os Portugueses, & logo chamou hũ Negro seu, que cõ Antonio Godinho, & outros dous Soldados, & hũa Lingoa levarão a carta. Seguiosse apos isto o presente do Capitão Mór, que foy hũ sõbreiro de Feltro negro, hũ Pano da China lavrada de Seda, & Ouro, 2. Vacas, hũa dellas prenhe, & em 2. Cadeas de Prata, que se tirarão do alpito do Mestre, hũa Medalha, & hũa pequena Garrafa de Prata. E porque os Nossos estavão desacomodados, mandou o Rey (que cõ as peças se mostrou cõtentissimo) a hũ Negro seu, que os fosse agasalhar, em hũ sitio perto das casas, em que havia Agoa, & Lenha. Nelle se ordenou logo o Alojamento pello Capitaõ Iuliaõ de Faria, que se foy cõ toda

[34] 原綴り "sõbreiro". 16 世紀末から 17 世紀初めにかけ日本で盛んに製作された南蛮人渡来図屏風に現われるポルトガル人の最高指導者カピタン・モールは威厳を高めるため，アジア人やアフリカ人の従者に必ず豪華な日傘を差し掛けさせている。これが本来のソンブレイロであるが，テキストでは常につばの広い帽子の意味で用いられる（Cf. *The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.180, note 1; S. R. Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, vol. II, pp.314-316）。

a Gente, & ficou Nuno Velho, & os offi/fol.143/ciaes, & os Soldados, que o acõpanhavão, praticando cõ Vnhaca. †

そろそろ食事の時間ではあるまいかと思われ，時計〔日時計〕が11時を告げている，とピロットが言うと，そのことにウニャーカは少なからぬ驚きを示した。さらにわが同胞が羅針儀を頼りにここまでの道のりを克服してきたことを示すに及んで，王の驚きはいよいよ大きくなった。そうこうしているうちに時間が来たので皆立ちあがり，手に手をとって野営地へ向かった。野営地では王がまずドナ・イザベルとその娘を訪ね，その後，ヌーノ・ヴェーリョとひとつテントの中で食事をともにした。2時になったところで王〔ウニャーカ〕は上機嫌で我ら一同に別れを告げた。翌日あらためて貴殿らを見送りたいと言い添えた。

† E parecendo horas de jantar disse o Piloto, que assinalava o Relogio as xj. de que o Rey se maravilhou asas, & muito mais de lhe mostrar pellos Rumos do Agulhão o caminho, que té ly fizeraõ. E assi sendo tempo se levãtarão & dadas as maõs se foraõ ao Alojamento onde depois que o Rey vesitou D. Isabel, & sua filha, jãtou cõ Nuno Velho na sua tenda, & sendo 2. horas, se licenciou a[35] todos cõ boa graça, pera se despedir ao outro dia.

〔6月28日〕 王は朝になるや約束どおりやってきた。彼は朱色のビロードで飾りをつけた緋色の緩やかなローブを身に纏い，頭には我らからもらったソンブレイロをかぶり，首にはメストレの笛から取りはずした鎖をぶら下げていた。そしてその腕には真鍮製の腕輪をいっぱいはめていた。お決まりの礼法が彼とヌーノ・ヴェーリョとのあいだで交わされた後，ヌーノ・ヴェーリョは彼に笛を差し出し，ついさきほどまでその笛につけてあった鎖へ結びつけた。メストレがこの笛を吹いてみせると王はその音色に御満悦で，これはいくさのときに役立つ一品であろうな，と考えた。王の息子のひとりへ銀製のコップを与えたが，これは父が取り上げてしまった。

xxviij. [28 de Junho]

Assi o fez como foy menhaã vestido hum Roupaõ de Graã goarnecido de veludo encarnado, o sõbreiro, que lhe deraõ na cabeça, as Cadeas do Apito ao pescoço, & os braços cheyos de Manilhas de Lataõ, fizeraõsse as devidas cortesias, entre elle & Nuno Velho, o qual lhe deu o Apito, & o pos nas Cadeas, dõde se tirara, & tocãdoo o Mestre, ficou o Rey delle cõtente, parecendolhe boa peça pera á guerra, & a hũ filho seu deu hũ Copo de Prata, que o Pay lhe tomou. †

総員すでに行進のための準備を整えたので，一同はウニャーカに別れを告げた。ウニャーカもわが同胞に別れを告げた。これに際しては愛情のこもった抱擁が繰り返された。そうして我らは道中に出，樹木の下を淡水の湖沼群に沿って歩きつづけ，やがて10時になったところで暑熱をやり過ごすため小休止した。そこへ地元の黒人が10人やってきた。彼らには問題の船〔モサンビークからのパンガイオ〕の水夫ふたりと，モサンビーク生まれの者ひとりが付き添っていた。モサンビーク生まれの者をかの地ではトパース[36]とよぶ。この男がヌーノ・ヴェーリョに語るには，河を上流へ遡って象牙の取引をしていたとき，私はカフル人からウニャーカのもとにポルトガル人が来ている，という情報を得た。それによってとるものもとりあえず，仲間と一緒にあなた方に会いに駆けつけたのだ，と。ヌーノ・ヴェーリョはこの好意に報いたいと考えた。トパースに対しては銀製の瓶を1個，ふたりの水夫に対しては別の瓶1個を与え

[35] 初版本では "se licenciou" に続くと思われる前置詞に文字ツブレがある。小文字の "d" に横棒が引かれた変体の文字が見える。海賊版は "a" と校訂しており，これで正しいであろう。

[36] 原綴り "Topás". ダルガードによるとテキストでは "mestiço" の同義語として用いられている。より具体的にはポルトガル人が現地女性と交わって生まれた混血児の末裔であることを自認し，ポルトガル語を話し，ポルトガル風の衣裳を纏い，カトリックを信仰し，通常は兵士として勤務する人々を指す語彙である。Cf. S. R. Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, vol. II, pp.381-382.

た。行進を継続すべき時間となったので，午後遅くまでそれを実行した。やがて水のある地点で夜営した。

† Estãdo ja todos em ordem /p.144/ de marchar, se despedirão do Vnhaca, & elle delles, cõ afectuosos abraços, & postos no caminho, por baixo de Arvoredo, & ao lõgo de Lagoas de Agoa doce, foraõ andando té as dez, que pararaõ a passar a calma. Aly vieraõ dez Negros da terra, cõ dous Marinheiros do Navio, & hum natural de Moçãbique (que la chamaõ Topás) o qual disse a Nuno Velho, que estando resgatando Marfim, pello Rio acima, soubera dos Cafres, que estavão Portugueses cõ o Vnhaca, pello que deixado tudo os vinha ver, cõ aquelles seus cõpanheiros. Pagoulhes esta boa võtade Nuno Velho dãdo ao Topas hũa Garrafa de Prata, & aos dous Marinheiros outra, & sendo horas de cõtinuar o caminho, o fizerão té a tarde, que onde ouve Agoa se alojaraõ.

〔6月29日〕 翌日の9時になって(その日は聖ペテロの祝日であった)，わが同胞はウニャーカの息子が所有する部落に到達した。彼はヌーノ・ヴェーリョから受け取った伝言によって，ただちにこれを訪ねてきた。そしてヌーノ・ヴェーリョからの求めに応じて配下の男をひとり差し出した。ヌーノ・ヴェーリョとしては，この男に書状をもう1通持たせ問題の船のカピタンへ届けてもらう心づもりであった。使者はトパースと一緒にやってきたふたりの水夫のひとりを連れ，大はりきりで出発した。このお返しにヌーノ・ヴェーリョはウニャーカの倅へ銀製のコップ立てと，シナ製の布地1枚(これは彼の父に進呈したのと同じものだ)を差し出した。そのお返しとして彼からもヌーノ・ヴェーリョに贈り物が渡された。ヤギ1頭と駕籠いっぱいに入れたウメの実がそれであった。

xxix. [29 de Junho]

Sendo 9. horas do dia seguinte, que foy o de S. Pedro, chegaraõ á hũa Povoaçaõ de hũ filho do Vnhaca, o qual cõ recado que teve de Nuno Velho o veyo logo vesitar, & lhe deu hũ homam seu, que lhe pedio, para o mandar cõ outra carta ao Ca/p.145/pitão do Navio, que cõ hũ dos dous Marinheiros partio cõ toda a diligencia[37]. Em recõpensa lhe apresentou Nuno Velho hũ pé de Copo de Prata, & hũ Pano da China como o que se deu á seu Pay, & elle em retorno lhe fez hũ presente de hũa Cabra & de hũ cesto de Ameixoeira. †

さてこのカフル人つまりウニャーカの倅であるが，これがまた父親と瓜ふたつであった。父からは離れて，そして父の勘気を蒙ってここで生活を営んでいるのだ。かつて父の暗殺をたくらみ，その国を乗っ取ろうという野心をなお棄てずにいるからだという[38]。ポルトガル人と交渉があるせいで，我らの言葉を多少話す。カピタン・モールは

---

[37] 初版本には "diligencia" の後にピリオドが見えないが，続く一文が大文字で始まることに鑑みピリオドを加える。

[38] 社会の存続が，人間神もしくは神の化身である人間の生命に直結していると信じられた社会では，それを統治する者に少しでも肉体的衰えの兆候が見えれば，その死によって社会そのものが全面的破滅に至るのを防ぐため，彼は壮健なうちに進んで命を絶つか，さもなくば殺されて新たな生命力に溢れた者へ権力を委譲する——。このような習俗がアフリカを初めとする世界各地に存在したことについて，ジェイムズ・ジョージ・フレーザーは名著『金枝篇』で詳細な考察を試みている(参照『初版金枝篇 上』第3章第1節，吉川信訳，ちくま学芸文庫，2003年)。テキストに現われる「ウニャーカの倅」が上掲の習俗を拠りどころに父の暗殺を企てたのかどうか不明であるが，前掲『エティオピア・オリエンタール』の第1部第1巻第7章には，次のような興味深い記事があるので訳出してみる。

「当地〔ソファーラ〕の王は昔，次のようなことが生じた場合，毒を呑み，みずからの命を絶ってしまうことを習わしとしていた。まず彼の身に何か禍々しいことが生じたとき，それから彼自身の身体に生来の欠陥が認められたとき，たとえばインポテンツであるとか，何らかの伝染病に罹っているとか，あるいは前歯をまるまるなくして外見がひどく醜い場合であるとか，その他何らかの奇形なり肉体的異常なりが認められた場合である。昔の王は，こうした欠陥があればそれを理由にみずからの命を絶つ習慣を持っていた。その言い分はこうである。王たるもの，いかなる身体的欠陥もあってもならぬ，もしそれがあれば，ただちに命を

彼に別れを告げた。そしてシエスタの時間が終わってから行進を再開し，やがて到達したある湿地のそばで一夜を明かした。

† Era este Cafre muy parecido á seu Pay, & vivia aqui delle apartado, & em sua desgraça, por lhe aver procurado a morte, & occupar o Reyno. E cõ a cõmunicação dos Portugueses, falava algũas palavras das nossas. Despediosse delle o Capitão Mór, & caminhando depois das horas de Sesta, junto de hum Bregio se estanciou.

〔6月30日〕 このウニャーカの領地では海が大きな湾を形成し，奥行きにして15レゴアか20レゴア彎入している。ところによっては奥行きと変わらぬほどの幅がある。湾には大きな河が4つ注いでいる。いずれの河へも潮が10レゴアか12レゴア溯る。南から数えて第1の河はメレンガーナあるいはゼンベ[39]と呼ばれるもので，同名の王の領地とウニャーカの領地はこの河をもって分かたれる。第2の河はアンサーテであり，我らからはスピリト・サント〔聖霊〕もしくはロウレンソ・マルケスの河[40]と呼ばれる。この河で象牙の取引を初めて立ち上げたのがロウレンソ・マルケスという人物であり，この湾の名称も彼に由来する。第3の河はフーモといい，命名の由来はこの河がフーモという名の首領の土地を流れていることにある[41]。そして第4にして最後の河はマニーサである[42]。この河は湾の最も北側にある。この河沿いでかのマノエル・デ・ソウザ・デ・セプールヴェダの悲劇が生じた。すなわち，その妻ドナ・リアノール〔ドナ・レオノール〕や令息が不憫な死に追いやられ，ついにセプールヴェダその人も消息を絶ったというあの悲劇である[43]。さらにドン・パウロ・デ・リマ終焉の地もまたこの河から遠くない。その肉体は滅んでも

絶ち，あの世へ直行してみずからに欠けているものを恢復する(あの世ではすべてが完全に満たされているから)。これこそ名誉ある振舞いである——。しかし私が当地にいたとき君臨していたキテーヴェ〔東南アフリカ先住民における部族の首長を表わす普通名詞〕は，この点について，賢明なことに，みずからの前任者たちを真似ようとはしなかった。恐ろしいことに，彼から前歯が1本抜け落ちたとき，彼はただちに全土にお触れを出し，新しい王には，歯が1本欠けていること，これを誰しも知らぬままでいることのないよう，徹底した周知方を命じた。さらにお触れには次のようにあった。わが前任者たちにあっては，みずからの身に同じようなことが起きれば，ただちに進んでみずからの命を絶つ習わしであった。が，これは愚か者の所業にほかならない。私は断じてその轍を踏まぬ。それよりもむしろ，私は自然な死を迎える。自然な死が訪れたときこそ，皆，挙げて私の死を悼んでもらいたい。私には生き続ける必要がある。それはわが国を維持するためであり，わが国を敵から守るためである。今後，わが後継者にも，私はこのやり方をとり続けるよう勧める所存である，と」(Fr. João dos Santos, *Etiópia Oriental*, pp.93-94)

[39] テンベ河 The Tembe またはマプート河 The Maputo のいずれかであろう(*The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.182, note 1)。

[40] マプート河であろうが，テンベ河である可能性もある(*ibid.*, note 2)。

[41] この河の同定は困難である(*ibid.*, note 3)。

[42] インコマーティ河 The Incomati; Nkomati; Komati である(*ibid.*, note 4)。

[43] ポルトガル文学史に名高いガレアン船サン・ジョアン号の難船記 *Relação da mui notável perda do galeão grande S. João em que se contam os grandes trabalhos e lastimosas cousas que aconteceram ao Capitão Manuel de Sousa Sepúlveda e o lamentável fim que ele e sua mulher e filhos, e toda a mais gente, houveram na Terra do Natal, onde se perderam a 24 de Junho de 1552*(『大ガレアン船サン・ジョアン号のいとも名高き難破についての報告。ここでは，カピタンのマノエル・デ・ソウザ・セプールヴェダの身に降りかかった大いなる苦難と不憫な出来事のかずかず。そして彼とその妻子たち，その他すべての人々がテーラ・ド・ナタール——彼らはこの地で1552年6月24日に難破した——で迎えた悲しむべき結末が語られる』)は，16世紀のうちに単独の書物として刊行され，後，ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』に収められた。Cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, vol. I, ed. António Sérgio, Lisboa, Editorial Sul, [1956], pp.9-40.『海難悲話』所収テキストにもとづく全文試訳は公にされている(日埜博司/小磯京子「ポルトガル大航海時代の裏面史『海難悲話』について(その2)——『大

ドン・パウロ・デ・リマの輝かしい偉業の記憶は不朽である。

xxx. [30 de Junho]

Faz o Mar nestas terras do Vnhaca hũa grande Baya de xv. ou xx. legoas de cõprido, & á partes pouco menos de largo, & nella esboccão quatro grãdes Rios, pellos quaes entra a Maré x. & xij. legoas. O primeiro da parte do Sul, se chama Melengane, ou Zembe, que divide as terras de hũ Rey assi chamado, das do Vnhaca, o segũdo Ansate, & dos Nossos de S. Spirito, ou de Lourenço Marquez, que primeiro des/fol.146/cobrio nelle o resgatte do Marfim, de quem tomou a Baya o nome, o terceiro Fumo, por passar pellas terras de hũ Senhor deste nome, & o 4. & vltimo do Manhiça, que he da parte do Norte, ao lõgo do qual foy o desbarate de Manoel de Sousa de Sepulveda, & as lastimosas mortes de D. Lianor sua Molher, & Filhos, & seu desaparecimento, & nelle acabou tãbem D. Paulo de Lima, mas não a memoria de suas gloriosas empresas. †

この湾の出入り口あたり(この湾はところにより14～15尋の水深がある)，その南側の突端のそばに周囲3レゴアの大きな島がある。この島によって湾の入口はふたつの水路に分かれる。ひとつは北東側の水路でその幅は7～8レゴア，もうひとつは南側の水路でその幅はかなり狭く，陸までの距離はきわめて僅かだ。我らはこの島をウニャーカの島と命名した。王たるウニャーカはこの島の豊かな牧草を利用しておびただしい家畜を飼養する。この島のある突端が潮の具合によって小島に変わる。潮が引いていれば歩いて渡れるが，海水は膝のあたりに達する。この島は南緯25度40分にあり，昨今，ポルトガル人の島と呼ばれることもある。ナオ船サン・トメ号の遭難時には命拾いしながら，その後亡くなった多くのポルトガル人がこの島に埋葬されているからだ。

† Fica na boca desta Baya (a qual a lugares tem 14. & 15. braças de fũdo) jũto da sua põta Austral, hũa Ilha grãde de 3. legoas de circuito, a qual faz nella duas entradas, hũa pella parte do Nordeste, de 7. ou 8. legoas de largo, & outra do Sul, estreitta, & de pouca distancia. Chamão os Nossos á esta Ilha do Vnhaca, & nella traz o Rey muito Gado pella abũdancia do seu pasto. De hũa põta desta Ilha, faz o Mar hũa Ilheta, á qual se passa de baixaMar cõ a Agoa pello Giolho, tem de altura 25. G. 40 M. & chamãlhe oje dos Portugueses, pellos muitos, que nella estão enterrados, dos que se salvarão /fol.147/ da Nao S. Thome. †

この島には2年に1度モサンビークから1艘の船が象牙の商いにやってきて錨を下ろす。我らポルトガル人の一団がウニャーカの領地に到達したまさにそのとき，上述の船がこの島に停泊中であった。黒人たちの話によると，モンサン〔モンスーン〕がもう吹いており，モサンビークへ向け帰港の時期が迫っているという。ヌーノ・ヴェーリョは，行動をともにしてきたポルトガル人を連れてこの船にどうしても乗りたかった。そこでヌーノ・ヴェーリョは上述の手づるを用いて船のカピタンであるマノエル・マリェイロへ書状を送った。どうか我らを待っていて欲しい。我らをウニャーカの島へ渡すための小舟を数艘，浜へ届けて欲しい。それが書状の内容であった。マノエル・マリェイロからの返書はなかなか届かなかったが，6月末日やっと届いた。前日に野営した湿地を発つと，わが同胞は浜のそばでひとりのカフル人に出くわした。彼は問題の船の水夫であり2通の書状を携行していた。1通は同船のカピタン〔マノエル・マリェイロ〕からヌーノ・ヴェーリョへ宛てたもの，他の1通は同船のピロットからロドリーゴ・ミゲイスへ宛てたもの。2通が伝える内容は次のようであった。尊書を運んだ使者衆は今，我らと一緒にこちらにいます。翌日，皆様を本島へ運ぶためボートを送ることにいたしましょう，と。

† Vem aportar á ella de dous em dous Annos hũ Navio de Moçãbique á resgattar Marfim, & nella estava quando

---

ガレアン船サン・ジョアン号の難船とマノエル・デ・ソウザ・セプールヴェダの非業の死についての報告』訳注」『流通経済大学論集』通巻121号，1998年，39～70頁)。

estes nossos Portugueses chegarão ás terras do Vnhaca. E porque segũdo a relação dos Negros, era ja Mõção, & tempo da partida, & nelle pretendia embarcarse Nuno Velho cõ os mais Portugueses, que cõ elle vinhão, escreveo por todas as vias dittas á Manoel Malheiro Capitão do Navio, que os esperasse, & mãdasse embarcações á Praya, que os passassem à Ilha. De que não teve reposta, senão o derradeiro de Iunho, que partidos os Nossos do Bregio, em que o dia d'ãtes se alojarão, & perto ja da Praya, encõtrarão hũ Cafre marinheiro do Navio cõ 2. cartas, hũa do Capitão para[44] Nuno Velho, & outra do Piloto para[45] Rodrigo Migueis. Nellas os avisavão como ficavão em sua cõpañia os homens que lhes derã as suas & que o dia seguinte verião as embarcações á passar a Gente á Ilha. †

ほとんど夜のとばりが下りて問題の船のカピタン〔マノエル・マリェイロ〕がボートでやってきた。彼はヌーノ・ヴェーリョの温かい出迎えを受けた。潮が引きつつあったため，島へはただちに戻るのがよさそうに思われた。ヌーノ・ヴェーリョはこのときドナ・イザベルとその娘，プロヴェドールのディオゴ・ヌーネス・グラマーショ，それにふたりの修道僧，すなわちペドロ修道士とパンタレアン修道士を伴うことにした。そしてそのように実行された。居残りの仲間たちは土地の食糧を供給してもらって癒しを受けた。食糧はトウモロコシやアメイショエイラ〔ソルガムであろう〕，ニワトリ，魚，そしてマリスコ〔カニ・エビなど甲殻類の総称〕であった。

† E sendo quasi Noute chegou em hũa embarcação o Capitão do Navio, que foy bem recebido de Nuno Velho, & porque vazava a Maré, pareceo bem, que se tor/fol.148/nasse logo, levando consigo D. Isabel, & sua filha, o Provedor Diogo Nunez Gramaxo & os dous Frades Fr. Pedro, & Fr. Pantalião. Assi se fez ficando os Companheiros bem agasalhados, & providos dos Mantimentos da terra, que erão Milho, Ameixoeira, Galinhas, Peixe, & Marisco.

〔7 月 1 日〕 朝を待ちかねたかのように，ゆうべのボートが別のボートを伴って戻ってきた。残った仲間全員をウニャーカの島へ運ぶためである。仲間たちは浜に出，ボートを待ち続けた。ところが潮の具合が3時まで好転せず，家畜〔ウシ〕を渡すことに多くの時間が費やされもしたので，最初の島[46]を越えて進むことは無理であった。その晩の野営はそこで行なわれた。

Iulho. j. [1 de Julho]

Tornou a mesma embarcação cõ outra, como foy menhã pera passar todo o Arrayal á Ilha, o qual estava ja ao longo da Praya esperandoas. Mas como a Maré, não fosse senão ás 3. horas, & na passajem do Gado se gastasse muito tempo, não se passou da primeira Ilha, & nella se alojou aquella Noute. †

〔7 月 2 日〕 朝方，引き潮を捉えて，わが同胞は別の島〔ウニャーカの島〕へ渡った。そこにはモサンビークからの船の人々が掘立て小屋を造り寝泊まりしていた。それは我ら一行を収容しもてなすためのものであった。117人のポルトガル人と65人の奴隷とがその小屋に迎えられ手厚く保護された。これだけの人々が難船にも放浪にもめげず生き延びて当地へ辿り着いたのだ。我らの旅は継続すること3ヵ月，その間に踏破した距離は300レゴア以上であった。もっともペネード・ダス・フォンテスを起点として，ついに到達したこの島までの直線距離は150レゴアにも満たない[47]。

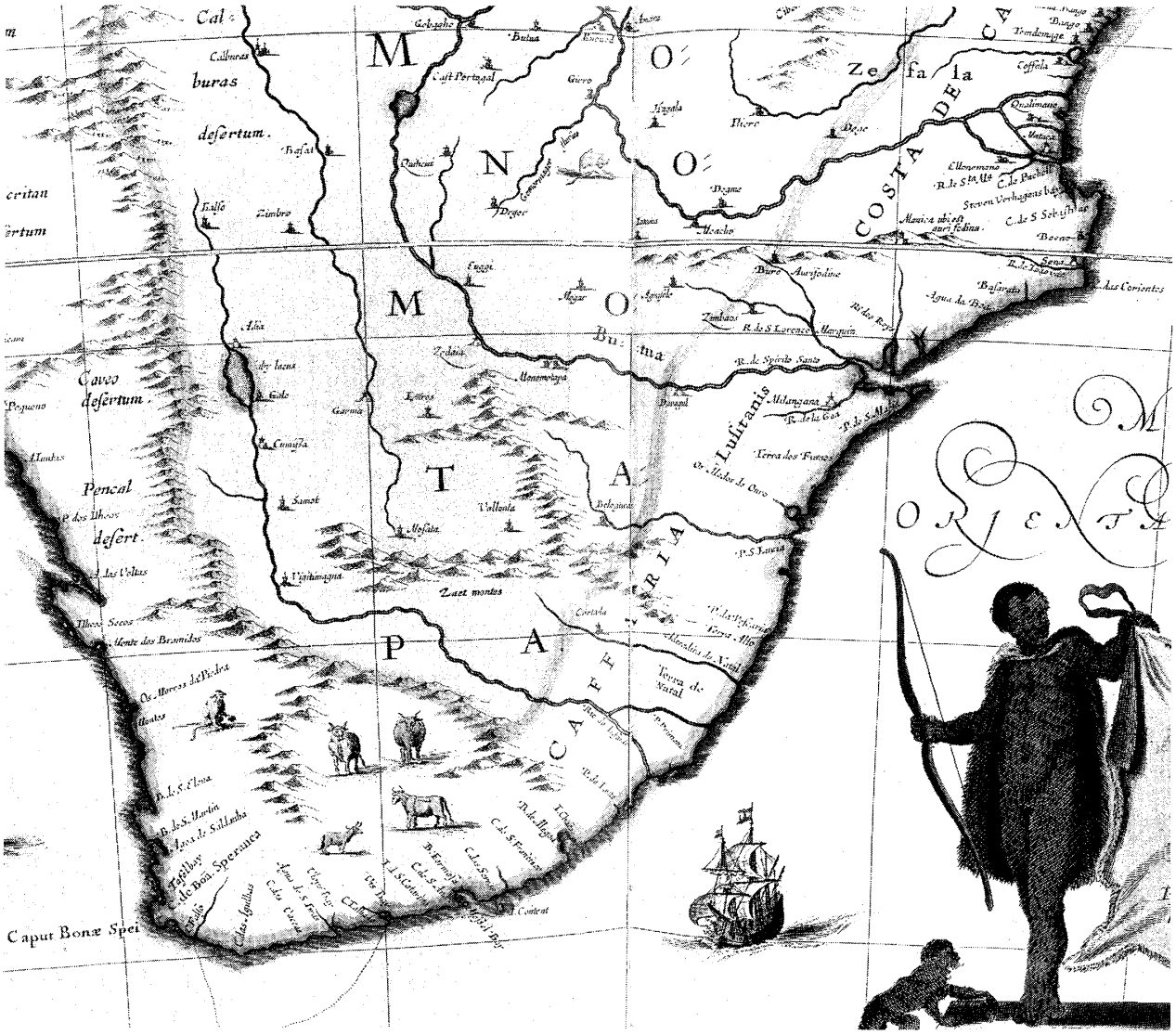
---

[44] 初版本には "pa" とあり "p" 字に文字ツブレがある。"para" もしくは "pera" に相違ない。

[45] 初版本には "pa" とあり "p" 字に文字ツブレがある。"para" もしくは "pera" に相違ない。

[46] 原語は "primeira Ilha" であるが，この島が具体的にどの島を指すのか不明。

[47] 放浪のさなか力尽きて道中に置き捨てにされた者は——ポルトガル人も奴隷も——決して少なくはなかったが，婦人を



ペネード・ダス・フォンテスからウニャーカの島へ

ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラー行は，1593 年 3 月 24 日から 25 日にかけペネード・ダス・フォンテス（地図では "P. do Ionte"）の附近で難船。上陸後，4 月 1 日を期して東北方向へ行進を開始する。6 月 24 日のくだりに見える「メーダンス・デ・オウロ（金の砂丘）」は地図上では "Os Medos do Ouro" と記される。そこからさらに東北方向へ進むと，ロウレンソ・マルケスの河（"R. de Lorenco Marquiz"）やエスピリト・サントの河（"R. de Spirito Santo"）など幾つかの河の注ぐ湾が見える。その湾の入り口附近に描かれる島が 6 月 30 日のくだりに見える「ウニャーカの島」（別名「ポルトガル人の島」）であろう（地図上に呼称の記載はない）。Joan Blaeu, *Atlas Maior 1665: «El Mejor Atlas y el Más Grande Jamás Publicado» «La Raccolta di Carte Più Vasta e Più Elegante Mai Pubblicata» «O Maior e Melhor Atlas Alguma Vez Publicado»*, Köln *et al*, Taschen, s/d. より

含むこれだけの大集団がペネード・ダス・フォンテスから陸路および海路を経て根拠地のモサンビークまで辿り着けたこと自体驚くべき"快挙"であった，と言わねばならない。ある初期南アフリカ史の専門家はヌーノ・ヴェーリョ一行の成功の要因を 4 点挙げる。すなわち，①旅するには最も天候の好い時期に踏破が行なわれたこと。②遭難者が概して壮健な肉体の持ち主であったことに加え，回収し得た銃砲が抑止力を発揮し先住民は誰ひとり彼らへ本格的な攻撃を仕掛けてこなかったこと。③食糧を獲得する物々交換の元手に不足が出なかったこと。④バントゥー語で意思疎通を図りうる奴隷を有していたこと（George McCall Theal, *The Beginning of South African History*, London, 1902, p.300. Apud *The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.186, note 1）。ボクサーは以上に加えてヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラの模範的なリーダーシップを指摘する（*ibid.*）。

ij. [2 de Julho]

† E como foy menhã, & conjũção de Maré vazia, atravessarão os Nossos á outra Ilha, na qual estava a Gente do Navio aposentada em Choupanas, feitas nella para seu gasalhado, nas quaes cõ grande vontade forão recolhidos & hospedados cxvij. Portugueses, & lxv. Escravos, que á ella chegarão salvos do Naufragio, & peregrinação. A qual fizerção em 3. Meses, & nelles caminharão mais de 300. legoas, posto que do penedo das Fõ/fol.149/tes dõde partirão té esta Ilha em que estavão, por linha dereita não saõ 150. legoas.

ロウレンソ・マルケスの河からモサンビークへ

南はロウレンソ・マルケスの河(現, デラゴア湾の一帯)から, 北はクァマの諸河川(ザンベジ河の流域)へ至るまでの略図。ヌーノ・ヴェーリョー行は, モサンビークからやってきた象牙取引船パンガイオに乗り込み 1593 年 7 月 22 日ウニャーカの島(前述)を出立。地図にも見えるコレンテス岬("Cabo das Correntes")を通過して 8 月 6 日モサンビークに到着。*O Lyvro de Plantaforma das Fortalezas da Índia da Biblioteca da Fortaleza de São Julião da Barra*, ed. Rui Carita, Lisboa, Ministério da Defesa Nacional / Edições INAPA, 1999 より

〔七月三日〕 翌日ヌーノ・ヴェーリョは，モサンビークからの船に食糧と水とがどれだけあるか調べたいと思った。カピタンであるマノエル・マリェイロに尋ねると，次のような答えが返ってきた。水夫の手持ちとして90カサーポ，すなわち約 700 アルケイレ[48]のトウモロコシがあります。マメとアメイショエイラ〔ソルガムか〕もありますし，船のタンクには水がいっぱい満たしてあります。タンクすべてを合わせればその容量12ピパ[49]に達しましょう，と。水の量はこれでも不充分と思われたので，ヌーノ・ヴェーリョの指示により，それまで蜂蜜（当地にはすこぶるおいしい蜂蜜がある）をいっぱいに詰めていたジャーを 15 個空にし水を詰め直した。ヌーノ・ヴェーリョは次のように命じた。モサンビークからの船の水夫が持っていたトウモロコシと蜂蜜とに対する支払いはモサンビークにおける時価をもって行なうように，と。トウモロコシの値は 180 クルザードに上り，蜂蜜のほうは 96 クルザードであった。旅を終えてもウシ19頭[50]が残っていた。実にウシこそわが食糧補給の偉大な助けであった[51]。

iij. [3 de Julho][52]

Quiz logo ao outro dia saber Nuno Velho os Mantimentos, & Agoa, que havia no Navio, & perguntandoo ao Capitão, disselhe, que os Marinheiros tinhão xc. Caçapos de Milho, que saõ algũs Dcc. alqueires, & Feijão, & Ameixoeira, & os tanques do Navio cheos de Agoa, nos queas poderia xij. Pipas, & porque era pouca, despejarãosse por ordem de Nuno Velho xv. Iarras, que hião cheas de Mel (que o ha na terra mui bõ) & encherãosse de Agoa. O Milho, & o Mel, logo o mãdou pagar aos Marinheiros, pello preço, que valeria em Moçãbique, que nũ se mõtou 180. cruzados & no outro 96. Sobejarão tãbem da jornada xix. Vacas, que foy hũ grande terço da Matalotajem. †

〔7月9日〕 食糧のことが指示されかつ実行に移され，さらにまた交易で得た象牙がバラストとして慎重にかつ均等に配置された。象牙は我らポルトガル人のため柔らかいベッドの役割を果たした。こうして 7 月 9 日我らの一団は乗船した。乗船したまま月の合[53]（それは 12 日であった）を待つためであり，それとともに吹くであろう西風を孕んで航海に乗り出すためである。我らがこうしてかなり早めに乗船を終えたのは，出帆のためには，ウニャーカの島のそばにある浅瀬の外側へ船を移動させ，そこで日和を待つ必要があるからだ。浅瀬の内側ではたとえ西

---

[48] 原綴り "algũs Dcc. Alqueires". "Alqueire" は昔の穀物・液体の容積単位で，地方ごとに差異はあるものの，リスボアでは1アルケイレ=13.8リットル。

[49] 原綴り "xij. Pipas". "Pipa" は容積単位で，1ピパ=25アルムーデ。

[50] 原語 "xix. Vacas". ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』所載のテキストによると「ウシ 119 頭」("cento e nove vacas") であるが (*História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, ed. António Sérgio, Vol. III, p.60)，当然初版本に従う。

[51] 原文 'Sobejarão tãbem da jornada xix. Vacas, que foy hũ grande terço da Matalotajem'. "hũ (grande) terço" は「(優に) 3分の1」の意味であるから，「ウシこそわが食糧の3分の1強を占めるものであった」という解釈も可能か。ボクサー英語訳を参照して訳出するが，論旨が本質的に変わるわけではあるまい。

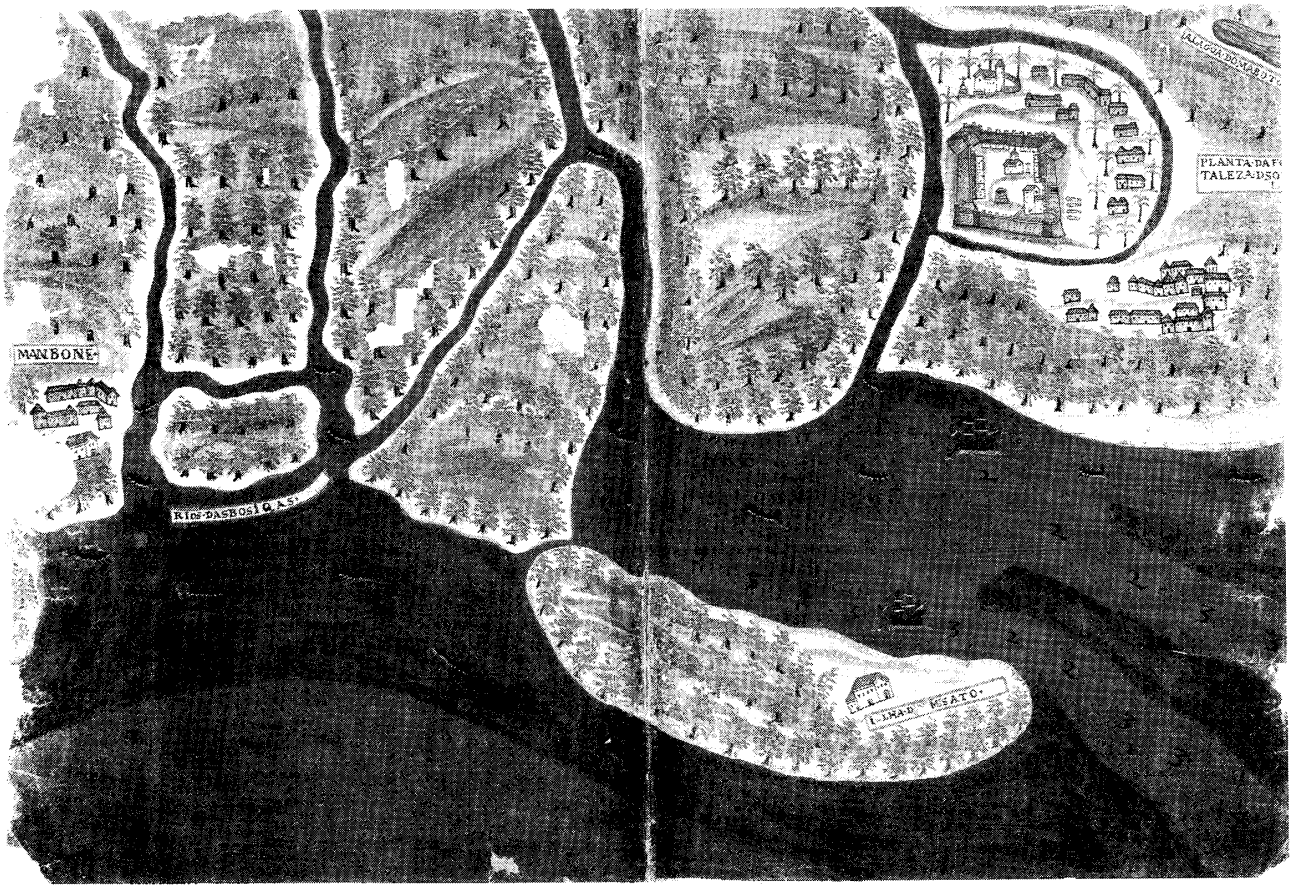
[52] テキストにはこの日付の記載なし。

[53] 原語 "a conjũção da Lũa". 月は太陽の光を反射して輝いているため，月・太陽・地球の3つの天体の位置関係によって，見かけの形が変化する満ち欠けの現象を起こす。テキストにおける「合」とは，地球から見て月が太陽と同じ方向にある新月（朔）か，月が太陽の反対方向に来る満月（望）のいずれかを指す。満ち欠けは朔から朔までの時間，朔望月（29.530589 日）を周期として変化し，満ち欠けの程度は，朔の瞬間から経過した時間を日単位で表わした月齢で示される。したがって満月のときの月齢は 15 に近い。ヌーノ・ヴェーリョ一行を乗せた船は 7 月 12 日に見込まれる合（朔もしくは望）に合わせて解纜をもくろんだのであるが，期待した西風は吹かず，約 2 週間後に訪れる次回の合を待つことにしたわけである（実際は予定よりも早く西からのモンサンに恵まれてモサンビークへの出帆を果たした）。

風を孕んでも，出港はおぼつかないのだ。

ix. [9 de Julho][54]

† A qual assi ordenada, & feita, & o Marfim do resgatte por lastro, muy bem arrumado, & igoalado pera servir de camas móles, á estes nossos Portugueses, embarcarãosse a ix. de Iulho pera esperarem no Navio a conjũção da Lũa, que era a xij. & cõ ella os Ponentes, pera fazerem sua /fol.150/ viajem, & anticipasse tãto a embarcação, porque pera partir o Navio, se ha de por fora de hũ baixo, que esta perto da Ilha, onde se espera o tempo, que á estar dentro delle, não pode sair cõ o mesmo Ponente. †



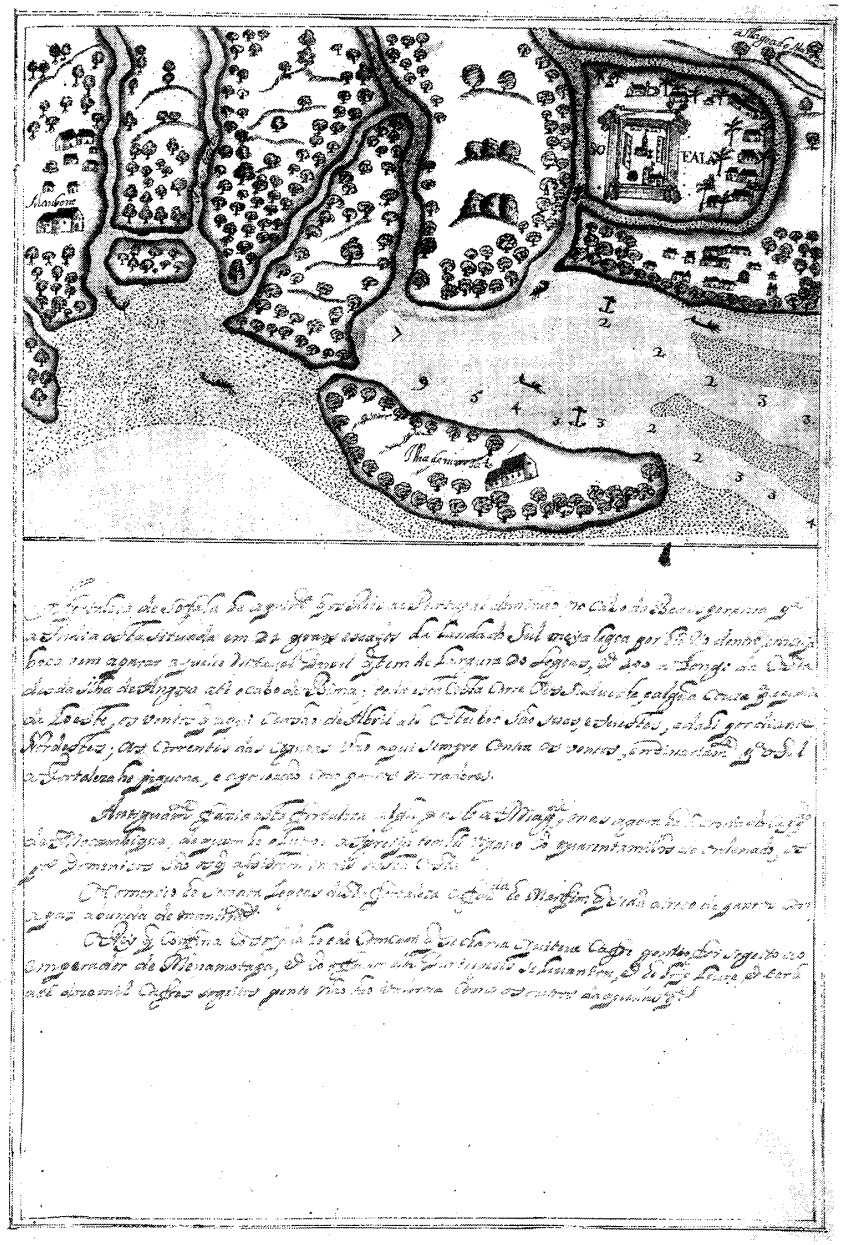
ソファーラの要塞図

ウニャーカの島で順風を待つことに辛抱しきれなくなった一部のポルトガル人は，ヌーノ・ヴェーリョの合意を得たうえでソファーラへ陸路前進することに決する。が，そのほとんどは道中カフル人のために殺され，僅かふたりだけが生きてソファーラへ到達したという。António Bocarro, *O Livro das Plantas de Todas as Fortalezas, Cidades e Povoações do Estado da Índia Oriental*, vol. III より

船には人々がどんどん詰め込まれ，その総数は 280 人に達した。混雑はきわめてひどくなり，同船のピロット(バプティスタ・マルティンスという者で，かつてナオ船サン・トメ号の水夫であった)は次のように言った。こんなごたごたした船を操る勇気は私にはとてもない。船だってこちらの意志のまま動いてはくれないだろう。だからここは

[54] テキストにはこの日付の記載なし。

ひとつ相当に思いきった手段に訴える必要がありそうだ，と。カピタン・モールは会議を召集し，その場で次のように取り決めた。すなわち，同船の水夫は妻子もろとも陸に置き去りにすべし。水夫はムスリムであり，彼らなりに当地ではポルトガル人以上にたくましく自活してゆけるであろう，と。さっそくこの決定が実行に移された。ムスリムは全員下船させられた。むろん妻子も家財道具も一緒に。下船させられたムスリムの総数は 45 人である。彼らはこうした扱いにもよく自制を保った。ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラが施すよう命じた充分なる報償と弁済のおかげであった。ムスリムたちが陸路モサンビークへの旅を行なうことに明るい見通しを懐いたのも，そうした報償と弁済とがあってこそであった。すなわち，浜に残された蜂蜜と，ポルトガル人の携えてきたトウモロコシがそのままムスリムたちへ与えられた。これだけの見返りをもってすれば海路を経る以上に陸路を辿る実入りは大きかったし，彼らにとっても決して悪い話ではなかった。



ソファーラの図

O Lyvro de Plantaforma das Fortalezas da Índia da Biblioteca da Fortaleza de São Julião da Barra, ed. Rui Carita より

† Metidos no Navio hũs, & outros, que fazião numero de 280. pessoas, ficou tão embaraçado, que disse o Piloto delle (chamado Baptista Martinz Marinheiro que fora da Nao S. Thome) que se não atrevia governalo, nem se poderia marear, pello que se tomasse algũ meyo em tamanho excesso. Chamou o Capitão Mór à cõselho, & nelle se averigou[55], que deixassem em terra os Marinheiros do Navio, cõ sua Molheres, & Familias, os quaes erão Mouros, & como taes teriaõ nella milhor remedio, que os Portugueses. Logo se pos esta determinação em effeito, & desembarcarãosse todos os Mouros cõ suas Familias, & fato, que erão xlv. pessoas. O que elles sofrerão bem com a boa paga, & satisfação, que Nuno Velho Pereira lhes mandou dar, com a qual esperavão fazer a jornada por terra á Moçãbique, mais proveitosa, & aventajada, que a /fol.151/ que podião fazer por Mar, no seu Mel, que ficou pella Praya, & no Milho, que levavão os Portugueses. †

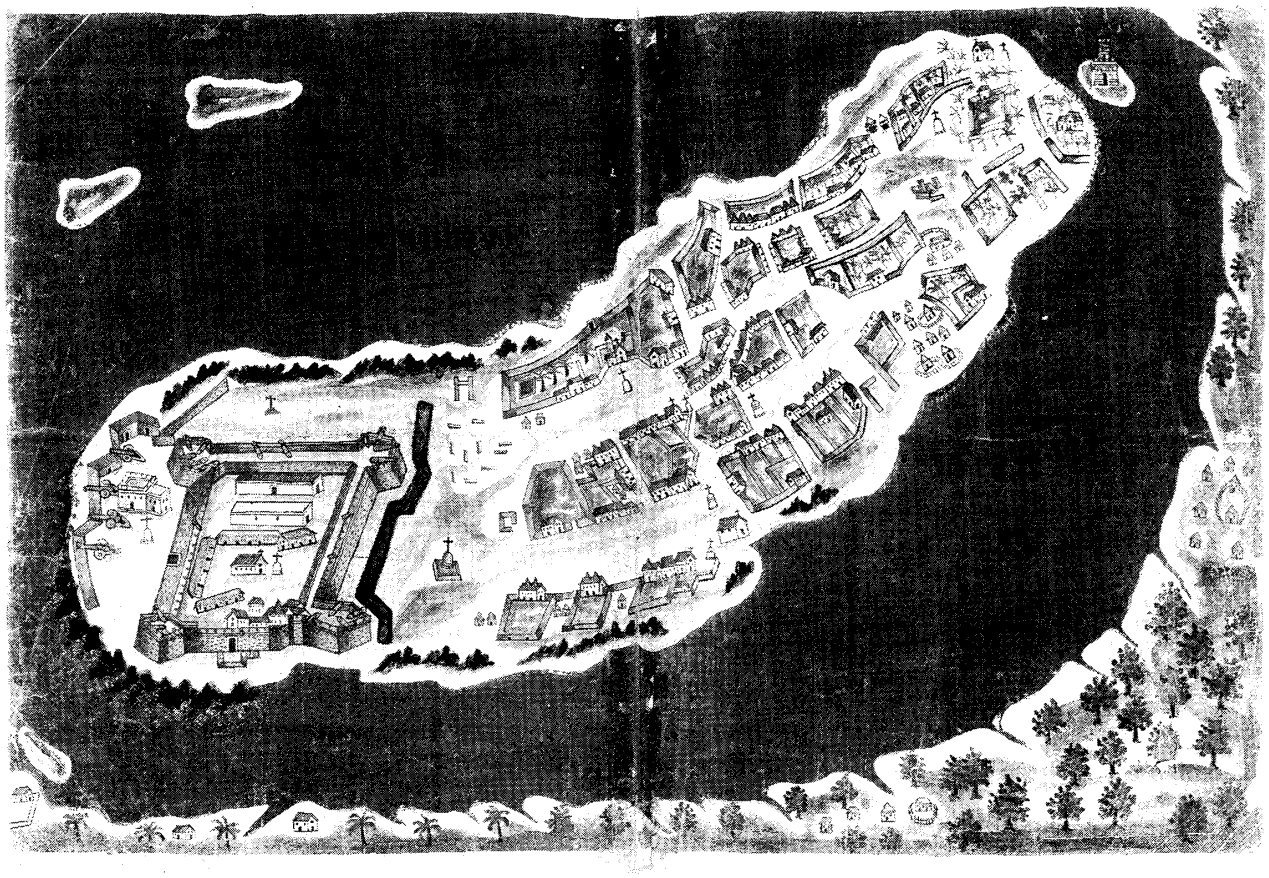
船はこうしてずっと身軽になった。やがて月の合(ごう)が訪れた。ところが風は相変わらず東からであり，次回の月〔の合〕を待たざるを得なくなった。このため数人のポルトガル人がいらいらを募らせた。船の狭苦しさや水の乏しさに不平不満が昂じたあげく，ついに彼らは陸路ソファーラまで行く決意を固めた。そこからソファーラまでは 160 レゴアである。ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラは連中がおのれの一団から離れようとしていることにはなはだ気分を害したけれど，連中の決意の堅さを見，残る者にとってはかえって好都合であると考え直して，彼らに陸路を行く許しを与えた。ヌーノ・ヴェーリョからは必要な弾薬一切をつけてエスピンガルダ銃 8 丁，150 クルザード分の銀製品，そして少なからぬ衣服が与えられた。総勢 28 名に上るこのポルトガル人の隊長となったのはバルテザール・ペレイラという名の兵士である。渾名をレイノール・ダス・フォルサス[56]という。彼らは船を下りるやただちにボート 2 艘の準備を整えた(このボートは，モサンビークからの船がロウレンソ・マルケスのもろもろの河で物々交換を行なうため積んできたものだ)。彼らはこの 2 艘に分乗して湾の対岸へ，つまりマニーサの河へ渡った。彼らはそのままかの土地を前進したのであるが，その無秩序ぶりは眼に余るものであった。彼らの辿った道は，ナオ船サン・トメ号から命拾いした少なからぬポルトガル人も旅したことのある途切れのない道であったし，その旅のことは繰り返し語られてもいたのに，ほとんどがカフル人のために殺されてしまった。生き延びてソファーラへ到達したのはたったふたりであった。

† Desembaraçado por este modo o Navio, & chegada a cõjunção da Lũa, ficou o tempo Levante dõde estava, & assi foy necessario esperar á outra Lũa seguinte. De que enfadados algũs Portugueses, & assi da estreiteza do Navio, & carestia da Agoa, determinarão de hir por terra té Çofala, que erão daly cento & sessenta legoas, & posto que Nuno Velho Pereira sentio muito quererense apartar da sua Companhia, vendo a sua resolução, & como era em beneficio dos que ficavão, lhes deu licença, & oyto Espingardas com toda a Munição necessaria, & cento & cincoenta cruzados em péças de Prata, & muita roupa. Foy por Capitão destes Portugueses, que erão vinte & oito, hum Soldado chamado Baltesar Pereira, de alcunha o Reynol das forças, os quaes desembarcados, aprestarão duas embarcações (que o Navio trouxe, pera fazer o resgatte pellos Rios) em que passarão á outra banda /fol.152/ da Baya, ao Rio do Manhiça, & fazendo seu caminho por aquella terra, fizerão tantas desordens, que sendo a estrada seguida, pella qual forão muitos Portugueses da Nao S. Thome, & as jornadas contadas, forão todos mortos dos Cafres, & só 2. homens desta cõpanhia chegarão á Çofala.

---

[55] 海賊版には "se averiguou" とある。

[56] 原綴り "Reynol das forças". 「腕っ節自慢の本国(＝ポルトガル)人」くらいの意味か。



モサンビークの要塞図

António Bocarro, *O Livro das Plantas de Todas as Fortalezas, Cidades e Povoações do Estado da Índia Oriental*, vol. III より

〔7 月 22 日・8 月 6 日〕 モンサンが到来してヌーノ・ヴェーリョー行を乗せた船（ノッサ・セニョーラ・ダ・サルヴァサン〔我らが救済の聖母〕号という）は 7 月 22 日モサンビークへ向けて出帆した。船はカーボ・ダス・コレンテス〔コレンテス岬〕からなるべく離れぬ針路をとったが，激しい南からの突風が襲い，ナオ船サント・アルベルト号で体験した以上に破滅を実感せざるを得なかった。おびただしい食糧が海へ投棄された。2 日間の暴風を抜け出した後，静穏さが戻った。そのまま好天に恵まれつつ 8 月 6 日モサンビークへ到着した。全員が下船するや，ドミニコ会の修道僧（彼らは我らの到着を事前に知り，浜へ出て待っていてくれたのだ）とともに行列を組み，ノッサ・セニョーラ・ド・バルアルテの礼拝堂[57]へ赴いて，我らが贖い主イエズス・クリストへ，そしてその母君なる聖処女へ繰り返し感謝を捧げた。このたびの難船とそれにひきつづく旅路にあって，その至聖にして寛大なる御手より賜わった格別の聖寵と，ただならぬ恩恵に対する衷心よりの感謝である。

完

Vinda a Monção, partio o Navio (que se chamava N. Senhora da Salvação) aos 22. de Iulho a[58] Moçãbique, & metido do cabo das correntes pera dentro, ouve hũ tempo Sul, tão rijo, que se tiverão os Nossos, por mais perdidos, que na Nao S. Alberto. Alijarão muitos Mãtimentos ao Mar, & passados dous dias desta Borrasca, voltou Bonãça,

[57] 原語 "Nossa Senhora do Baluarte". 「要塞の聖母」であるが，冒頭に "capela" もしくは "igreja" が省略されるか。

[58] 初版本では "paMoçãbique" と読める。正しくは "pera Moçãbique" もしくは "a Moçãbique" である。

cõ que chegarão á Moçãbique á vj. de Agosto: onde desembarcados todos, forão em procissaõ cõ os Frades Dominicos (que avisados os esperavão na Praya) á Nossa Senhora do Baluarte, dando graças á IESV Nosso Redemptor, & á Sacratissima Virgem sua Mãy pellos extraordinarios beneficios, & singulares merces recebidas de suas divinas, & liberaes maõs, neste seu Naufragio, & jornada.

FIM

モサンビークの図

下段のキャプションに見えるとおり，モサンビークの要塞はアフリカ東南部，海岸近くの一小島にインディア副王ドン・フランシスコ・デ・アルメイダが 1505 年に建設。ヌーノ・ヴェーリョー行をモサンビークで出迎えたのはドミニコ会宣教師たちであったが，キャプションに見える "os padres da ordem dos pregadores"(「説教者の修道会のパードレたち」)とはドミニコ会士のこと。島の中央に見える "S. Domingos" は彼らのための教会であろう。その下には "mizaricordia (Misericordia)" と呼ばれる慈善救貧院，さらには "hisprital (Hospital)" すなわち病院も見える。*O Lyvro de Plantaforma das Fortalezas da Índia da Biblioteca da Fortaleza de São Julião da Barra*, ed. Rui Carita より